AM
JuJu
戦国魔神ゴーショーグン
はるか海原の源へ
もと
作／首藤剛志
絵／天野喜孝

戦国魔神ゴーショーグン

はるか海原の源へ

首藤剛志

昭和24年8月18日、福岡県生まれ。脚本家。「ゴーショーグン」「ミンキーモモ」が代表作。この小説版「ゴーショーグン」シリーズやオリジナルの「永遠のフィレーナ」など、最近は小説家としての活躍が目立つ。

天野喜孝

昭和27年3月26日、静岡県生まれ。本職はアニメのキャラデザイナーだったが現在はむしろＳＦイラストレーターとして活躍中。「キマイラ吼」「吸血鬼ハンターＤ」(朝日ソノラマ)などのさし絵が人気を集めている。

戦国魔神ゴーショーグン

はるかな海原の果へ

首藤剛志

海の惑星にたどりついた6人組の前に異形の生物が出現！（P45）

密林そのものが生き物のようにレミーたちを襲う（P125）

レミーはミレイに自分の思いのすべてを託す……（P166）

目次

プロローグ……10

第1章　海の惑星——大気圏いきあたりばったり……13

第2章　未知の呼び声——わたしにも話せます……37

第3章　行先のない翼——神様になる方法教えます……63

第4章　禁断の山へ——教育革命速習法……101

第5章　氷上の激闘——スケーターズワルツ……129

第6章　まるで鏡のように——わたしがあなた?……157

第7章　帰路のない旅立ち——家出娘（シップ）はもどれない……185

第8章　創造主との戦い——負けるな落ちこぼれ……209

あとがき風の予告編……242

戦国魔神ゴーショーグン

はるか海原の源へ

首藤剛志

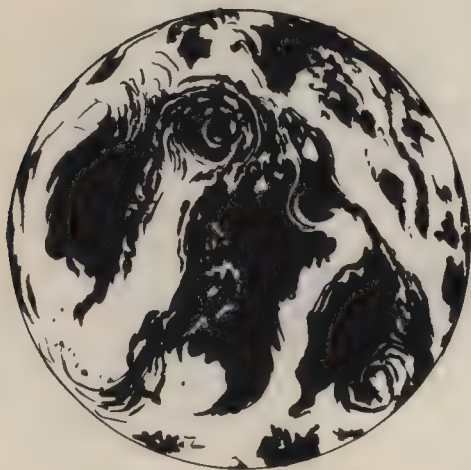
プロローグ――望郷の海原

夜空を、丘の上の焚火の火の粉が焦がしていた。
丘の向こうは、どこまでも果てしない海原が広がっている。
焚火を囲む人と動物達は、闇にざわめく海原をじっと見つめていた。
その丘は、海の中にわずかに突き出した山と、森林のある陸のはずれにあった。
遠い昔、幾隻もの巨大な海の家に乗って、人と動物達は、この陸にやってきたという。
だが、狭い陸地は多くの生き物の生存を許してはくれなかった。
食べ物も水も少なく、彼らの数は次第に減っていった。
彼らは、やがて、この陸地から滅び去る日が来るのを本能的に知っていた。
彼らは滅びの前に、海の向こうの故郷を、一目、その目で見たいと思った。
しかし、海は、人と生き物達にとって、足を踏み入れてはならぬ領域だった。
彼らの本能のどこかで、警告が聞こえていた。
〝決して海に出てはいけない〟
しかし、彼らの思いの中に、もう一つ別のものも芽生えていた。
いつか誰かが、空の彼方から舞い降りて来て、彼らを海の向こうの故郷に連れていってくれるに違いないと――。
誰かとは、おそらく彼らにとって神に等しいものだったろう。

彼らは、夜になると、丘の上で、火を燃やし続けた。
焚火は、神への道標（みちしるべ）のつもりだった。
けれど、神はなかなか現れてはくれなかった。

第1章

海の惑星

大気圏いきあたりばったり

——いったい、あの星に何が待っているのか？——

真吾、キリー、レミー、そしてブンドル、ケルナグール、そして肩にカラスを止まらせたカットナルは、ただ黙って青い星を見つめていた。

青い星の表面には、ところどころに純白の雲海が、風になびく白鳥の胸の羽毛のように漂っていた。

青い星を分析した宇宙船のコンピューターは、この星の青さが海であるのを弾き出した。それも地球とよく似た成分の海で、空気も地球と変わってはいなかった。

地球型の星……六人は安堵した。六人は、少なくとも宇宙服なしで生きていけそうだ。

だが、前の星から瞬間移動した彼らには、そこが宇宙のどこに位置し、地球を飛び立った日から、どれだけの時間が経ったのか、それともどれだけ過去に戻ったのか、分かるはずもなかった。

しかし、六人にとって、それを口に出す気もない。

どこに辿り着こうと生き抜くつもりだし、それを諦めないつもりだ。

「とりあえずは腹ごしらえ……と……」

レミーはみんなの食料を探しに、宇宙船の食糧庫に入った。

だが、以前の星を着のみ着のままで飛び出した一同に残された食糧は、ほとんどなかった。

「当分ダイエットか……これじゃ、一食分で二日はもたせなきゃ」

とりあえず、一同の一食分の食料を持って操縦室に戻ることにした。

レミーは操縦室のハッチのそばまで来て、ふっと足を止めた。

そこには、小さな窓があり、外が見えた。

窓の外の青い星が、さっきよりずいぶん大きく見える。
――あそこに行けば、なんとかなるわよ。いままでだって、なんとかなってきたんだもん――
そして、ふと、窓に映る自分の顔に気づいた。
――今まで何万年分を旅したのか知らないけど、レミー、あなたは、今もしっかり二十代前半の女の子？　かな？――
レミーは、記録にある自分の歳を頭の中で足してみた。
ずいぶん不明瞭な時間が多い。
しかし、レミーは決めることにした。
――うん！　たぶん二十代……。ずいぶんこんがらかっちゃってるけどね……。いいわ、何年たっていようが気にしない、気にしない。女の子が自分の歳が気にならないっていうのは悪いことじゃないわ――
それでも、髪をもう一度整えながら、窓に映った自分を観察した。
そして、ほほえんだ。
――うん。よろしい。お肩のお迎えもまだ来てないし、どっから見ても二十代前半……。確かにハイティーンの時は、二十過ぎたらオバンじゃ……、大人になりたくない……なんて、思ったこともあったけど、しっかり大人の女も悪くないわ。大人だって夢もある、恋もあるってね……かな？――
そこまで思って、操縦席の周りで、計器と青い星を交互に見つめ検討している五人の男達を、チラッと見てつぶやいた。

「恋か……」
今のところ、レミーの手の届く宇宙には、この五人しかいないのだ。
——恋ね……。この五人が相手じゃ……、四十過ぎて、本当にオバさまになっても……、恋なんか出来るかな……。馬鹿ね。歳は考えるなというのに……。それにしても、時空を超えたノンラヴ・ガールなんてね……。あ〜……、いかんな。こら！……、レミー、お前、最近、欲求不満とちゃうか？——
レミーは、コツンと頭を叩いて、窓に映る自分に舌を出した。
その時だった。
宇宙船のブザーが鳴った。
レミーは素早く、操縦席の五人に駆けよった。
「何かお呼びがあり？　わたしに？」
操縦席で、エンジン微調整レバーを動かしているキリーが答える。
「いや、なんにもないさ、レミーにはね。……ただ、宇宙船はあの星に降りたがっている。食い物は後にして、シートに座ってベルトをしめな……」
「了解……」
レミーはサイドテーブルに食料を放り込むと操縦席の後ろのシートに座った。
「ずいぶんお急ぎなんだ」
やはり、キリーとともに宇宙船を操縦する真吾がレミーに言った。
「宇宙船のエネルギーが切れかかっている。あの星の周りを人工衛星になって回っている余裕もな

い。これ以上、少しでもエネルギーを使えば二度と降りられなくなるんでね」
真吾の声は、レミーが意外に思うほど、いつになく暗かった。
——？……この程度の危険は、真吾にとっていつものことだったのに——
レミーは、何も訊かずに肩をすくめた。
「ま、他にお邪魔する星がないんじゃ、仕方ないんじゃない？　無断で降りちゃ、怒られちゃうかな……」
「あの星は、一点の陰りもなく青く美しい。だが、美しすぎるのは危険でもある。美には、時にシミも必要なのだ」
隣に座っていたブンドルが、青い星から目を離さずに呟いた。
「えっ？」
訊きかえすレミーに、操縦レバーを操りながら、キリーが答えた。
「あの星には、何もない。森も林も山も川も……何もかもない」
レミーの後ろの席に座っていたカットナルがうめいた。
「空飛ぶカラスも、わしの肩がなきゃ、降りようがないわい」
肩のカラスもこころなしかうなだれて、鳴き声もない。
カットナルの隣に座っている、元ボクシングチャンピオンのケルナグールの、蚊の鳴くような声が後ろで聞こえた。
「ガキの頃のわしゃ、ボクサーのハンマーパンチが、水に浮くはずがない、なんてイキがってなあ……、プールに一度も行かなかったんだ……。グググ……」

「何が言いたいわけ?……」
「わし……、わし……、泳げないんじゃ!」
事情を聞かなくても、レミーにもケルナグールの言葉から、今、みんなが何を思っているかが分かった。
「まさか……、あの星は……。そういうことなの?」
ブンドルは黙ってうなずいた。
操縦席の真吾がブンドルの代わりに答えた。
「あの星には、俺達が降りる陸がないのさ。少なくとも、我々に顔を見せているこちら側の面にはね——」
だが、あの星のかなりの部分は白い雲で包まれている。
「綿毛の下にかくれんぼしていないのかしら?」
「とっくにセンサーで調べた。……きれいさっぱり海だけだ」
「そんな……、水の惑星っていわれる地球だって四分の一は陸地だっていうのに……」
「地球型の星ではあっても、あれは地球ではない。あの星のこち側に陸地がない以上、裏側にも、陸地のある確率はないな」
ブンドルが、他人事のように言った。
「北極や南極にはどう? かりに陸はなくても、お水ですもの、寒けりゃ凍って氷になるでしょ。オンザロック(氷の上)で、私達、エスキモーやりゃいいんだわ」
「ここから見てれば分かろうというものだ。極地に氷はない……。今までのデータによると、この

星は、どうやら一回自転する間に、すなわち一日一回、地軸が二十五度近く首振りをしている」
　ブンドルはさらに平然とした口調だ。
　この男は、窮地に追い込まれれば追い込まれるほど落ち着いてみえる。
「一日一回ずつ、首振り？……」
　レミーが訊き返した。
「うむ。だから、北極も南極も毎日、太陽にさらされる。極地の水も暖められ、氷ができるほど冷たくはならない……」
「そう、この星の海は、酒でいえば一年中人肌のぬるかんだ」
「氷抜きの、水割ってわけ？」
「悪酔いしそう……」
　レミーはげんなりと言った。
　ケルナグールは二人の話などどうわの空で、手の平を見つめていた。
「わしゃ、水かきが欲しい」
「あんただけじゃねえよ」
　キリーが計器から目を離さずに言った。
「俺だって、ブロンクスの狼だ。狼の出来る泳ぎは、犬かきがせいぜいさ。オットセイみたいな真吾や、お魚みたいなレミーと違ってな」
　真吾は反論する気もなく、ぼそりと、
「俺はオットセイ……、精力絶倫か……」

「サンクス、キリー……、お魚って言ってくれて」
泳ぎに自信のあるレミーは、一応礼を言って、
「でも、私だって人魚の尻尾は持っていないしね……。二本の足の人間で、そのお話を聞いたら、やっぱり声もでないわ」
アンデルセンの童話にひっかけて、そう言ってはみたものの、レミーは自分でも笑えなかった。
青い海はもう全体が見渡せないほど近づいている。
「やるだけやろうぜ。大気圏の突入のタイミングを間違うなよ」
真吾がキリーに言った。
「言うなってーの、教科書通りのこと。母なる海も女の子も、突っこむ時期が大切だってね。お前さんより俺の方がテクニシャンよ」
しかし、宇宙船があの星に降り着いた直後に起こる事態は、分かりきっている。
金属の宇宙船が水に浮くはずもなく、ただちに鉄の棺桶と化してしまうだろう。
レミーはパチンと指を鳴らした。
「そだ！　いかだをつくりましょ……」
今さら作っている時間もないのに、レミーは言ってみた。
無駄ではあっても、危険がせまっている時には、馬鹿な話をして気をまぎらわすのが、昔からレミー達の癖だった。
「いかだ？　いかだねぇ」
真吾が肩をすくめた。

「そ、宇宙船の中から水に浮きそうな物を集めてね……。タイトルは、宇宙流れ者六人衆、ロビンソン漂流記。ちょっと字あまり、だったりして……。どうかしら」
「けれど、食い物はどうするのかの」
それが、何より一番気になるケルナグールが訊いた。
食糧庫に、食糧がほとんどないのを黙って、レミーは明るく言った。
「お魚釣ればいいじゃないの、一応、海なんだから。いるわよ、お魚がきっと」
それまで黙っていたカットナルが、いかにも医者が患者に注意するように言った。
「諸君、人間は野菜も食べねばだめだよ。ビタミンC不足は風邪の元じゃよ」
「それに……」
ブンドルが呟いた。
「日本料理をたしなむわたしやレミーや真吾君はともかく、他の三人は耐えられるかな？　生の魚に……」
「生の魚？　生で食うのか？」
口に入る物ならなんでも、それこそ木魚でも消化してしまいそうなケルナグールが、いまいましそうに言った。
昔、フライドチキン会社を経営していたケルナグールにとって、日本料理店やスシバーは天敵……、ヤキトリならまだしも、スシやサシミは、キリスト様から仏様まで、全世界の神様に、一生食べませんと願をかけた代物だった。
だが、食い気には勝てない。すぐ気を取り直し、

「わし、焼き魚ならいけるがの」
カットナルが、どうしようもない奴だ……とでもいいたげに、
「どうやって焼き魚を作るっていうの」
「あん？」
「エネルギーじゃよ、エネルギー問題。わしらが燃やすとしたら、いかだしかなかろう。いかだを焼けば、わしらはど〜なる？」
「グググ、こんどはこっちが魚のエサ……、海に落ちてな……」
「そういうことよね」
いかだの話を言い出したレミーが、こともなげに言って、結論を出した。
「結局、陸地のない所の漂流は、漂流とは呼ばないのよね。ただひとときの浮かれごと……、我に待つのは——沈むボッチャン」
それまで、このいかだ談義に参加しなかった真吾が、よせばいいのに、さらに結論を出した。
「いかだのアイデアは、タコだな」
一同は黙ってしまった。
真吾は時々、日本人の、それも限られた人間にしか分からない駄洒落をいう癖があり、誰にも分かってもらえず、やはり今回も自分でシラケてひとこと言った。
「そろそろ大気圏の大危険です」
やっぱり、みんな沈黙していた。
今度のはいくらか理解できたが、下手な駄洒落の大危険より、目先の大気圏の方が気になった。

一同のだんまりをとりなすように、キリーが口を開いた。
「ところでだ、前の星の大騒ぎで、この宇宙船はあっちこっちがいかれている。おそらく大気圏に突っこむと、ギッコンバッコン揺れちまって、今のようになごやかにくっちゃべっていると舌をかむぜ。だから今のうちに言っておくよ。この宇宙船は、大気圏突入後、ある高さで目いっぱい水平エンジンを噴かす。その勢いで、この星の裏側に向かう。すぐにエネルギーが切れ、それからあとは、落ちるだけだ。裏側には、やっぱり海しかないかもしれねえ。けど、陸があったら、落ちながらそこへ向かうつもりだ。そしてパラシュートを開いて着地させる。もっとも、どうせ飛んでる時間は十分もねえだろう。陸があったにしたって、たった十分で見つけられるかどうか分からねえし、そうなりゃ、海にボチャン。お分かりね」
キリーはそれ以上は語らず、パチンと指を鳴らした。
「OK、お時間です。では、ご一緒に……」
キリーはレバーを引いた。
宇宙船は、ぐんぐん、大気圏に突っ込んで行った。
たちまち窓の外が赤く燃え出し、激しい震動が宇宙船を揺らした。
激しい震動の中で、操縦席の計器は、ほとんど読みとれない。
それでも、先刻とは裏腹の鋭い目つきで計器をにらみつけていた真吾が、いきなり親指をたててみせた。
——いまだ！——
キリーは頷（うなず）くと、側面エンジンのレバーを叩き込んだ。

ズン！

横なぐりの衝撃が操縦室を襲った。

それまで頭から突っ込んでいた宇宙船は、側面エンジンの横からの力で、空中で激しくスピンした。

そして、船体が青い星の表面と水平になった瞬間、キリーは側面エンジンを切り、同時に真吾はメインエンジンのスイッチを入れた。

タイミングはピタリと合っていた。

それは、キリーが最初に側面エンジンのスイッチを入れてから一秒もたっていなかった。

後部のメインエンジンがフルパワーで火を吐いた。

巨大な宇宙船は、青い星の空を水平に飛び出した。

いや、飛ぶというより、水平に発射された大砲の弾のようであった。

その瞬間の速度は、地球でいうなら音速の三十五倍を超えていた。

かつ、地球の大気圏内での最高の速さは、アポロ10号の司令船が大気圏内に突入した時に出した速さ——音速の三十九倍だといわれている。

だが、六人を乗せた宇宙船ほど巨大な飛行物体が、空気の中を水平で、これほどの速さで飛んだことはなかっただろう。

一瞬のうちに、エンジンエネルギーは使い果たされた。巨大な船体は次の瞬間、空気抵抗の重圧で粉々に弾(はじ)け飛んだ。

しかし、先端の操縦室の部分だけは、まっしぐらに空を突き進んでいた。

操縦席は、まさに宇宙船から撃ち出された砲弾だった。
だが、操縦室を飛ばす推進力は何もなかった。
どんなに早い砲弾も、そう長くは飛んでいられない。いずれは重力に負け、落ちてしまう。
……それまでに陸を見つけなければならない。
操縦室はもみくちゃに揺れ、回転しながら青い星の裏側へ飛び込んでいった。
そこは夜――。
窓の外は闇だ。
真吾とキリーは、陸地をセンサーする計器を見た。
しかし、烈しい回転の中で計器の判別は無理だ。
センサーの反応音に耳をすますしかなかった。
後ろの席の四人は声もなかった。
事実、ケルナグールとカットナルは先刻の衝撃で気を失っていたし、カラスは、どうしようもない危険にさらされた時に見せる、動物特有の死んだふりをしていた。
死んだふりをしたいのは、レミーもブンドルも一緒だ。
だが、スパイ出身のレミーは、この程度の苦痛には、敵に捕えられた時の拷問で慣れている。
酒を飲んだ翌日の二日酔いの、ひどい頭の痛さに耐えられる体の持ち主、ブンドルは、むしろ酒を飲まずに感じられる頭の揺れが心地良くさえあった。
今、二人は黙って、真吾とキリーの座席を見つめている。
真吾やキリーの操縦に、何も言うことはなかった。

操縦法の確かさは、レミーもブンドルも舌を巻いていたし、自分が操縦席にいたとして、彼らほど的確に操作できているかどうかは分からない。
ブンドルの顔が微笑した。
——私は今まで、この二人の粗野な男達を美しいと感じたことはなかったが、今の後ろ姿はみごとだ。この日の大気圏突入について、レミー・マルタンの一般普及品、V・S・O・Pを飲み交わしながら、男三人だけで語りあかしたいものだがな——
しかし、レミー・マルタンの高級品、ちと値段のはるルイ十三世をくみかわしてとは、決して思わない自分に少しだけあきれてもいた。
あとの問題は——。
真吾とキリーが、いつ、パラシュートを開くか……だ。
ガクン！
それまでの震動と回転に、新しい力が加わった。
絶えず上下が入れ換わる回転運動の中で、並の人間なら分かりにくいだろうが、目をさましている四人にははっきりと操縦室の動きが分かった。
明らかに落下を開始したのだ。
もうすぐ水面に落ちる。
陸地を示すセンサーの音は、沈黙したままだ。
操縦室の回転運動が緩やかになってきて止まった。
操縦室の天井と床の重さの違いが、回転を止めさせたのだ。

だが、その時、真吾とキリーは操縦席のセンサー表示を見て呆然となっていた。
「感知不能」
センサーは、何の作動もしていなかった。
さっきのメインエンジンの衝撃で破壊されたらしい。
──これでは、かりに、この星の裏側に陸があったにしても、分かるはずがなかった。
飛んでいる操縦室の真下が陸であるか海であるか、今、現在ですら、センサーでは分からないのだ。
真吾とキリーは天を仰いだ。
──有視界しかない。馬鹿な、この夜の闇の中でか？──
二人は、一応、窓の外を見た。
やはり、暗闇以外何も見えない。
二人は同時に同じことを思った。
──もしかしたら、この下は陸地かもしれない──
しかし、すぐにその思いを捨てた。
この星の表側に、陸はなかった。
今、この下に陸がある確率だって、ゼロに近い。
その時、ガクンと高度計が下がった。
落下のスピードが早まった。
この星の表面に落ちるまで、もう一分もない。

このままの速さで落下すれば、そこが海面でも、激突の衝撃は地面と同じだ。
——イチかバチか、パラシュートを開こう。宝くじより確率は悪いが、博打は嫌いじゃない——
キリーはパラシュートのレバーに手をかけた。
だが、その手の上に真吾の手がそっと乗り、ゆっくりレバーから手をはずさせた。
キリーは真吾を見た。
真吾は窓の外をじっと見つめている。
キリーは真吾の気持ちがすぐに分かった。
見えない空の闇にじっと目を凝らして、陸地の手がかりを探そうとしているのだ。
——この期におよんで往生際の悪い奴ちゃね。ま、そっちがその気なら、諦めの悪さはこっちが上だ——
キリーも、じっと窓の外を見つめた。
一秒一秒がとてつもなく長く感じられる。
十秒がたった。
操縦室は加速度を増して落ちている。
——いよいよパラシュートを開く時期か——
真吾はパラシュートのレバーに手をやった。
その時だった。
キリーの手が、真吾の手をレバーからはずした。
「ん？」

真吾はキリーを見た。
キリーは窓の外から目を離さない。
真吾は苦笑した。
――やる気だな――
真吾も窓の外に目をやった。
――よし、どこまで頑張れるか、お互い、やれるだけやってやるぜ――
レミーは、そんな二人を見て呆れた。
――この期におよんで、なにを子供みたいにつっ張ってんの――
しかし、その顔は微笑んでいた。
ブンドルも微笑を浮かべながら、二人を見守っていた。
二十秒がたった。
もう、操縦室はほとんど垂直に近い角度で落下していた。
真吾とキリーに同じ思いが浮かんだ。
――どうやら俺達は、我慢しすぎた。もう、パラシュートも間に合わんかもしれん――
二人は、それぞれに肩をすくめた。
その時だった。
二人の目に生気が走った。
闇の中に何かが見えたのだ。
なにかの灯が！

真吾とキリーの手が同時にパラシュートのレバーを力いっぱい引いた。
三十秒前だった。
そして、さらに十五秒して、いきなり烈しい衝撃で操縦室の落下速度が落ちた。
パラシュートが開いたのだ。
落下に抵抗する突然の浮力の出現に、操縦室は、大きく空中でバウンドした。
「な、なにごとじゃ！」
ショックで目を醒ましたカットナルが叫んだ。
主人が正気を取り戻したため、勇気づけられたカラスも、死んだ真似を止めて鳴きわめいた。
真吾が怒鳴った。
「黙れ！　舌かむぞ！」
あまりの剣幕に、カットナルはカラスのくちばしをむんずと握って、自分も口を閉じた。
次の瞬間、今までにない鈍い衝撃が操縦室をつらぬいた。
そう――。
今、着いたのだ。
どこかに……。
だが、パラシュートの開きが遅く、ショックは小さくなかった。
真吾とキリーの操縦席の間の床にパックリ亀裂が開いた。
泡だった水が、みるみる吹き出してくる。
――しまった、やっぱり海の上か――

真吾はシートベルトをはずそうとした。
シートベルトをはずしたところで、海へ落ちたなら、たちまち操縦室ごと海の底だ。
はずす意味はなかったが、本能的なものがそうさせたのだ。
だが、シートベルトは、はずれなかった。座席のどこかにひっかかっているのだ。
もう、水は胸まできている。
隣の席を見る。
キリーは額から血を流して、どうやら気を失っている。
もう、真吾はキリーを起こそうとは思わなかった。
――気を失ったまま溺れ死ぬなら、その方が楽さ――
水は、たちまち顎まできた。
真吾は目を閉じた。
真吾は下唇に水の感触を感じた。
だが、水の感触はそこまでだった。
水は、それ以上あがってこなかった。
「ん？」
真吾は思わず目と口を開いた。
水が少しだけ口に流れ込んできた。
塩の味はなかった。
その代わり、やけにザラついた舌ざわりだ。

――これは……、これは、泥水？――
そう思った時、いきなり、操縦室の中が明るくなった。
非常灯が点灯したのだ。
目の前のセンサーが動き出した。
今の衝撃で、機能が戻ったらしい。
センサーは、しっかり、そこが陸の上であることを示していた。
その時、隣で泥水がバチャバチャと弾かれ、真吾の頭にふりかかった。
「畜生！　畜生！　ポリ公め、捕まってたまるか！」
我に返ったキリーが、わめきながら泳いでいた。
どうやら、事態がまだ把握出来ず、警察に追われ、ニューヨークの下町ブロンクスのドブ川でも逃げ回っているつもりらしい。
――だが、なんちゅう泳ぎだ――
たしかにキリー本人の言うとおり、犬かき、いや狼泳ぎそのものだった。
急に真吾を押さえつけていたシートベルトが切れた。
真吾は前かがみに、水の中につんのめった。
――あれ？　俺も頭から水につっこむオットセイだ。……いや、そんな場合か！――
あわてて泥水の中から首を出した真吾の前に、日本刀を持ったブンドルが立っていた。
「よくやってくれた。感謝する」
ブンドルは手を差し伸べて、真吾を水から引きずりあげた。

シートベルトを切ってくれたのは、ブンドルだった。
ブンドルの横で、レミーが犬かきのキリーに声をかけた。
「キリー、いいのよ、泳がなくても。ここは海の中でも、ブロンクスの下水道でもないみたいだから……」
「あん？　レミーちゃん」
レミーを見て、状況を思い出したらしく、ニヤリと笑ったが、それでも手足を激しく動かすのをやめない。
「けど、こうしてねえと、溺れちまうんだ」
「お姉さんが泳ぎを教えてあげる」
レミーは、バシャバシャと水の中に入ってきた。
手をキリーに差し出した。
「あん？」
そこは、レミーの腰の深さしかなかった。
「あ……、そ……」
キリーは照れくさそうに立ち上がった。
「誰にも言わないで欲しいね、このことは……」
キリーは操縦室を見回した。
「といっても……、無理か……」
どうやら、操縦室は前のめりに、浅い池か沼のような所に着地したらしい。

カットナルとケルナグールは、まだシートベルトを着けたまま座っていた。
Vサインを見せるカットナルはともかく、
「やはり、わしは水には縁がなかったぞい。日頃の心がけじゃぞ。な、キリー」
ケルナグールの嬉しそうな顔が、シャクの種だった。

＊

神を待つ焚火の炎は、今日も赤々と夜空を焦がしていた。
今日の火の番をしていたのは、青い目をした金髪で黒い肌の青年と、褐色の目をした長い黒髪で白い肌の娘と、二頭のつがいの虎だった。二頭はともに白地に黒縞の白虎だった。
神の降りてくる気配は今日もなく、二人の人間と二頭の虎は寄り添って、満天の星の光の下で、つい、うとうとと舟をこぎ出していた。
どれほど時がたったろうか、何かに気付いて頭を上げたのは、夜行性の二頭の虎だった。
二頭は、じっと空を見上げた。
二頭は、空の気配を二人の男女に教えた。
二人は、虎の見上げる方角へ目を凝らした。
何かの音が頭上から聞こえてきた。
まるで、風が怒っているような音だった。
音はみるみる大きくなってきた。
何かが空からやってくる。

二人と二頭は直感した。
夜空を降りて来る何かは、突然、大きく広がった。
無数の星が、みるみる何かに隠されていく。
すぐに、その大きな何かは、二人と二頭の頭上を通り過ぎると、丘の向こうに聳える山をかすめて落ちていった。
二人はそれが、夜空に開いた宇宙船のパラシュートであるのを知るはずもなかった。
山の向こうで、空気を震わせるにぶい大きな音がした。
二頭と二人は、この陸地に住む人間と動物が待ち望んできた者がいよいよやって来たと信じた。
それは、彼らにとって神だった。

第2章

未知の呼び声

わたしにも話せます

六人は、操縦席からじっと、窓の外に注意を払った。
何の気配も感じられなかったが、外は夜の闇だ。何が隠れているかも分からない。
勝手を知らぬ土地を、夜歩くことほど危険なことはない。
「朝を待つよりあるまい……」
ブンドルの呟きに、一同もうなずいた。
六人は一時間交代で、窓から見張りをしながら休息を取ることにした。
「そういうことなら……、今のうちに治療してやるか」
キリーの額の血を、カットナルがのぞきこんだ。
「何針か縫う気なら、麻酔をかけてくれよ」
カットナルの医者としての腕をどうしても信じきれないキリーが、こわごわと言った。
「う〜ん、なかなかのかすり傷じゃ」
カットナルは、キリーの額をポンと叩いた。
「イテテ！」
飛びあがるキリーに、カットナルはにやりと笑った。
「こんなかすり傷、糸がもったいないわい。わしの薬で、明日は傷跡も残っとらんよ。ほれ、これをつけるんじゃ」
カットナルは、小さな広口瓶に入ったグリース状の薬を、キリーの額につけた。
「なんだい、こいつは」
「フロッグオイルだ。傷には最高だ」

「フロッグオイル？」
キリーが訊き返した。
カットナルの代わりに、真吾がぼそりと言った。
「ガマの油か……」
カットナルはにやりと笑った。
「早い話がな……、日本の筑波山のガマは、傷に良いという言い伝えがある」
「たまらん」
キリーは天を仰いだ。
しかし、不思議が起こった。カットナルの言ったように、キリーの額の血は、あっという間に止まったのだ。
「フーン、まんざら嘘でもなかったようじゃね」
カットナルは目を丸くした。
「あん？　どういうこと？」
「今日、初めて使ってみたんじゃがね」
「これだもん。俺ぁ、実験用モルモットかよ」
「いやあ、あんたは、確かに狼じゃよ。野生動物には、何をつけたって効くんじゃね」
感心しているカットナルに、キリーはポカンと開けた口を、もう閉じることが出来なかった。
「ただし」
カットナルは真顔に戻った。

「あんた達は、この泥水につかってしまった。泥水といえば、微生物や、わけの分からん病原菌がいるかもしれない。傷口から入って、思わぬことになるかもしれんのでな。この水を、早く調べてみねばなるまい」
「おい、おどかすなよ」
「わしゃ、真面目じゃ。地球では、あやまって胃に入ったゴキブリの卵が、胃の中で成虫になって体を食い破ったという話もあるでの」
「ゴキブリが？」
「ゴキブリですらじゃ。ここは見知らぬ異星、どんな奴がいるか分からん」
カットナルは、懐ろから水試験用紙を取り出して泥水につけた。
そして、さっと顔色をかえた。
「こんなことが!?」
「どうした？」
一同は、カットナルに注目した。
「おい、俺はヤバイのか？　傷口から、わけも分かんねえもん入っちゃったのか……」
キリーは、今にも死にそうな感じで青ざめた。
だが、カットナルはおもむろにかぶりをふった。
「微生物も、細菌の反応もない……。これは完璧な濾過水といっていい」
「この泥水がか？」
真吾が訊く。

「宇宙船の着地で砂が巻き上げられて、混っているだけだ。砂が沈澱すれば、ただの真水だ。天然の池や河の水に、こんなことは信じられぬことだ」
——キリーの傷は大丈夫なのはよしとしても……、この水は——
一同は顔を見合わせた。
すぐに頭をよぎったのは……、何者かによって創られた人工の水だということだ。
「ってことは、この陸自体も人工だってことと？」
レミーが訊いた。
「いや、違う」
いつの間にか、泥水に手をつっ込んでいたブンドルが、手をすくいあげながら言った。
「この砂は、火山灰だ……。それも地球タイプのずいぶん古い時代のな……。地殻変動で起こる火山を、まさか人工で作れる者はおるまい」
そうはいっても、今までの宇宙の旅で起こったことを思えば、いつもは一言のもとで結論づけるブンドルの口調も、まさか……とか、おるまいとか、あいまいな表現をとるしかなかった。
——この陸地はなんなのだ？——
ブンドルは、じっと窓の外の暗闇を見つめた。

＊

朝がやってきた。
窓の外の世界が気になる一同は、結局、一睡もしなかった。

朝もやの中に浮かびあがった窓の外は、木々やシダの生い繁る森に囲まれた、ごく普通の沼のように見えた。
外の温度は、ぴったり二十五度。人間にとってはすごしやすい気温だ。
それに、外には何の気配も感じられない。
「さ、なにはともあれ、新世界へスタートだ……」
真吾は、操縦室のハッチを開いた。
新鮮な風が吹き込んで来る。
六人は、むさぼるように空気を味わった。
一応、センサーで大気の成分を調べ、地球型の空気であるのは承知していた。が、やはり、生身の肺が受けつけてくれるまでは不安なものだ。
——うまい！——
六人は一様にそう思った。
今、六人の肺を駆け回る空気は、めまいを起こしそうなほど新鮮だった。
少し湿っぽくはあったが、大気圏突入の緊張でカラカラになっていた喉をうるおしてくれるようで、心地よかった。
「これだけ汚れのない空気は、地球でもめったにないぞ……。この空気を吸うと、人間にとって煙草を吸う行為がいかに馬鹿げているか、よく分かるわい」
カットナルの言葉に誰もがうなずきたい気持ちにさせられていた。
「さ、空気さんはともかく、鬼がでるか蛇が出るか、問題はこれからでっせ」

キリーはマシンガンを構えて、ハッチの外をうかがった。
いきなり飛び出し、操縦室の右手の屋根にはりつく。
続いて、真吾が左手の屋根に――。
なんの気配もない。
ただ、木々をわたる微風にそよぐ葉のざわめきだけだ。
キリーと真吾はうなずきあうと、ハッチに待ちうけるブンドルを手まねきした。
ハッチから飛び出したブンドルの手に、いつの間にか握られていた日本刀が、周囲の様子をうかがってから、ゆっくりとさやに収められた。
ブンドルは、ハッチの中へ声をかけた。
「レミー、ひとまず危険はなさそうだ」
「サンクス！」
レミーの後にケルナグールとカットナルが続く。
操縦席の屋根に出たレミーは、沼のまわりを見た。
森のむこうの青い空と、後ろにそびえる山が、目に飛び込んできた。
「格好いい……」
思わず呟きがもれた。
それほど高くないが、山頂まで緑に包まれ、なによりその形が良かった。
お椀(わん)をふせたような、もし山頂に雪があったら、アフリカのキリマンジャロ山を思わせるような均整のとれた姿をしている。

もっとも、キリマンジャロと比べられたら、その大きさは十分の一もないだろうが……。
――箱庭のキリマンジャロか――
レミーは、地球にいた頃のアフリカ動物保護官時代をなんとなく思い出していた。
それほど、レミーの見る風景は地球の自然に似ていた。
他のみんなも、同じ思いなのだろう。
じっと緑の山を見つめている。
ブンドルがつぶやいた。
「あの山の形を見ると、どうやら死火山か、何千年も火を憤かぬ休火山であろうが、それにしても美しい」
レミーも頷いた。
「どうやら、悪いとこじゃなさそうね」
レミーの髪を揺らす微風がさわやかだった。
その時だ。
「ギャーッ」
いきなりカットナルの肩のカラスが悲鳴をあげた。
振り返った一同の前に、森の間から、何かがヌーッと首を出したのだ。
一同は目を見張った。
それは、あまりに長く巨大な何かの首だった。
キリーはマシンガンを構えた。

引き金に指をやる。
その銃身をレミーがおさえた。
「やめて、あれはおとなしい草食動物のはずよ。もし、ここが地球と同じならだけど……」
そうはいっても、動物保護官をしていたレミーすら見たことのない動物だった。
——恐竜図鑑の中以外では——
体長三十メートル、高さ十三メートル以上、それはブロキオザウルスか、それともスーパーゾウルスか、名前は分からなかったが、ともかく長い首と尾、そして巨大な胴と太い足で、かつて地球をのし歩いていた地上最大の恐竜の一種の復元図によく似ていた。
ただ、レミーの知る復元図と違っていたのは、その恐竜の膚の色だった。
普通、恐竜の空想図には、爬虫類によく見られるくすんだ色か、派手な原色の斑模様が多いのだが——。
今、目の前にいる恐竜は、純白の肌をしていた。
そして、長い首の先には青い目が光っている。
——ま、それはしようがないかも。誰も恐竜の姿は骨でしか見たことはないのだから、色まで分かりゃしないわ——
だが、キリーがレミーにささやいた。
「なぜ、あいつがおとなしい草食い動物だって分かるんだ？」
「えっ？　あ！」
思わず、レミーは声をあげた。

——そうだったんだ……。誰も恐竜なんて見たことないんだ……。勝手に化石見て、想像して、性格まで知っちゃいない。まして、ここは地球じゃない……。あれは恐竜じゃあないかも——

レミーの動揺を見すかしたようにブンドルが——、

「何事も人と同じ、顔では性格は分からぬ」

それが合図で、全員が武器を構えた。

ブロキオザウルス風の動物は、六人を見つめた。

それは、少なくとも地球の動物では攻撃のまえぶれだ。まして、攻撃されたらわけの分からぬこいつは、相手としてはでかすぎる。

先手必勝！

六人は引き金に力をこめようとした。

その瞬間だった。

何かの声がした。

‖助けて‖

六人は、ビクンとその声を感じて、指を止めた。

‖助けて‖

——誰だ。今、言ったのは——

六人は互いの顔を見た。

また、声がした。

‖助けて、私たちを‖

それは、耳から聞こえた声ではなかった。

――だが、どこから話しかけているんだ?――

――なんなんだ?　こいつは――

その声は、六人の頭の中というか、心の中というか、少なくとも六人の誰かが話してはいなかった。

だとすると――、思いつくのは、目の前の白い巨大な動物が話したとしか考えられない。

――そんな馬鹿な――

六人は総毛立った思いで、ブロキオザウルス風の生き物を見た。

=助けて、私達を=

もう一度、声がする。だが、ブロキオザウルス風は、なにも音を発してはいない。

だが、その目の輝きは、どこか優しかった。

――なるほど、目は口ほどにものを言い、か……。あれ?　何をわたしは考えているんだろう!――

自分に呆れたレミーは、だが、あることに気づいて呆然となった。

その声はフランス語だった。それも、レミーが生まれ育ったパリの下町なまり……。語学堪能なレミー、音声多重人間といわれたレミーが、それでも一番慣れ親しんでいる懐かしい響き。

――どうして?　なぜ?　この声は、あのなまりを?――

真吾も同じ思いだった。

彼が聞いたのは、バイエルン地方のドイツ語、真吾の生まれ育った土地のものなのだ。

ブンドルは上流社会のイタリア語。

キリーとカットナルは、同じHELP(たすけて)という英語に聞こえたが、キリーが聞いたのはブロンクスなまり、カットナルは、留学したケンブリッジで叩き込まれたキングス・イングリッシュだった。

ケルナグールが育ったのもアメリカだったが、彼に聞こえたのは英語ではなかった。

それは、ケルナグールは、それを何語と呼ぶのか分からなかったが、意味ははっきりと分かっていた。

何よりも驚いて、せわしなく首を動かして、声の出所を探していたのは、カットナルのカラスだった。

このカラスに言語と呼べるものがあれば、それは確かに、このカラスの生まれたジル星のカラス語だったのだから。

――助けて――

六人は心というか頭というか、自分の中心に語りかける声に、どう対処していいのかとまどっていた。

六人はチラッと互いを見合い、互いが同じ思いでいるのを頷きあった。

すぐに別の方向から、別の響きを持った声が聞こえた。

――**助けて**――

やがて、様々(さまざま)な響きが加わり、だが、言っている意味は同じだった。

――**助けて、私達を**――

――**助けて**――

＝助けて＝

それは、六人のそれぞれの心を揺り動かすような合唱になった。
それが音といえるなら、圧倒的なボリュームだった。耳を覆(おお)っても消えぬ音だ。
その音を消すには、眠るか死ぬか以外の手段を考えられぬほどだった。
とても六人には耐えられるものではなかった。
その時、内側で聞こえる声とは別の声がリンと響いた。
「いいかげんにするがよい！」
それは、耳から聞こえた音声だった。
ブンドルが今まで聞いたこともない大声をはりあげたのだ。その声の気迫(きはく)は、合唱に負けてはいなかった。
内側で聞こえていた合唱がピタリと止まった。
「いつまでも同じ言葉を並べるとは、美しくない。別の言葉は言えぬのか！」
しばらく沈黙があった。
だが、やがて内側から聞こえてきたのは、やはり、
＝助けて＝
の大合唱だった。
ブンドルがもう一度叫んだ。
「やめろ！　やめぬか！」
だが、合唱は止まらない。

そのかわり、別の言葉が聞こえた。

‖その声は止まりません。あなた、おっしゃることがむずかしい。分からないからです。お願いです。〝分かった〟とひとこと言って下さい。そうすれば、声は止みます‖

「誰だ！　おまえは！」

‖私達です‖

森の中から、毛皮を腰につけただけの二人の人間と二頭の獣が現れた。

それは、焚火(たきび)の番をしていた男女と二頭の虎だった。

二人は、沼地につっこんだ操縦室に近寄って来た。

‖お願いです。〝分かった〟と言って下さい‖

「何を分かったと言うのだ」

さらに合唱は大きくなった。

‖助けて、助けて‖

レミーが叫んだ。

「やめて！　もうたくさん！」

‖ですから、分かったと言って下さればいいんです‖

それは、ぬけるように白い肌(はだ)の娘の言葉だった。

だが、娘の口元は、少しも動いていなかった。

――これは！　そうか！――

六人は、この合唱がなんであるかを知った。

テレパシー、直接、心に話しかける能力。
それも、この大合唱は無数のテレパスの集団がいることを示している。
六人は、地球でも実験段階の超能力研究所を知っている。
考えてみれば、六人が今まで出会ってきて、宇宙を彷徨うはめになった新しいソウル達も、超能力者の大物と考えられないこともない。
しかも、こんな集団には……。
普通の人間の六人にとって、攻撃されたらとても勝てる相手ではない。
大合唱は、さらにさらに六人の内側を痛めつけている。
六人は、同時に絶叫した。
「分かった！」
ピタリと大合唱が止んだ。
なにがなんだか分からないが、分かってやることにするしかなかった。それも、心から……、彼らの言っていることを認めてやらなければならなかった。
そうしなければ、彼らはこちらの心の裏の陰りを読みとってしまう。
次の瞬間、六人の内側を、声にならない風が吹いた。
何か、柔らかで甘く、そのまま抱かれていたいような風だった。
六人が、今まで、ただの一度も感じたことのない響きのある風だった。
これもテレパスの集団のせいならば、明らかにそこには敵意はなかった。
それは、六人の中にある敵意をもなごませてくれた。

やがて風は止んだ。
男と娘は、一同の前にひざまずいた。
六人は面食らった。
明らかに、状況は彼らの勝ちなのに、この態度はなんなのか。
わけが分からず、顔を見合わす六人の心に男が言った。
＝待っていました。みんな、ずっと待っていたのです＝
「みんな？　誰のことだ？」
ブンドルが訊いた。
他の五人にも訊きたいことがいっぱいあった。
だが、口に出して言ったのはブンドルだけだった。
それなのに、男は六人を見回して首をひねった。
＝あなた達は同時にものを言います。誰に答えていいのか分かりません。それに、一度にみんな、違うことを言うから分かりません＝
――そうか――。どうやら、私達の心が読めて……、それでいてブンドルの言葉と、私達の心で思ったこととの区別がつかないらしい――
レミーはそう思った。
ブンドルも、それはすぐに気がついたらしく、
「口から音を出す人間の言うことだけ答えて欲しい」
そう言って、五人にも念を押した。

「いいね。それから心と裏腹なことは言わない方がいい。この男が混乱する」
カットナルが口をとんがらかした。
「そりゃ、ちょっと難しい問題じゃぞ……。わしゃ、元政治家じゃけ。口と裏腹は自覚しとるきに」
真吾が分かりきったことは言うなとでもいう感じで、
「なるたけ言動一致、ないしは自分の心を押さえつけられる奴じゃないとな」
「単純な真吾ちゃんがやったら？　俺ぁ自信ねぇ……。もう俺、みんなと別のこと考えてるもんな」
チラッと白い肌の娘を見た。
娘はすーっと男の後ろにかくれた。
「これだもん。ただ、いい女の子だなって思っただけなのにね。ホントだよ」
キリーは、誰も訊かないのに、一人で弁解した。
真吾は、肩をすくめた。
「俺は、悪いが、意外と傷つきやすい、複雑な男だ。向かないね」
「わし、言ってることと思ってること、割と一緒じゃけどな」
ケルナグールがしゃしゃり出た。
「じゃが、お前が話すと、すぐ喧嘩になるわい」
カットナルの言葉に、ケルナグール自身も、
「そりゃ、まあ、そうかもな……」

自分ながら、納得せざるをえなかった。
「すると、残るは……」
四人は、レミーとブンドルを見つめた。
レミーは慌てて手を振った。
「ノンノン……、わたし、パス」
「そんなに心と言葉が裏腹かい？」
キリーがひやかした。
「こう見えても女の子です、わたし」
「なるほど」
なんとなく、五人は納得した。
「ならば、禅の修行の成果を見せるよりあるまい……」
ブンドルが呟いた。
「心頭滅却すれば、無我の境地——、試してみるよりあるまい」
五人の誰もが、ブンドルを禅の境地にいる人間とは思えなかったが、こういうことは立候補者に任せるに限った。
ブンドルが男に向きなおって訊いた。
「もう一度、訊く。みんなとは誰のことかな」
＝この土地にいる動物みんなです。少しだけここに来ていますが＝
「ここに？」

＝はい＝

そう答えて、男は森へ向かって言った。

＝みんな、出てこい＝

森がざわめいた。

そこに、様々な動物がいた。肉食獣も草食獣も……、大きさも雑多だ。

ひときわ目をひいたのは、ブロキオザウルス風の恐竜が大小二頭いたことだった。

だが、レミーがその集団の異様さに気づいたのは、それだけではなかった。

明らかに、象に見える哺乳類は、毛深く、牙がまっすぐ伸びていた。レミーが新生代の動物図鑑で見たもので、明らかに象の先祖だった。

沼の近くでうずくまっている大きな蛙に尻尾をつけたような動物の背には、背びれがあって、明らかに魚だったころの名ごりで、古生代に生きていた両生類に似ていた。

――でも、古生代と中生代と新生代、地球上の長い生物の歴史の中で、決して同時期に生きているはずのないものが……、どうしてここにいるの？　しかも、ご丁寧に人間までいて。そりゃ、黒い肌で金髪で青い目のこの男は、カラーバランスがおかしいと思うけど、確かに人間には変わりない――

――目の前の二頭の虎だって、地球でいえば現代の動物だし、なんだか動物の進化がめちゃくちゃ――

――おまけに、地球上の自然状態も気候条件も、それぞれの動物達が生きていられた時期はまるで違うわけだし……。それが、なぜ？　気温二十五度……、そりゃ、人間には過ごしやすい温帯の

風土だとしても、ブロキオザウルスさんには少し涼しすぎるはずなんだ──
──これを見たら、進化論のダーウィンさんは腰を抜かすにきまってる──
だが、ブンドルは、それに気づいたにしても、禅の境地で動揺を見せずに男に訊いた。
「さっき、我々の心に語りかけた大勢は、誰なのだ」
‖**ここにいるみんなです**‖
「みんな?」
ブンドルは心の中で、さすがに驚いた。
──まさか、この動物達が?──
‖**そうです**‖
男が、ブンドルに答えた。
──そんな!──
レミーは、ほんとにぶっ飛びそうになった。
──ありえない……。それぞれの動物は知能程度が違う。共通の言葉では話せるはずがない──
レミーの気持ちを代弁するようにブンドルは訊いた。
「動物達はお互い、話せるのか?」
‖**はい、ムピがいますから**‖
「ムピ?」
男は、耳の後ろから小さな何かを取り出した。
‖**これです**‖

それは、青白い光をはなつアメーバー状のもので、小石大だが、ゆるやかに膨らんだり縮んだりして、明らかに生きているように見えた。

＝これが私達と他の動物達を話させてくれます。みんなムピと友達……。ムピがわたしの言葉をみんなに伝えてくれます＝

「では、我々に聞こえたあの声は」

＝ムピが伝えてくれた、みんなの心です。でも、みんな人間の難しい言葉、理解できません。〝助けて〟しか言えません。そして、空から来た皆さんが〝分かった〟と言ってくれる気持ちしか理解できなかったのです＝

男は、腰につけていた毛皮の中から袋を取り出した。

＝でも、動物達はそれぞれの気持ちを持っています。いろんな知恵を持っています。皆さんがムピを持てば、もっと気持ちが分かるようになります。これを差しあげます＝

袋からムピを取り出した。男はブンドルの手にひとつずつ置いた。

＝一、二、三と、一、二、三と、一……＝

＝これは皆さんの一つずつの分です＝

ブンドルは、手の平の上に七つ置かれたムピを見つめながら、男の数え方が気になった。

「一、二、三と、一、二、三？」

＝空からこんなにたくさん降りて下さると知りませんでした。だから、一、二、三と、一、二、三＝

男は一人ずつ、六人を指さし、最後にカラスをさし、

＝と、一＝

「三つまでしか、数えられぬのか？」

＝それ以上はいりません＝

男は自分の胸をさした。

＝オス＝

そして娘をさし、

＝メス……、そして子供……。私達、まだ子供いないから、二人です＝

六人は顔を見合わせた。

地球でも、原始時代や、現代でも未開人の一部では、数のかぞえ方を三までしか知らない部族があるのをレミーは知っていた。

三より以上は、たくさんで片づけてしまうのだ。

だが、少なくとも、動物達と意思を交換できる能力がある人々が、三つまでしか数を知らないのは驚くよりなかった。

六人の心を読んだ男は、きっぱりと答えた。

＝三つよりたくさんはいらないのです。さ、ムピをつけて下さい＝

キリーが、ムピをつまんだ。

「フーン、精神通訳器ってわけか……。あれ？」

キリーがふっと考えこんだ。そして――、

「これ、俺達の心の中も、お互いお見通しになれるわけ？」

＝そうです。だから、もう口から音を出さなくていいです。口は食べるためと、ムピの力が届かない遠くへ音を届かせるためだけでいいです＝

「ははあ、すると、レミーちゃんが、今、俺達のうちで誰に気があるかも、一発で分かってしまうわけ」

レミーが慌てて釘をさした。

「分からんでよい。な、こと！」

男は怪訝そうな顔をして言った。

＝自分が思ったことで、相手に分かってもらいたくないことなんてあるんですか？　それ、分かりません。私達、みんな、思ったこと相手に話します＝

「えっ？」

レミーは困った。そして、困った気持ちも、この男には見通されているのだ。

頭をポリポリかきながら、真吾が言った。

「あのな、このムピっていうのは、心に思ったことみんな相手に教えちゃうのか？」

「こりゃ、プライバシーの問題じゃぞえ」

あまりプライバシーと関係のなさそうなケルナグールが言うと、カットナルも呟いた。

「医者としても、患者に伝えたくない時もあるからな」

──政治家ならなおさらじゃ──

これが、カットナルの本音だった。

＝政治家って、何ですか＝

「あん？」
――今、医者とか患者とかいう、知らない言葉より、もっと政治家って言葉が、心に強く聞こえました――
「それがプライバシーの侵害っちゅうんじゃ！」
カットナルが顔を赤らめてわめいた。
――みなさんには、心の中で思ったこと、相手に知らせたくない時もあるんですね――
男の心の声は淋しそうだった。
「そっちのケースが多いみたい。残念だけど……」
レミーはできるだけ優しく、そう言った。男の落胆がよく分かる気がしたからだ。
――ムピは、みなさんの心を伝えます。みなさんが相手に伝えたくない心があれば、それは誰にも伝わりません。もし、みなさんが、私達に言いたくないことを思ったら、今は私に聞こえますが、ムピをつければもう私には聞こえなくなります――
「テレパシーのシェルターにもなるわけか……」
ブンドルは、いきなりムピを耳の後ろにつけた。
「おまえの話を信じよう」
男は、喜々として答えた。
――嬉しいです。わたし、とっても――
ブンドルは、フッと笑って五人の心に言った。
――諸君、私はこの男を信じきっていなかった。だが、今は信じる。早くそれをつけぬと――

「キャッ」
小さな悲鳴をあげて、レミーがムピをつけた。
「あん？」
一瞬、わけが分からなかった四人の男達の心に、レミーのいたずらっぽい声がした。
══**私も心、読んじゃうぞ**══
四人は泡を食って、ムピを耳につけた。
「今日から、私達、童話のドリトル先生ってわけね……。トーク（お話）、トウ・ジ・アニマル（動物と）。動物と話せまーす」
レミーは口に出してそう言った。何となく嬉しかった。
ムピから伝わる動物達の心から、敵意が何も感じられなかったからだ。
カットナルは、カラスの頭にムピをのせた。
「不公平だから、お前にもな」
ムピは、アメーバ状になってはりついた。
とたんに、カットナルの心にカラスの心が飛び込んだ。
══**なんじゃ、こりゃ？**══
急に開けた心の声を聞く世界にあわてたカラスは、思わず羽ばたいて飛びあがった。
動物達からの異様な驚きが、六人に伝わった。
あの男の心がビンビン伝わってくる。
══**空を飛べる**……。**やはり神だ**……══

‖カラス……、いえ、鳥を見たことがないの？‖

レミーが訊いた。

男は答えた。

‖言い伝えでは、遠い昔にいなくなりました。やはり、あなた達は神です‖

そういえば、沼のまわりの動物に鳥はいなかった。

やがて、動物達の意識が六人にどんどん伝わってきた。

ムピによって語られた動物達から見た一同は、やはり神であり、仏であり、救世主だった。

‖どうぞ、私達の住む所へおいで下さい‖

男は、六人をブロキオザウルス風の背に乗せると、動物達の先頭に立って歩き始めた。

第3章

行先のない翼

神様になる方法教えます

ブロキオザウルス風は、森の中をゆったりと歩いていった。
木洩れ陽が踊っている森の薄闇が、急に開けた。
そこに森を切り開いた小さな集落があった。
――ここが、わたし達の住む所です――
先頭の男が言った。
木の枝をいくつも組み合わせて、その上に草や葉を被せた、雨露だけならかろうじて凌げるといった粗末な小屋が、小さな広場をはさんで取りまいている。
六人がブロキオザウルス風の背から降りると、小屋の中から村人達が次々に姿を現した。
肌の色、髪の色、目の色は、それぞれ様々だが、一様に二十歳前の若い男女だ。
女の中には、十四、五歳に見えるのに、もう子供に乳を飲ませている少女もいる。
女達はどの顔も無邪気な笑顔を絶やさない。
だが、キリーは笑顔ではなく、他の方面にいたく感動して、口笛を吹いた。
――なんちゅうか、顔かたちといい、プロポーションといい、俺の美意識でいうと、九十点以上確実――もっとも、ロリコンホビーのない俺としては、ガキっぽいのが多いのが難だが、そこは、ま、脂の乗り切ったレミーちゃんもいることだしね。ともかく、みんな、おいしそ――
「おいしそ」
おもわず思いが唇からもれた。
ふと横を見れば、真吾がやけにコチンコチンの表情で、つっ立っている。
――フン、にやけるのを必死でこらえてやがって、早い話が好きなんだよな、こいつも――

キリーはニヤリと笑ったが、その視線がレミーとバッタリ合って――、
レミーがしっかりと呆れて、にらんでいる。
いきなり、心臓のあたりがつねられたような気がした。
‖痛ッ！　聞こえてた？　今の？‖
‖キリーのは、聞こえてなくたって分かるの‖
レミーの声が、内側から聞こえた。
‖減点一？……‖
‖こんなので減点していたら、ずーっと昔にゼロ。あなたは、とっくに消えて見えなくなっているわ‖
‖少しは見えててくれて、アリガト‖
キリーはレミーにウインクした。
‖し～らない。どうせ、私には胸焼けするでしょ。脂がのりすぎてて……‖
‖あ、それまで聞こえてたんだ‖
レミーは答えず、プイッと横をむいて見せた。
その時、レミーの耳にブンドルの声が聞こえた。
先刻から、この星の人間と話す時は、音声を出した者が彼らとの話し相手になることになっている。
「これが、諸君の全てか？」
――えっ？――

レミーは改めて村人達を見た。
ずっと見回しても、五十人といない。
――はい。これがこの陸地に住む、私達の全てです――
男が答える。
――全て？　ここの他に、人の住んでいる所はないというのか？――
――ありません。他は、動物達の住む所です。あなた方神様は、私達と同じ姿をしているので、ここにお連れしました――
脇から、カットナルが政治家風の口調で言った。
「これでは、ウサギ小屋どころか、ネズミの巣ではないか。住宅事情を改善せんとな」
――確かに、神様にとっては小さすぎるのかもしれません。でしたら、彼の住む所に御案内しましょうか？――
男はブロキオザウルスを指さした。その声には皮肉の陰りはまるでなく、本当にこの村に連れて来たのが申し訳なさそうだった。
キリーが慌てて言った。
「けっこう。あいつと添い寝して、ペチャンコになるよりゃ、ここで縮こまって、誰かさんと密着していた方がいいもん」
〝コホン〟。今までコチンコチンで黙っていた真吾が咳ばらいをした。
「口のへらない六人が言いたい方題喋り出したら、話が前に進まないぞ。代表者、議事を進行してくれ」

ブンドルは苦笑して、男に訊いた。
「諸君が先刻言っていた〝助けてくれ〟というのは、いったい我々にどうしろと言うのだ？」
先刻から、一同の話をまともに聞いていた男は、いかにも嬉しそうな顔をした。
これ以上聞いていると精神分裂を起こしそうな六人の心の声に、男はうろたえきっていたのだ。
やっと話が核心に戻ったことにホッとしたようだった。
＝さ、こっちへ来てください＝
男は、村の裏手にある森の道を歩いていった。
小道は次第に登り坂になり、どうやらそこは丘になっているらしい。
丘の上に出ると、視界がいきなり広がった。
果てしなく広がる海原が見えた。
丘の中央に大きな焚火の跡があり、今も白い煙をあげてくすぶっている。
真吾がキリーに呟いた。
「どうやら、俺達は、あれを見たらしいな」
「救いの灯台か……。けど、灯台もとくらし、俺達のこれからは、明るくなさそうだぜ」
「明るいのは、ここのご連中だ。俺たち、何をさせられるんだか……」
男は海を見つめていた。それは海を初めて見る少年のように希望にあふれていた。
＝私達は、遠い昔、この海の向こうからやって来ました。大きな大きな海の家に乗って……。
この海の向こうに、私達の生まれたところがあるんです＝
「な、こと言っても、上から見た時は、何もなかったがのう」

ケルナグールがカットナルにささやいた。

「少なくとも、わしの片目が見る限りにはな」

だが、この海には他の陸などないと言ってしまっては身も蓋(ふた)もない。それに、この星の上空を見たのは片面だけで、もう一方のここは夜の闇だった。

もしかしたら、別の陸地があるのかもしれない。

「先を聞こう」

ブンドルが一同の注意を集めた。

男は語り始めた。

――昔、陸は、もっともっと大きな広がりだったそうです。生き物もたくさん住んでいました。でも、ある日、大きな海が流れ込んできて、全(すべ)てを押し流しました。でも、生き物の中で、わずか……といっても、今の私たちからすれば、とてもいっぱいなのですが、大きな海の家に乗って、海から逃げようとしました。そして、昼と夜がたくさん過ぎて、この陸のてっぺん……あの山の上に着きました――

男は六人がこの星に着いた時、見つめた山を指さした。

――しばらくして、海が引き出し、この陸が出来ました。でも、大きな海の家に住んでいた生き物達には狭すぎました。だんだん生き物達は減っていきました。たぶん、もうすぐ、私達はこの陸からいなくなってしまうでしょう。それは、仕方ないことかもしれません。でも、私達は生まれてきた土地を忘れられません。私達の中で、誰でもいいから、生まれたところに戻れたらいいのに、と思います――

〃故郷か――〃

六人は同時に同じ言葉を思った。

〃そうです。故郷です……〃

男が六人の内側で言った。

男が〃故郷〃という言葉を知っているとは思えなかった。だが、六人のうちの故郷と、男の言う〃生まれたところ〃は、その感触の暖かさで、同じなのかもしれなかった。

だからこそ、六人のうちで故郷という音で響いたのだ。

〃お願いです。私達を故郷に連れていって下さい〃

「なぜ、私達に、諸君を故郷に連れて帰る力があると思うのだ？」

〃分かりません。でも、この土地で生まれた者は海を渡れません。あなた達なら、この海の上を、大きな海を渡れると思うのです〃

六人は顔を見合わせた。

「どうして、あなた達は、海を渡れないの？」

レミーが声を出して訊いた。

〃分かりません。みんなの胸の中の何かが、渡ってはいけないと言うのです。それに、海の渡り方も知りません〃

「ノアの方舟の返送便をやれってのか……」

真吾が誰に言うでもなく呟いた。

「ノアの方舟？」

カットナルが訊き返した。
「それなら、よく知っとるぞい」
ケルナグールが鼻をひくつかせた。
「昔、世の中が乱れきっとってよ、神様が怒って、洪水を起こして悪い奴らを溺れ死にさせようとした。もっとも、そんな洪水が起こったら……、正直者のわしでも、溺れるところじゃがな……」
とキリーをチラリと見た。
「俺なら、なおさらアップアップって言いたいのかい？」
泳げないこだわりが少々と、昔、感化院で聞いた牧師のお説教などうんざりだ……という意味も込めて、キリーは言った。
「ま、聞け。でもって、ノアって正直者がいて、でっかい船を作ってな、動物達と家族を乗せ、生きのびたんじゃ。その子孫がわしらで、洪水の中、やっとの思いで辿り着いたのが、アララット山……」
「アララット、俺達がその話、知らないと思ってた？」
とキリーがまぜっかえす。
「要するに、この土地が、この星のアララット山か。だが、ここが洪水後の旧約聖書時代ってわけでもあるまい」
と真吾。
「洪水伝説はキリスト教の世界だけじゃないわ。世界中のいたる所に、いろんな民族に、伝説は残っているもの」

そこまで言って、レミーはふっと口ごもった。
考えてみれば、今までに迷いこんだ星、コンピューター支配のデノアの星も、緑の星ジルも、形こそ違え、ノアの洪水後に似ていないこともなかった。
少なくとも一つの文明が終わったあとなことだけは確かだった。
他の五人も、レミーの疑問に頷きたい気持ちだった。
「何にしろ……、ここの星の洪水は水が引かなかったようだな」
ブンドルが皆の問いに、結論づけるように言って、男に向かった。
「だが、諸君の故郷が、今、海の上にあるという確信はあるのか？」
男はかぶりを振った。
‖なくてもいいのです。せめて、その場所に行きたい。それだけでいいのです。それが、この土地のみんなの気持ちです‖
「みんなって、動物達も含めてかな」
カットナルが訊き返した。
‖勿論です。この土地に住む生き物全ての、昔からの願いでした‖
カットナルは頷いた。そして、
「なにも見つからなければ、お前達の夢を破ることになるかもしれんが……」
カットナルは、肩のカラスに命じた。
「お前、すまんが、ちょっと飛んでいって、陸が見えるかどうか、調べてくれ」
〃グアッ！〃

カラスは一声鳴くと、空へ向かって羽ばたいた。

＊

空は雲ひとつなく澄みきっている。
カラスはまっしぐらに上を目ざしていた。
カラスは、ただ単に翼を動かして飛んでいる気がしなかった。
今日の羽ばたきは、いつもと違う気分だった。
より高く、より遠くへ……。
彼がこれほど力強く翼を動かしたのは、久しぶりのことだった。
もしかしたら、生まれて初めて巣から飛び立った時以来かもしれない。
より高く、より遠くへ……、こんな目的で飛ぶのは、その時以来だった。
いつもは敵から逃げるためであり、エサを取るためであり、自らの力を仲間のカラス達に誇示するためだった。
高みから下界を見降ろすためだけに飛んだことは、ただの一度もなかった。
下界がぐんぐん小さくなっていく。
やがて、陸の全て(すべ)が見降ろせる高さまで来る。
陸は、白い波浪(はろう)が細い皺(しわ)のようになって押し寄せる小さな孤島にすぎない。
真ん中にひときわ高い山があり、あとは緑——。
時折、細い糸のようなものがキラリと光り、それが陽の光を反射する川だと分かる。

高度をあげるごとに光の強さを変える小さなしみのようなものは、おそらく池や沼だ。
あんなに小さな檻の中に、人と動物達は住んでいる。
だが、彼は違う。檻から逃げられる力をもつ、唯一、翼を持つ存在なのだ。
いや、逃げられるだけではない。
さらに、高く飛び、遠くに飛び、何か新しいものを見つけ出す権利を持っているのだ。
優越感で、彼の体は震えた。
彼は高みを目指した。
島がぐんぐん小さくなり、点になった。
ここまでくれば、何かが見つかるだろう。
カラスは下界を見降ろした。
だが、海以外の何も見えなかった。
彼は、六人の住んでいた地球に棲息するただのカラスではない。
羽根の長さ一・五メートル。故郷ジル星では、デオゲラ・クロスと呼ばれる、最も恐ろしく強いといわれる鳥なのだ。地球でいう大鷲であり、コンドルなのだ。
どの鳥にも負けぬ飛翔能力を持っているはずなのだ。
彼には、ジル星の鳥の王だという誇りがあった。
カラスは空気を叩きつけ、上へ上へと目指した。
やがて胸苦しいものが、鈍く、体に襲いかかった。
胸が膨らんでいくのを感じた。

気圧が変わり、胸の中の空気が膨張を始めたのだ。
もちろん、そんな理屈はカラスに分かるはずがない。
だが本能は、彼の飛翔の限界にさしかかっているのを告げていた。
カラスは下界を見降ろした。
陸は見えない。
カラスは力を振り絞った。
より高くへ……。しかし、翼が叩くべき空気は、あまりに薄い。
カラスは空気にすがりつくように、そして手応えのないくずれやすい壁に張りついて、わずかずつ昇っていった。
空の青さも色を変えている。
昼だというのに、頭上は、群青色の空だ。
星のまたたきすら見える。
そこは、鳥という動物の高みの限界だった。
それでも、カラスは高く飛ぼうとした。だが、いくら羽ばたいても、体が重い鎖で縛られたように動かなかった。
カラスはうらめしげに上を見上げた。
彼を見下すように、星や太陽が光っている。
――**まだ飛びたいのに、なぜ**――
星や太陽は、自分を嘲笑っている。

カラスは下界を見た。
海しかなかった。
見つけ出すべき何ものも見つからない。
上はさらに高く、下には何もない。
突然、カラスは思った。
——自慢の翼はいったい何のためにあるのだ。辿りつくべき終着地の見つからぬ力に、なんの意味があるのだろう——
カラスは絶望した。自分の存在が全く無意味に思われた。
みるみるカラスの体から力が抜けていった。なんだか、あの陸地に鳥のいないわけが分かったような気がした。
——あの陸地の鳥は、飛んでも仕方がないのだ。飛んで行く先がないのだから——
鳥にとって、飛ぶことに意味のない以上、生きていく意味もない。地上を這いつくばるにわとりや駝鳥になるのはまっぴら御免だ。それは、ただ、他の動物に食われるためのいけにえでしかない。
そして、この星に紛れ込んだカラスも、今、自分が翼を持つ意味が分からなくなっていた。
力強く翼を動かしていた内なる何かが、今はすっかりなくなっていた。
カラスの体はゆっくりと落ちていった。
やがて、その体に加速が加わり、体中が熱くなっていく。
すぐに体はきりもみ状態になり、羽根が次々に抜け落ちていく。
しかし、もう翼を動かそうとする気持ちはなかった。

カラスは、体が燃えつきていく時を待った。
ぼんやりと空を見上げる。
カラスのとどくはずのない、太陽と星がぐるぐる回っている。
下は何もない海が回っている。
まるで、無のろくろの中に入っているようだ。
カラスは消えていく自分をせせら笑うしかなかった。
だが、その時、内側に何かの声が聞こえた。
‖あいつ、何をやっとるんだ。無理せんと早く帰ってくりゃいいのに‖
‖帰ってこい？　誰？‖
‖うおい！　早く帰ってこい！‖
カラスはビクンと頭を震わせた。
カラスの聞いた声は、頭部に張り付いたムピが伝えたのだ。
それは、丘の上で空を見上げながらカラスの帰りに気をもむカットナルの声だった。
‖そうだ。自分には帰るところがあった！　仲間の二本足の肩の上……。そうだ、帰らなきゃ！‖
カラスの体に力が甦った。
カラスは力まかせに翼を動かした。
翼は、空気をしたたかに打ち、落下の速度を緩めた。
だが、もうすぐ体は海の上だ。

カラスは体を精一杯よじった。
間一髪——。
海面ギリギリで、カラスの体は水平飛行になった。
＝早く戻ろう。早く仲間の肩の上へ＝
カラスは高く舞い上がるのももどかしく、水平飛行のまま、海面すれすれで島へ急いだ。
その時だった。
いきなり海面が盛り上がり、巨大な何かが飛び出してきた。
開かれた口には、大きな牙が並んでいる。
仰天したカラスは、後退もままならず、そのままの速さで、牙の間をすり抜けることにした。
ガシン！
牙と牙とが交錯する。
その僅かな時間をくぐり抜け、カラスは巨大な牙を躱した。
もっとも、カラスの尾羽を三枚だけ牙の間に忘れものしたが、取りに戻る気は、もちろんなかった。
カラスは一目散に、牙の届かぬ高みへ舞い上がり、下を見おろした。
だが、その時は、すでに巨大な何かは海の中へ消え、水の泡だけが海上に盛り上がっていた。

＊

カラスは、カットナルの肩に戻ってきた。

「陸はあったのか？」
カットナルはカラスに訊いた。
恐怖で嘴の根を鳴らしながら、カラスは一言だけ――。
‖**ない**‖
カラスは、それだけ答えるのが精一杯だった。
「そうか……、ん？」
カットナルは、カラスの落ち着かぬ様子にやっと気づいた。
「どうした……、なにかあったのか？」
‖**あった、あった**‖
カラスは羽根をバタバタさせ、海の怪物を教えようとした。
‖**海、海、こわい、こわい、こわいもの**‖
残念ながら、カラスの知能では海で出会ったものを具体的に表現する能力はなかった。
だが、六人の誰もが、この海に何か得体の知れない恐怖があることだけは分かった。
ブンドルは男を見すえて訊いた。
「何かいるのか？……お前は知らぬのか？」
‖**知りません。私達は海辺に近づいたことすらないのですから……**‖
男は海を見つめた。
カラスから伝わった、海の持つ得体の知れぬ恐怖感は、この男にも十分感じられたはずなのに、海の向こうを見つめる憧れのまなざしは変わらなかった。

＊

村に戻って来た六人のまわりに、村人達は期待に溢れた顔で集まってきた。
ブンドルが口を開いた。
「話は分かった……」
村人の喜びの感覚が、どっと六人に押し寄せた。
「だが、海を渡ることは出来ない」
‖なぜ、どうして？‖
部外者の六人がやりきれないほど、失望の感覚が襲ってくる。
「あの山の頂きにあるという船がどんなものであるにせよ、目的の陸地が見つからぬ限り、船を出しても意味はない。大海原のただ中で、餓死を待つだけだ。それよりも、ここで、より長く生きるための手段を考えた方がよい」
‖長く生きても同じことです。いずれ私達はみんないなくなってしまう‖
「そうとばかりは限らない。畑を耕し、狩りをして……」
‖なんです、それは？‖
「森を切り開き、動物を捕って食べる……」
そこまで言って、ブンドルは口ごもった。
間髪を入れず、男が訊いた。
‖動物を捕るって？……動物を死なせることですか？　私達だけのために‖

村人達の心の中のどよめきが、手に取るように分かった。
「我ながら、愚かなことを言ったようだ」
ブンドルは、かぶりを振りながら呟いた。
そうなのだ。彼らは動物達と意思を通わすことが出来る。そんな相手を食べるために殺せるというのか？　動物とはいえ、祖先は同じ船でここにやって来た仲間なのだ。
最初に出会った、白い肌の娘が無邪気に訊いた。
‖**神様は動物を殺して食べるのですか？**‖
「我々は神ではない」
ブンドルは、きっぱりと言いきって——、
「それでは、諸君は何を食べているのだ？」
‖**みんなの恵みです**‖
「みんなの恵み？　それは何だ？」
‖**みんなの恵みとしか言いようがありません**‖
六人は、村人達の心を読んでみた。
だが、誰の心にも、恵み以外のものを食べているという意識はなかった。
‖**あなた達神様は、何を食べているのですか？**‖
再び、娘に訊かれ、ブンドルは答えに困った。
考えてみれば、ムピを耳の裏に付けた時から、六人も村人と同じ、この島の動物と意思を通じ合える人間になっていた。

六人は、意思を通じ合え、しかも敵意のない動物を殺して食べられるか……。

＝えらいことになってしもた＝

ケルナグールがうめいた。

他の五人の思いも同じだ。

ブンドルは娘に、とりあえず言った。

「我々には、我々の食べ物がある。我々は自分の食べ物は運んできた」

レミーはドキッとして、ブンドルを見た。

ブンドルの言っている食べ物とは、レミーが操縦席に運び込んだ食料のことだとは分かっていたが、その量は一人一食分しかないのだ。

＝それが神様の食べ物ですね＝

娘が言った。

ブンドルはもう一度、娘に繰り返した。

「我々は神ではない。頼む、少し、六人だけにしてはくれまいか」

ブンドルは、今、こう答えるよりなかった。

＊

広場から村人が消えた後、六人は溜め息をついて、その場に座り込んだ。

「動物の意思が分かるっていうのは……、メルヘンでは許せるが、俺達は食っていかねばならない……」

と、真吾はいつものように当たり前のことを口に出した。
「いったい、奴らは何を食って生きているんだ？　何がみんなの恵みだってんだよ」
とキリー。
「確か、童話のドリトル先生は菜食主義者だったわ」
と、レミーが幼い頃を思い出して言った。
一生、肉が食べられないと思ったのだろう、ケルナグールは肩を落として声もない。
カットナルが、例のごとく講釈をはじめた。
「ま、植物性蛋白質だけでも、人間は生きていけぬこともないが、植物だって、考えようによっては生き物だしの」
「そうさ。それに、あの虎はなんだ？　俺ァ、菜っぱ食って生きてる虎なんて、見たことがないぜ」
キリーは暗に、狼だって菜っぱだけでは生きていけない、と言いたいようだった。
「それに、草食動物だけでは、この緑の島なんて、あっという間に食べつくされて、禿げ山になってしまうわ。草食動物には肉食動物がいて、初めて、自然のバランスが保てるんだもん。それが、なぜ、この島は緑が残っているの？」
とレミー。
「聞かれても困るよ。自然に天敵が必要なのは、俺だって分かっている」
農作業に詳しい真吾が言った。
「ところが、この島は敵同士がお友達ときている」

——いったい、彼らは何を食べて生きているのか？——

六人は、情なくも複雑な気持ちで、宇宙船から持ち出した残り少ない食料を食べ、なすすべもなく今夜は寝ることにした。

その日は、六人の誰も、村人達が物を食べる姿を見ていなかった。

＊

六人は、村のはずれにある六つの小屋を分けてもらった。

村人の人数ぎりぎりに立てられた小屋のうち、六つも占拠するのは心苦しく、最小限、女性のレミー用と男性用の二つだけでいいと言ったのだが、村人達は、神様はやはり、一人にひとつずつ家を持つべきだと言い張って譲らなかった。

彼らは、どうしても六人を神様にしておきたいらしいのだ。

もっとも、狭い小屋に大男を五人も押し込んだら、窒息しかねないことも確かだった。

キリーは、小屋に潜り込むと同時に、丸太棒のように倒れ、眠り始めた。

考えてみれば、ここ数日、一睡もしていなかった。眠れるほど安全な場所にいたこともなかった。

なにしろ、この小屋には入口に扉さえなく、開け放しだ。それは、この村がいかに安全かを物語っていた。

ここなら寝首をかかれる心配もないし、仮に誰かに襲われても、明日からの食糧のことを考えれば、いっそこのままあの世へ行っちまった方が楽かもしれないとすら思った。

少しは腹も減っていたが、眠りの誘惑の方が強かった。

おそらく、他の五人も同じ気持ちのはずだ。
キリーは、深い眠りの中で、夢を見ずに眠り続けた。
どれほど時間が経ったろう。小屋の入口でかすかな音がした。
キリーの頬がピクンとひきつった。
ニューヨークのブロンクスで、敵のやくざの殴り込みや、警察の手入れに慣れっこになっていたキリーの体は、忍び込む足音に、たとえ熟睡していても、条件反射してしまうのだ。
しかし、今、疲れにぼやけた頭は、元どおりにはなっていない。
キリーは、ぼんやりと目を開けた。
月あかりに、人影が立っていた。長い髪、丸みをおびた体……、いくらぼーっとした頭でも、このシルエットを見て男と女を取り違えるキリーではない。
しかし、シルエットは明らかに上半身が裸だ。間違っても、レミーが男の部屋にこんな姿で忍び込んで来る筈はないし――。
「あん？　女？　なんで？……レミーちゃんかえ……」
――あ、これは夢だ。夢でござるな……。夢にしても、今日の俺は疲れすぎとる。ご免ね、抱く気ないの……。でも、おいしそ――
などと、心で舌舐めずりして、それでも再び目を閉じようとした。
とたんに、体の内側で女の声がした。
――私を食べて下さい――
「!!」

キリーは、バネ仕掛けのように跳ね起きた。これほど心の奥で、女の声を聞いたことはなかったからだ。

キリーの前に立っているのは、村の女だった。それも、十七、八だ。

‖私を食べて下さい‖

キリーは頭をかいた。やたらあわてていた。

「いやあ、あの……、食べたいのは山々だけど、そういきなり言われても……。あのね……、こ～いうことは、やっぱり……、心と心が触れ合ってだな、お互い、その気にならないと……。それに、そりゃ、君が抱かれたい気持ちは分かるよ。この俺だからな。一目惚れするのもよ～く分かったりする。しかし、君は若い。恋に恋する時もあり、一目会ったその日から……」

すっかり純情して、しどろもどろ。

「それに、おじさん、お金持ってないし……ね」

――何を言っているんだろう――

自分でも分からなくなっている。

女はキリーの胸にすり寄った。

‖私を食べて下さい、おいしそうって、おっしゃったでしょ‖

「え、あ、あの。最近の若い娘は、まったく……」

思わず、竦んでしまうキリーの耳に、突然、

「舐めんじゃないわよ！」

隣の小屋からレミーの叫びが聞こえ、激しい物音がした。

「あん？」
キリーは、思わず女を押しのけて、外に出た。
「このッ！」
レミーの鋭い気合いの声がした。
レミーの小屋の天井のシダや草が吹っ飛び、人影が投げだされた。影は背中から地面に叩きつけられた。
「ん、たく、もう。どんなに安全そうに見えたって、女の子に安心な所はどこにもないんだわ」
レミーがプリプリ怒りながら、小屋から出てきて、呆然としているキリーを見つけ、
「あ、キリー。ね、聞いて、聞いて。この男ったら……、私の小屋に忍び込んで──」
と、隣の小屋からブンドルの声がした。
「レミー、よく見てごらん。君の小屋に忍び込んだ男を……」
「えっ？」
レミーが、倒れている人影をまじまじと見ると、長い髪、ふくらんだ胸──。
「え……？　あ……、女？」
「どうなってんだ、こりゃ」
別の小屋から真吾が出てきた。後ろ手に女を引っぱってる。
「えらいこっちゃ、えらいこっちゃ」
ケルナグールも飛び出してきた。
と、もう一人。

「わしゃ、女は嫌じゃ、独身主義じゃ！」
その声はカットナルだ。
それぞれ後ろに女が立っている。
「ブンちゃんも？」
レミーがブンドルを見ると、しっかり女の手を握りしめている。
どうやら、村の女達がそれぞれの小屋にあてがわれたらしい。
「でも、だからって、なんで私が女の人なの？　私、そんな趣味はないもん」
「わしだって、人間食う趣味はないぞい。いくら肉好きとはいえのう」
ケルナグールが言った。
仰天したのは、真吾とキリー、カットナルの三人だ。
「人間を食う？」
ブンドルは頷いた。
「どうやら、ケルナグールが一番、事態を把握しているようだな。彼らは女を送り込んだのではない。食べ物を送ってくれたのだ」
レミーは息を飲んだ。
「食べ物……、この人達が？」
「そう。女の体は男より柔らかくてうまいというわけだ……」
ブンドルはケルナグールをチラリと見て、
「自分が惚れられるはずがない。そう自覚している人だけが、言葉通りに受けとれたようだな」

「いや、少しは別の意味も考えたのだが……。やっぱり、食い物のつもりだったのか」
ケルナグールは、照れくさそうに頭をかいた。

＊

「村の諸君、出て来てもらおう！」
ブンドルが広場の中央に出て叫んだ。
ぽつり、ぽつりと村人達が出てきた。
「早くだ！」
ひときわ大きなブンドルの声に、村人達が慌てて飛び出してきた。
――**大変だ。神様が怒っている！**――
彼らの動揺が、ビンビン六人の内側に響く。
村の全員が、またたく間に広場に集まった。
ブンドルが村人を見回しながら――、
「みんなの恵みとは、こういうことなのか？」
「てめえら、仲間を殺して食って、それが恵みだってのか？」
キリーが、それこそ食らいつきそうな声を出した。
最初に出会った男が進み出た。
――**誰も殺してはいません。みんな、進んで食べられるのです**――
男はこともなげに答えた。

「あん?」
六人は拍子抜けしたように立ちすくんだ。
‖みんな、昔からこうしてきました。わたし達だけでなく、動物達もです‖
「動物達も?」
レミーには信じられなかった。動物の世界は、確かに弱肉強食だ。しかし、自分から進んで食べられようとする動物などはいない。
‖はい。私達は数が少なくなければ、この土地では生きていけません。動物達も同じです。草を食べる動物が増えれば、草が減ります。肉を食べる動物が増えれば、いつしか共食いで全て死に絶えてしまいます。私達は、ずーっと昔から故郷に帰りたいと思っていました。故郷に帰るのは、動物であろうと人間であろうと構いません。みんな、心が通い合う仲間ですから……。そのためには、一日でも長く、誰かが生き続けなければなりません。私たちは、決して増えてはいけないのです。みんな、それを知っています。だから、最低必要なもの以外、いらなくなった人や動物は、喜んでみんなの食べ物になります‖
「あなたもそのつもりなの?」
レミーが男に訊いた。
‖もちろんです。ちがいますか?‖
男は心からそう答えた。なまじ、男の心が読めるから始末が悪かった。男が心からそう思い込んでいるのが六人にもよく分かるのだ。
真吾は、ある疑問に解決が出たような気がした。

「それで、オスとメスと子供一人の、一、二、三しか数が必要ないのか」
「子供が二人生まれたらどうなるんだ？」
キリーが、夜空を見上げながら、無表情に言った。
—俺は自分の生まれを知らんが……、もし、長男でなく次男だったら……、どうなっているのだ——
‖二人目は生まれません。子供は一人しか作りません。その子が大きくなれば、親のオスかメスのどちらかが食べ物になります‖
「この女達も、進んで俺達に食べられに来たのか？」
‖神様にも食べ物が必要です。もうすぐ私達は故郷に帰れます。この人達は、あなた達に食べていただけるのを喜んでいます‖
六人の小屋に来た女達は微笑した。
カットナルがうめいた。
「神も仏もなんにもないのか……」
ブンドルが呟くように言った。
「ここは別の世界だ。戦いのない、動物達が生き続けるためだけの世界……」
男は続けた。
‖最初にみんなの恵みになったのは、空を飛ぶ動物達だったそうです‖
カットナルは、肩の上のカラスを見た。
カラスはうなだれていた。

カットナルは、カラスの心の中のカラッポな部分を感じとった。

＝そうかもしれぬな。飛んで行く先のない鳥は生きていく気力をなくすかもしれぬ。だが、お前には俺がいるぞ＝

〃クワッ〃

カットナルの気持ちにカラスがうれしそうに答えた。

男は言い伝えをさらに語った。

＝次にいなくなったのは、とてつもなく増える小さな生き物達。木や草や動物に取りついて死ぬ元になる、もっと小さな生き物達だったそうです＝

そういえば、六人はこの土地に蟻や蜂、蚊などの昆虫の姿を見かけなかった。もっとも、気づく暇もなく一日が過ぎたのだが――。

カットナルは開いた口が塞がらなかった。

＝微生物や細菌まで、自分の意志で消えていったというのか？＝

＝微生物や細菌？……どんな生き物です？＝

六人の沈黙の中、カットナルの思考を捉えた男が訊いた。

「いや、分からなくてもいい。この土地にいないことはもう知っている」

カットナルは、操縦席に流れ込んだ泥水の検査をした時に、何もいなかったことを思い出していた。

――この土地に細菌がいるとしたら、例えば、ビフィズス菌のように生体の生存に必要不可欠な細菌だけをいうわけだ……。一寸の虫にも五分の魂とはよく言ったもんだ。それどころか、一ミク

ロンの細菌にも〇・五ミクロンの魂か——
レミーはレミーで別のことを考えていた。
＝生きる意味のない者は消えていった……だとしたら、あの古代の生物はなぜ、進化を無視してここに生きているの？＝
男が訊いた。
「例えばあの首長、ずん胴のデカ兄さん達」
＝古代の生物ってなんですか？＝
＝昔から、ずっといましたよ。彼は一回食べ物になれば肉を食べる動物をたくさん生かさせてくれます。みんなのために、これからも生きていく必要のある動物だと思いますけれど＝
「そういうことじゃなくて……」
だが、進化の話をしても、男に分かるはずもない。
「いいの、なんでもないわ」
レミーは溜め息をつくしかなかった。
キリーがなげやりに言った。
「てめえら、人間じゃねぇ……と言ったって通じないよな」
六人は途方にくれた。
動物達と心を通じあえるメルヘンの理想郷——。しかし、地球の人間としての意識のある六人にとって、絶望的な状況でしかない。
突然、ブンドルが口を開いた。

「よろしい。郷にいっては郷に従え……、諸君のやり方でやることにしよう」
一同はブンドルの顔を見た。
「諸君の中から食べ物をいただこう」
村人の中から、喜びの思いが湧き上がった。
「だが、わたしは舌がうるさい。大人の肉は硬すぎる。柔らかい肉が欲しい」
十四、五の娘の抱いている乳飲み子を指した。
「その子をいただくとしよう」
「ブンドル、何を言い出すの!!」
五人は呆気にとられてブンドルを見つめた。
ブンドルの心はシールドされていて読めない。
「さ、海の向こうに連れていって貰いたければ、その子をよこしなさい」
村人の心に激しい動揺が起こった。
――いやです。この子はわたしの子です――
娘の心の絶叫が六人の内側に響く。
「さ、諸君、私に喜んでその子を差し出すのだ」
続いて聞こえる村人の声――。
――故郷に行けるんだ――
――みんなのためだ――
――いやです。私の子です――

――さ、渡すんだ、神様に――

――いやです。私を食べて下さい――

――聞き訳のないことを言うな――

――この子は渡しません――

村人と娘の心の戦いが激しくおこった。

村人の気持ちの中の苦悩も、ありありと見てとれる。

その時だった。きっぱりとした思いが皆を圧した。

――その子はみんなの子だ。みんなの恵みにはできない――

あの男だった。

――そうよ。この子を渡すぐらいなら、故郷なんて行かなくていい――

あの白い肌の女だった。

いつの間にか、二頭の白い虎が六人に牙をむいている。

男の思いは次第に村人達の間に拡がっていった。

じわじわと、しかし確実に――。

やがて、村人全ての声になった。

男がブンドルの前に進みでた。

――子供はやれません。故郷は諦めます。神様、ここから出ていって下さい――

ブンドルは微笑し、頷いた。

「どうやら、諸君は生き物である前に親であるらしい。これで我々との繋(つな)がりが見つかった。私は、

明日から諸君の神になろう。そして、海の向こうに連れていくことを約束しよう。もちろん、子供も諸君の誰も食べはしない」
　村人の間に安堵の思いと、次に喜びがみるみる膨れ上がった。
　ブンドルは五人の仲間に向かって行った。
「勝手に決めたが、悪かったかな？」
　一同も納得するより他に答えは見つからなかった。
　レミーがニッコリ笑って、ブンドルに声をかけた。
「いよッ、えらそ〜に！　神様ちゃん……」
「まあね……。しかし、我々が彼らを納得させる手はあれしかあるまい」
「ま……、いえるかも。でも、今は私達、誰も子供いないのにね」
「机上の空論もたまには役に立つ。わたし達にはね」
　ブンドルは肩をすくめた。

＊

　翌朝――。
　歳が上なだけ早起きのカットナルとケルナグールが、小屋の前で話している。
「神様になるか……。他の若い者は、およそ神様なんぞ関わりのなさそ〜なはぐれもんじゃけ、ここは年長のわしらが頑張らにゃいかんぞ」
　と、カットナルはやる気十分だった。

「神様といってもなあ……どの神様じゃ？　いろいろあるけなあ」

　と、ケルナグールがこめかみをポリポリかく。

「ここの人間は宗教に無知な、いわば処女じゃ。最初が肝心。いいかげんなものを教えたら、この星の運命まで変えてしまうやもしれん……。まず、隣人愛にあふれた……」

「ここの連中は隣人愛どころか、動物愛にまで溢れてるんではないかの？」

「ングググ……。では、人類平等……」

「人類どころか動物まで平等じゃけ」

「戦争反対……、汝の敵を愛せ」

「敵なんかどこにいるんじゃ」

「人間は生まれながらにして自由である」

「誰が奴らの自由を縛っとるのよ」

「ん？　そりゃ……、ま、いってみれば、ここを取り巻く海じゃよな」

「じゃ、海がキライ〜ッて念仏を唱える宗教か？　そんなの知らんぞい」

「んぐぐ、菜食主義……」

「わし、絶対反対……。考えてみい。神様同士で意見が違うと……」

「うむ、困るのは民衆じゃな」

「カットナル、お前、元、アメリカ大統領じゃけ、ここに似合った神様ぐらい知っとるじゃろ」

「いや、アメリカは人種の坩堝。難しくての。どれかにえこひいきすると、たちまち選挙に響くんよ」

「じゃ、おまえさん自身は何を信じとるんよ」
「わしゃ、親父を暗殺され、この片目を失った時から『力は正義じゃ』……しか信じとらん」
「そんなのを教える気か？　ここの人に……」
「ん？　いや、『力は正義』はわしの個人的な主義であってな……。よせよ、ケルナグール。わしゃ、それを人に教えるほど過激分子ではない」
「じゃ、どうせいっちゅうんじゃ」
「そうじゃ、お前はどうじゃ」
「あん？」
「お前のように単純な男が信じている神様なら、結構、ここに似合っているかもしれん。お前の神様はなんじゃ？」
「うん、いろいろ知っとるよ」
「うんうん」
　とカットナルは身を乗り出した。
「なにしろ、ボクシングやっとったろ。試合ごとに神頼みじゃ」
「うん、それで……」
「あっちの神様、こっちの神様、もっと良いのはないかと、聖書から仏典、コーランはもとより宗教大全集まで買って世界中の神様を拝んだが、どれもこれも何もしないで試合に勝たしてくれるようなのは見当たらなくてな」
「そりゃそうじゃろ。わしも受験勉強の時、片っ端から参考書を買い漁って本棚に詰め込んだが、

どれもものにならなかったわい」
「むずかしいのう、神様は……」
と、ケルナグールは溜め息をついた。
「まっこと難しい。どんな地球の神様も、地球の戦争を止められんようだったしのう……」
二人は考えこんでしまった。
そんな二人の肩を、レミーがポンと叩いた。
「ど～したの。今日も元気だ、空気がスウィート。おでこに皺つくっているような朝じゃないでしょ」
「いやあ、その、う……。神様の話なんじゃがね」
カットナルはレミーに、考えあぐねた顔で言った。
レミーはあっけらかんと、
「そ、神様、神様、今日から神様よね」
「あんた、そんなイージーな……」
「イージーカム、イージーゴー、早く、あの山のてっぺんに行って、海の家とかっちゅう、方舟もどきを探せばいいのよ……。とりあえず、そうでしょ？」
「あッ!!」
カットナルとケルナグールは、顔を見合わせ、おもわず口をポカンと開けた。
「神様は素早く行動、さっさと仕事を片づけましょう。ね」
と、レミーはウインクした。

「行くぞ、カットナル！　ケルナグール！」
ブンドルが二人を呼んだ。
声の方を見ると、キリーも真吾もブンドルも背中にリュックを背負って立っている。
「食料は、村の人に頼んで、木の実や果物を集めてもらった」
と、真吾。
「のんびりしていると置いていくぜ」
とキリー。
カットナルは、えらく感心したように頷いた。
「なるほど、真理だ。神様に言葉はいらない」
「うん、行動あるのみ。あとはみんながついてくる」
とケルナグール。
二人はすっくと立ち上がった。
そして——。
「うおい、待ってくれ！　わしらも行くぞ」
慌てて小屋に戻って、山登りの準備を始めた。

第4章

禁断の山へ

教育革命速習法

六人はブロキオザウルス風の背に乗って、村を出発した。
道案内は、最初に出会った男と娘、そして二頭の白虎だ。
「いつまでも、男と娘じゃあね……。名前はないの？」
レミーが男に訊いた。
＝名前？　何のことです。人間のオスとメスじゃ駄目ですか？＝
「オス、メスねぇ……。そりゃ本質は変わりないかもしれないけどさ……。そう言っちゃ身も蓋もないじゃん。例えばね、わたし達、メス神様とオス神様1、オス神様2、オス神様3として……、あとの二人は何と呼べばいいの？」
男は、ケルナグールとカットナルを見て、
＝デカ神様と片目神様＝
「差別用語じゃ！」
話をなにげなく聞いていたカットナルがわめいた。
「私達には、それぞれ名前という呼び名があるの。あなた達は、どんな名前がいいのかなあ」
＝じゃあ、あなたがつけて下さい、名前を……＝
ケルナグールがしゃしゃり出て、聖書の知識をひけらかした。
「最初に会った男女じゃけ、アダムとイヴはどうじゃ？」
「単一宗教に片寄りすぎじゃ。ここは聖書の世界じゃないんじゃぞ」
カットナルが、宗教の平等？　を唱えた。
「わたしも、神様関係はゲップで割引って感じ」

＝名前って、そんなに大切なんですか？　区別がつけばいいんでしょう？＝

どうでもよさそうに、男が訊いた。

「言われてみれば、確かにそうだけど——。ま、気分の問題よね」

＝じゃ、あなたは、何て名前なんですか？＝

「レミー、レミー・島田」

＝レミー？……じゃ、このメスはミレイでどうですか？……＝

「ミレイ？……」

——なるほど、お酒の銘柄のレミーよりはましかも。なにせ芸術家ミレーだもんね……。せめて、わたしの名付け親もそれぐらいの工夫が欲しかったなあ——

レミーは肩をすくめて、

「……で、あなたは？」

男は前に座っているブンドルを見て、

＝あの方は、何という名前ですか？＝

「え？　ブンドル？」

＝では、ルドンブ＝

いきなりブンドルの声が入ってきた。

＝ひっくり返せばいいというものではない。わたしの名を使いたいなら、レオナルド・メディチ・ブンドルから、レオを使うがよい＝

レミーは思わず吹き出した。

「気にしているんだ」

＝＝我々の名前については、納得出来ぬものが多い。ここらで軌道を修正しておきたいのでね＝＝

「そりゃ、いえる」

カットナルとケルナグールが頷いた。

キリーと真吾は、自分の名前を何度も繰り返してみて、さほど違和感がないのを再確認して、互いにニヤリと笑い合った。

こうして、男と娘の名は、レオとミレイと決まり、二頭の白虎は、オスがガイター、メスがラトになった。ちなみに、ブロキオザウルス風は、もろにデカだった。

——あーあ、ほとんどイージー……。ま、名前なんて、ほんと、どうでもいいのかもね——

名前をつけるのを提案しながら、レミーもやっぱりそう思うのだった。

一同は、森の中を、山を目指して進んでいく。

森の中で出会った動物達の思考は、どれも、尊敬と期待感に溢れていた。

「まるで、戦場に出陣するローマの将軍ではないか」

カットナルとケルナグールは、満足げに鼻をひくつかせていたが、真吾とキリーは所在なげに、そわそわするばかりだ。

何しろ、見送るのは動物ばかりだ。

「ディズニーのアニメーションだな、こりゃ……」

「素直に喜べるガキでいたかったぜ」
この動物達とどうつき合うのか？
先を考えると、ほんとうに、子供に変身できる魔法のバトンでも欲しい気持ちになってしまう。
だが、レミーは動物達を見つめながら、別のことを思っていた。見送る動物達の中には、地球でなら絶滅したはずの生物の他に、レミーが見慣れている現代の生き物もいた。
ほとんどが、レミーの知る動物そのままの姿だ。
けれど、なかには信じられないものがいた。例えば、ゴリラに似た類人猿が胸を叩(たた)きながら送ってくれている。顔かたち、体格ともに、どからみてもゴリラだ。しかし、そのゴリラは長い尾を持っていた。長い尾のゴリラなど、見たことも聞いたことも無かった。
どこから見ても鹿としか見えない動物がいた。だが、角が三本もある鹿がどこにいるだろう。それが目の前に立っているのだ。
なにより、気になるのは、動物の肌(はだ)の色だ。
白虎ならまだ許せる。動物の中には、時たまアルビノと呼ばれる白子が生まれることがある。
だが、目の前を通りすぎる赤いうさぎや、横縞(よこじま)のしま馬や、青い猪(いのしし)となると、もう常識の枠外(わくがい)だ。
英語で、酔っ払ったたとえに、ピンクの象(エレファント)という言葉があるが、これこそまるで酔っ払いの書いた落書きの立体化だ。
異星の動物だから変わっていて当然だとはいえない。これほど地球と同じ自然環境なのだから、生物の進化だってそうは変わらないはずなのだ。

動物の肌の色には、それなりの意味がある。うさぎの白は雪の中の保護色として意味を持つ。現に、岩場の岩うさぎは、それなりに黒ずんだ色をしている。だが、赤いうさぎに何の意味があるのだ。この星のどこに、真っ赤な土地があるというのだ。
しま馬の縞は、草の繁った野では見分けがつけにくい。でも横縞では、わざと目立とうとしているとしか思えない。
なまじ地球の動物そっくりの姿をしているだけに、なおのこと異様だ。
こうみると、一見、普通の形に見える他の動物も、よく調べればどこかに異なった部分があるのかもしれない。
——わたし達と同じ人間に見えるレオ。レオは黒い肌に金髪、そして青い目……、いくら混血だとしても、こういう人が遺伝学上、生まれるのだろうか？……——
動物学に夢中で、いささか人類の遺伝学がお留守になっていたレミーだが、それでも、疑問は大きくなる一方だった。

やがて、ブロキオザウルス風は、山の麓にやってきた。
斜面は急角度で山頂へ延び、巨大な四つ足のブロキオザウルス風では、とても登れそうもない。
六人はブロキオザウルス風から降りた。
レオが山頂を見上げながら、
——ここから先は、私達も足を踏み入れたことはありません——
「おいおい。じゃ、あんた達の海の家さんを見た奴もいねえってわけ？」

キリーが呆れて訊いた。

‖ええ。今、生きているものは誰も‖

「じゃあ、ガセネタっちゅうこともあるわけだ。ありもしないものを探さなきゃなんないのかい？」

‖そんなことはありません！‖

レオは、むきになってキリーをにらんだ。

‖私達は、ほんとうのことしか言いません。だから、言い伝えも本当です‖

キリーはニヤリと笑って、

「おお、こわ……。分かってるって。言ってみただけさ。あんた達は、馬鹿がつくほど正直だ。フフン、あんたのご先祖さんのことも信じるさ」

「だが、どうして君等は、この山の上に近づけないんだ？」

と真吾。

‖私達は海へ出ることが出来ません。ですから、海へ出る道具にも近づきません‖

「じゃあ、あんた、ここから帰るかい？　あとは俺達に任せてさ」

とキリー。

‖いいえ‖

レオはきっぱりと言った。

‖私達は決めたのです。神様と故郷へ帰ることを……。神様が来た以上、私達も海へ出ます。海へ出る海の家を取りに行きます‖

「そういうことなら……」
ブンドルがマシンガンに弾を装塡して、レオに手渡した。
「これを持つがよい」
――これは？――
「生き物を傷つけ、殺す武器だ」
――ころす？――
とたんに、レオの体が震えだした。
手からマシンガンが滑り落ちた。
「なにをさせるの？」
レミーが駆け寄ってマシンガンを奪い取るように拾った。
「むちゃよ。なぜ、こんなものを持たそうとするの？」
「敵がいるかもしれぬからだ。この山の中にな」
「敵？」
「レオ達は、なぜこの土地に来てから、今に至るまで、海に出ようとしなかったのだ？」
「えっ？」
「禁じられているから？　それだけの理由だと思うかね」
「あっ……」
レミーにも気づいたのだ。
どんな動物であれ、まだ足を踏み入れていない地を目の前にした時、危険さえなければ、いつか

は必ず、その地へ入り込もうとする習性がある。

「分かったね。ただ禁断の文句だけで人を遠ざけることはできぬ。生き物が入り込まぬのはそこに確かな危険があるからだ」

真吾も武器を揃えながら頷いている。

「そういうこと。おまけにレオは、その危険がどんなものか知らない。にもかかわらず、立ち入ろうとしないのは、本人も気づかない記憶の底、たぶん祖先の誰かがよっぽどひどい目に遭ったに違いないさ」

突然、カラスが鳴いた。うなされたように、海で出会った危険を告げた。

＝**そう。こわい、こわい**＝

ブンドルは山の頂きを見上げた。

「同様に、彼らはこの山にも踏み込めぬと言う。ならば、この山にも同じような危険があるはずだ」

「分かったわ」

レミーはレオにマシンガンを渡した。

「おまけに、この人達の心とは通じ合うことのない危険な存在ね」

「その通り。彼らの心が通じれば、当然、レオ達はその危険の正体を知っているはずだからね」

「心の通じぬ奴……。なら、ここの動物と違って、そいつを食ってもバチは当たらんの」

ケルナグールが舌舐めずりした。

「食に値するかどうかは分からぬが、敵であることには違いない」

‖敵？‖

レオはマシンガンを触りながら、ミレイの顔を見た。
二人にとって、よく理解できない感覚なのだ。
「そう、やらなければ、こっちがやられる。黙って何もせず死んでいく者には敵はいらない。だが、何かをしようと動き出せば、必ず敵が生まれる……。それでもやるかね？」
レオはマシンガンを握りしめた。

‖使い方を教えて下さい‖

ブンドルは頷いて真吾に言った。
「真吾君、教えてやりたまえ、君の分野だ」
ミレイは心許(こころもと)なさそうにレオを見つめていた。
レミーにミレイの心の動きが響いた。

‖こんなはずではなかった。神様が降りて来て……、希望が見えて、同時に敵まで見えてきた。これからどうなってしまうのか？‖

ミレイの胸の不安が、痛いほどレミーに伝わってくる。
だが、レミーは〝仕方がないの〟としか言いようがなかった。
――あなた達のみんなが望んでいることなのだから……。もしも、私達が本当に神様なら、他の手立てを見つけられるかもしれない……。でも、そんな神様はレミーのいた地球にも、宇宙の旅の途中の星にも、どこにもいたためしがないのも確かなのだ。仕方がないのよ――
そう思う自分も辛(つら)かったが、それを聞かせて、さらにミレイを不安がらせる気にもならなかった。

レミーは、ミレイにこの思いを知られぬよう、ムピの力で心にしっかりシェルターをかけた。
そして、黙ってミレイに銃をさし出した。
ミレイは恨めしそうにレミーを見た。
──**こわい……。とても、こわい。でも、やるんですか？**──
レミーは、昔、地球で外人部隊に入隊して初めて戦闘に出撃した日のことを思い出していた。なぜか、今のミレイにとても似ている気がする。
レミーは、その思い出を無理をして振り払った。
「レオについて行くのなら……。私がやり方を教えてあげる。敵の倒し方を、ね」
レミーの口調は、いつになくきつかった。
それは、自分自身の昔に浴びせかけているのかもしれなかった。

＊

パシン、パシン!!
岩場に置かれた六個の果実が、みるみる弾かれていく。
ミレイが六連発銃を練習しているのだ。
百発百中だ。
「やるもんだねえ」
キリーが口笛を吹いた。
「確かに覚えが異常に早い」

ブンドルも呟いた。
それまでレミーは、ミレイにたった二回、銃の撃ち方をやって見せただけなのだ。
教えているレミー本人も、目を丸くしている。
なにしろミレイの撃ち方は腰の構え方といい、銃の支え方といい、レミーそっくりなのだ。
‖これでいいんですか？‖
「あん……。結構、結構……。わたし、負けそう」
‖後は？‖
「ん？　うん。弾を素早く入れ替えるの」
‖どんなふうにやるんですか？‖
レミーは、銃の回転弾倉を指して、
「ここ、シリンダーっていうんだけどね」
‖難しい言葉は分かりません。やってみせて下さい‖
「え？　うん」
レミーはシリンダーの弾を素早く入れ替えた。
ミレイは、レミーの手つきは一切見ずに、目を閉じている。
レミーはミレイに注意した。
「ちょっと、しっかり見てちょうだい」
‖いえ、もう、分かりました。それ、貸して下さい‖
「あん？　ええ」

ミレイは銃を手渡されると、シリンダーをずらし、目にもとまらぬ早さで弾を入れ替えた。

これも、レミーと寸分違わぬ素振りだった。

「どうなっちゃってんの？　あなた、本当に素人さん？」

そう言うより他なかった。

レミーのテクニックは、何年間も厳しい練習を繰り返した上での、いわば血と汗との結晶だ。

それを、銃を持ったこともない、いや銃というものがあるということすら知らないミレイが一瞬のうちに覚えてしまったのだ。

レミーは、ガックリするというより白けてしまった。

「そうか、なるほどな」

ブンドルは頷いた。

「なるほど、なあに？」

レミーが訊き返した。

「あの娘は、レミーから銃を教わっているのではないのだ」

「どういうこと？」

「レミーが体で覚えた感覚を、そのまま真似ているのだよ」

「体で覚えた感覚？」

「そう、技術は説明や練習ではなかなか身に付かぬが、教師の体得した感覚を、そのまま感じることが出来れば、すぐ身に付けることが出来る」

「そか。じゃ、あの娘、わたしの体で覚えている撃ち方を、テレパシーで自分の体に移し替えて実

演したんだ」
「そう。しかも、あの娘、十五、六の最も体の柔らかく、しなやかな時期だけにね……」
「それだけ余計よ。ブンドルさん」
「ん？　いや、その、あなたも体の老け込む歳ではない」
ブンドルとしては気を遣ったつもりだったが、レミーは歳を言われて、ますます落ち込んでしまった。
カットナルがいたく感心して、すぐに胸算用を始めた。
「便利と言おうか、恐ろしいと言うか、この方式が実用化すれば、教育産業に革命が起きるぞ」
訊かれもしないのに、ケルナグールは対抗意識を燃やして言った。
「なあに、ボクシングはテクニックじゃない。いくらテクニックを真似してもパワーは個人的なもんじゃわい」
だが、ミレイに比べて、少し離れた場所で真吾に教わっていたレオは――。
「あのな、マンシガンというのは、火薬の爆発の反作用でな、絶えず上に銃身が跳ね上げられるわけでな」
まず、真吾の講釈から受けねばならず、マシンガンに指一本触れさせて貰っていなかった。
レミーが、つかつかと真吾の傍らに来て、
「先を急ぎましょうよ。ちょっと貸して」
真吾からマシンガンを捥ぎ取るようにして取った。
「なにをする、レミー」

「いいから、いいから」
いきなり木々の葉めがけて、ぶっぱなした。それから、レオにマシンガンを投げ渡し、
「やってみて」
「よせ！　素人が下手に撃つと、自分の足を撃つぞ」
真吾の言葉が終わらぬうちに、
タン、タン、タン！
マシンガンが渇いた連射音を吐いた。
レオのマシンガンは、木々の葉を見事に撃ち抜いていた。
「こういうこと。さ、山登り……」
レミーは真吾にウインクした。
「あのな……」
真吾は呆然となり、それでも呟いた。
「基礎って大事なんだけどなあ……」
国連平和部隊で、五歳の時から十五年間もかけて習得したテクニックの自慢話が、脆くも崩れ去った一瞬だった。

山肌の傾斜は次第に険しくなっていった。
だが、周囲の木々は下界の森林となんら変わりはなかった。
物音ひとつしないのが不気味といえばいえるのだが、危険を感じさせる気配はまるでなかった。

やることといったら、密生したシダや繁みを鉈で切り開いて進路を作ることしかなかった。
一同は、いささか気抜けして、それでも一歩一歩山頂を目ざして登って行った。
やがて夕暮れが迫り、一同は木々の跡切れた岩場を見つけ、夜営することにした。
木の枝と葉で二つの小屋を作り、女性用と男性用に分けた。
子供を作る他は抱きあう習慣のないレオとミレイは不思議がったが、一同は心にシェルターをかけ、多くを語らないことにした。
夜になり、くじ引きで見張りを決めた。
こういう時にくじ運の悪いのは、決まって真吾とキリーだ。
ぼやく二人と虎を二頭残して、一同はそれぞれの小屋に入った。
温暖な気候とはいえ、山の上だ。さすがに冷え込みは厳しい。
特に上半身裸のミレイには、こたえる寒さだろう。
レミーはミレイの肩に上着をかけてやった。
ミレイは、上着の下から現れたレミーのロケットを珍しそうに見つめた。
‖**あ、あの?……**‖
「あ、これ?」
レミーは、声を出さずにミレイと話すことにした。
‖**これ、ロケットっていうの。好きな人を入れとくの……**‖
レミーはパチンとロケットの蓋を開けた。
‖**へへ、カラッポ**‖

本当なら、ロケットの中身など、女性相手に見せたりするレミーではないのだが……。ましてロケットが空っぽだと教えるはずもないのだが……。でも、ミレイには見せてもいい気がした。

＝好きな人って何ですか？＝

レミーはずばりと言った。

＝あなたにおけるレオ＝

＝えっ？＝

ミレイは戸惑ったようだった。

＝でしょ？＝

＝あの人は、私と子供を作る人です＝

＝え、あ……、うん。そうだけど、それはそうなんだけれど……＝

子供を作る人だ、とすっぱり言い切れるミレイを、何となく羨ましくも思って、レミーは続けた。

＝例えば、他の人があなたと子供を作るとしたらいやでしょ＝

反論が怖いものだから、レミーは急いでたたみかけた。

＝いやよね。いやなんだから、うん、いやでしょ＝

＝いえ、構いませんけど＝

レミーはこけた。

「どうして！」

レミーは思わず声に出した。

＝だって、昔から私達メスはそうしてきました＝

‖メスじゃないわ。私達は女よ‖
‖でも、違いが分かりません。呼び方が違うだけじゃないんですか‖
‖違うわ。違うんだけど、そうじゃないんだけど……。でも……、ミレイにそう言われてしまったら、どう説明したらいいのか分からない‖
レミーは、違う方向から話してみることにした。
‖じゃあ、あなたはなぜ、ここまでついて来たの？　レオが来たからでしょ……。それ、たぶん、あの人の子供を生みたいからでしょ？　それが好きってこと……。きっと……。うん‖
レミーは自分で頷いて見せた。
‖そうでしょうか？‖
‖誰の子供を生んでもいいなら、あなたはレオについて来ていないわ‖
‖……それ、違います‖
‖えっ？‖
‖わたしも故郷を見たいからです。レオも、みんなも、故郷に帰りたいからです‖
‖ほんとにそうなの？　それだけなの？‖
‖………‖
ミレイの思考が一瞬、止まった。ミレイは戸惑っている。
‖そうでしょう？　なにかあるはず‖
レミーは、その次にミレイがなにを思うのか見透（みす）かそうとした。
だが——。レミーはすぐに肩を落とし、かぶりを振った。

＝馬鹿ね、私って＝

＝えっ？＝

＝いいえ、なんでもないの＝

レミーは今、とても恥ずかしかった。

――今の私はなんだったのだ。自分の思いの確認のために、ミレイの心を覗こうとした。なんて不遜な行為なんだろう。お前は本当に神にでもなったつもりなのか？　愛だの恋だのを人に語り、悟らせるほど、たいした女なのか？――

レミーはぽつんと声を出した。

「ご免なさい」

そして、シェルターした胸のうちで、もうミレイの心を決して覗くまいと思った。

その時だった。

タン、タン、タン！

機銃の音が響いた。

虎の唸り声も聞こえる。

「!!」

レミーは素早く銃を持ち、もう一丁をミレイに渡した。

次の瞬間だった。

小屋を作っていた木々の枝が、ぐんにゃりと歪んだ。

＝えっ!?＝

たちまち枝は二人の頭上に落ちてきた。
レミーはミレイの体を抱くと、枝を弾き飛ばして小屋の外に転がり出た。
崩れ落ちた小屋の枝は、まるで尺取り虫のように蠢きながら二人に向かって這ってくる。
まさに生きている枝だ。
‖**撃つの!!**‖
‖**はい**‖
レミーとミレイは、そのひとつひとつに銃を撃ち込んだ。
弾け飛び、破片になった木の枝は、それでも動きを止めずに、二人に這いずり寄って来る。
‖**なんなの、これは?**‖
‖**分かりません。見たこともない生き物です。気持ちも分かりません**‖
‖**なんですって?**‖
レミーは、思わず、耳の裏にあるムピを触った。
ムピは確かにある。
だが、この木の枝が何を感じているのか、まるで読めない。
レミーはミレイの顔を見た。
ミレイは目を見開いて、呆然と立ちすくんでいる。
——ミレイにとっても初めてなんだ。気持ちの通じない生き物がいるってことは……。これはいったい!?——
その時、真吾が二人の前に飛び出した。

レーザー銃を蠢く枝の真ん中に撃ち込んだ。
レーザーの光線は、いつもの瞬間的な鋭さではなく、幅広く、鈍く輝いている。放出温度を低くしているのだ。
たちまち、木の枝は燃えあがった。
「こいつは弾じゃ駄目だ。レーザーで焼き払え」
真吾がレーザー銃をレミーに放った。
「了解」
レミーはレーザーの出力レベルを下げると、次から次へと枝を狙い撃ちした。
本来のレベルなら、木質など貫通してしまうレーザー光線だが、出力レベルを落とすと木の発火温度程度となり、ちょうど火焔放射器を撃ったのと同じ状態になる。
木の枝は次々に燃えあがった。
気がつくと、他の一同も片っ端からレーザー銃を撃ちまくっている。
ほとんど盲撃ちだ。岩場のまわりの木々がみるみる燃え上がっていく。
「どうなってる訳よ、これ」
レミーが真吾に叫んだ。
「分からん。見張りをしていたら、いきなり周りの木の枝が俺とキリーを襲ってきた。おまけに何を考えているのか、さっぱり読めないんだ」
「真吾もなの？　つ～ことは」
「こいつらは、この陸の生き物とは別の何かだ」

――じゃあ、なんなの――
レミーは背筋の寒くなる思いで、燃え広がっていく木々を見すえた。
「動物の燃える臭いではないな」
いつの間にか、レーザー銃を手にしたブンドルが横に立っていた。
「えっ？　そういえば、確かに」
レミーも、言われてみて気がついた。
燃え上がる木の焦げ臭さはあったが、それには蛋白質の焦げる独特の臭いはなかった。
「オーイ、のんびりしてちゃ、こっちまで焼き肉になっちまうぜ」
煙に噎せながら、キリー達が走って来た。
「しかし、この先の木がまた襲いかかって来ないとは言い切れんぞ」
真吾が一同に言った。
「しかし、もし、彼等が少しでも知性のある生き物だとしたら……」
ブンドルは、前方のまだ燃えていない大木を見すえた。いきなり根元近くを狙って撃った。
ズズズ！
木の根が地面から浮きあがった。
ブンドルは、威嚇するようにさらに撃ち続ける。
木は根っこごと、ゆっくりと後退した。
「やはり、幾許かの知性はあるようだ。彼らは今の攻撃で、火の恐ろしさを知った。火を怖がっている」

「今のうちだな。奴らが対抗手段を考え出す前に行かなければならん」
真吾が、空になったレーザーエネルギーのカートリッジを付け替えながら言った。
「そういうことだ」
ブンドルはレーザー銃をしまい、刀を抜いた。
真吾が叫んだ。
「よし、火を持って、みんな輪になれ。山頂まで強行突破する！」
小数部隊の指揮ときたら、真吾の十八番だ。彼の生き生きとした命令口調に逆らうものはいない。
一同は、持ってきた毛皮や衣類をマシンガンの先に括り付け、松明代わりに燃やした。
そして二頭の虎を囲んで輪になった。
火を扱えぬ虎は、この際、守るべき弱者なのだ。
――わたしも、わたしも――
カットナルの肩の上のカラスが顔色を伺いながら、ささやいた。
「忘れちゃおらんよ。お前も中へ入れ」
夜はまるで弱い、鳥目のカラスである。
カットナルの許しを聞くやいなや、矢のように輪の中へ飛び込み、虎の背の上に降りると、
「クワッ……」
安堵の吐息を漏らした。
虎も――。
――お互い、よかったね――

とでも言いたそうに、ゴロゴロと喉を鳴らした。

「よし、前進!」

真吾が叫び、前方の木の根元近くをレーザーで撃った。木はずるずると後ずさり、周囲の木々も

釣られて退いた。

他の一同は、足元の雑草に松明を近づける。

まるで、潮の引くように雑草が逃げる。

少しでも火が点けば、たちまち燃え拡がるのを、雑草達は知っているかのようだった。

一同は岩場に沿って、一歩一歩進んでいった。

木々や雑草は、距離をおいて、じりっじりっと後を追って来る。

シューッ!

いきなり蔦が頭上から襲いかかってくる。

一瞬速く、ブンドルの刀が一閃する。

斬られてもなお、絡み付こうとする蔦を、真吾とキリーとレミーのレーザーが同時に焼き払った。

「もったいない。狙いは一人一つにしようぜ」

キリーがニヤリと笑って、人差し指をたてた。

「了解!」

レミーはウインクを返してから、隣のミレイに言った。

「もう、レーザーの撃ち方は覚えたわね」

――もちろんです。私にもそれを――

＝心強いわ、白い女豹さん＝

＝えっ？＝

＝私のあだな。ただし、日焼けした時は黒い女豹ですって……。失礼しちゃうわよね＝

＝私にも下さい＝

レオが真吾に言った。

＝やっと分かりました。こいつらは、私達を邪魔しています。邪魔する者は倒していいんです＝

「えっ？」

真吾はレオを見つめた。

レオの瞳は輝いていた。今までになく活気に溢れていた。

――この目はどこかで見たような――

真吾は、そんな思いにかられた。

＝早く！＝

「あ、ああ……」

真吾は戸惑いながら、レーザー銃を出した。

レオはひったくるようにレーザー銃を取ると、襲いかかって来る蔦を的確に撃ち、燃やしていった。

ミレイもまた、見事な射撃を見せた。

ケルナグールは、力任せに松明を振り回し、カットナルは、いよいよ間に合わなくなると、大し

た役に立たなかったが、パラコートという除草剤まで撒き散らした。
生きている木々や雑草との戦いは、夜の間中続いた。
夜明けが近くなった頃、レーザー銃を撃ち続けていた真吾は、ふと、引き金を引く指を止めた。
さっきから気になっていた何かを思いついたのだ。
レオのあの目……確かに昔、見た憶えがあった。それは、白黒の傷だらけの記録映画だった。それは、国連平和部隊の学校で、第二次世界大戦の戦略研究の授業の時間に見たものだ。
第二次世界大戦直前のドイツ、吹き荒れるナチズムの嵐の中、ナチスの旗に右手をピンと伸ばしてかかげ敬礼するヒットラー青年団員の顔が映っていた。
ナチズムの勝利を信じきり、希望に目覚めた純粋無垢なその眼差し……。しかし、その後、ドイツは破壊と殺戮の戦争への道を進む。だがこの青年は、最後まで、彼とナチズムの行方を信じていたに違いない。真吾は、その是非を云々するほど、自分に歴史を語れる資格はないと思っている。
だが、先刻、レオの目はあのヒットラー青年団員の、何ものも信じて疑わぬ無垢な眼差しを思わせるのがひっかかった。
――だとしたら、俺たちはこいつらにとって、神どころか悪魔なのかも……。俺が特別、ドイツ育ちだから、こんなことを感じてしまうのだろうか……だが今は――
真吾ははっと我に返った。
目の前に木の枝が襲いかかってくる。真吾はレーザーの引き金に力を入れた。
木の枝が炎をあげて燃えあがる。
――だが今は――

真吾はレーザーを撃ち続けた。
それしかなかった。

朝陽が、海原の向こうからじわっと昇ってくる。
木々や雑草は、ゆっくりと動きを止めた。
先刻までの戦いが、嘘のように静まり返っている。
聞こえるのは、風の音と、焼け焦げた木々の燃え残りが上げるプスプスという小さな悲鳴だけだった。
キリーは警戒を怠らずに、目の前の木に近寄り、指で弾いてみた。
何も変化は起こらなかった。
「どうやら、おねむの時間らしいぜ」
＝いいえ＝
ミレイが言った。
＝**みんな、起きたんです。ほら、太陽に向かって、山の木みんなの息づかいが聞こえます**＝
一同は心の耳を澄ました。
たしかに、太陽に向かって流れ出す歌声のようでもあり、風のささやきのような音が、かすかに聞こえる。
「植物本来の務めを始めたようだな」
ブンドルはそう言って、刀をさやに収めた。

「光合成？」
レミーが訊いた。
「そういう言い方もあるね」
いうまでもなく、光によっておこる植物の炭酸同化作用、いわば植物の呼吸みたいなものだ。
「じゃあ、これは普通の植物ってことよね」
「おそらくね」
「すると、さっきのは」
「夜になると性格が変わるのは人間だけではないということだね。だが、問題は何がそうさせたかだ」
ブンドルは山頂を見上げた。
岩肌が剝き出しになった山頂は、もうすぐそこだった。

第5章

氷上の激闘

スケーターズワルツ

山頂に近づくにつれ、あたりの気温は急激に下がっていった。
――この寒さは、いったい何なの？――
レミーは腕時計に備えつけられた計器を見て首をひねった。
気温〇度、高度計は一千メートルを指している。いくらこの陸地で一番高い山とはいえ、麓で二十五度あった気温が一千メートルの差で〇度まで落ち込むのは異常だといえた。
一同は持ってきた衣類を着こむだけ着こんで、着ぶくれして、まるでだるまのような姿でよたよたと山を登り続けた。山は思いのほか険しく、すぐ傍に見えていたはずの山頂に先頭の真吾が着いたのは、その日の午後をとうに過ぎていた。
「早く来い！　あれを見ろ！」
山頂で真吾が叫んでいる。
一同は、寒気に白い息を吐きながら頂きへ駆け上った。
――これは！――
一同は目を見張った。
山頂の向こう側に、直径五キロはある噴火口が広がっていた。だが、それ自体は火山によく見られる光景だった。そして、火口には水が溜まり、火山湖になっていた。これも休火山や死火山ではよくある風景だ。だが、その湖の水は見事に凍っていた。氷の表面は、陽の光を浴びて鏡のようにきらめいている。あまりの眩しさに目を開けていられないほどだ。逆反射がきつすぎて湖上に何があるのかすら、よく見えない。
＝思いだすぜ。報道陣のフラッシュみてえだ。俺がＦＢＩに逮捕された時のな……＝

キリーは、ニューヨークで、仲間達の罪をかぶって懲役二百年分の刑で刑務所へ連行された日を懐かしみながらポケットからサングラスを出してつけた。

もちろん、元アメリカ人のキリーにとって、サングラスといえばレイバンのシューターだ。

＝わっ、キリー兄さん、用意周到！＝

思わず声をかけたレミーに、キリーは濃いサングラスの奥から、外には見えもしないのにウインクして、

＝たしなみさ。芸能人とポリに追われるヤバイ奴らにとって、サングラスはダテじゃねえ。有名人は辛い＝

＝だが、サングラスを持たぬ平凡人の我々には、当たる光が強すぎる＝

ブンドルが手の平で光を遮りながら言った。

＝うむ、たちまち目をやられてしまうじゃろ。わしも、目薬はそれほど持ちあわせがない＝

カットナルが懐ろから薬袋を出してちらつかせた。

真吾は空を見上げた。

＝陽が陰るまで待つよりないな。なに、そうは待たずに夜が来る＝

＝お化けの森が追いかけて来たら、どうするんじゃ？……今度、火を使ってみろ、湖の氷が解けてしまうかもしれんぞ。しつこいようじゃが、わしゃ、水かきを持っとらん＝

ケルナグールは真面目な顔で手の平を見つめる。

＝この寒さでは並の植物は動けぬ。マクベスの予言もこごえてしまうだろう＝

ブンドルが、シェークスピアのマクベスの中から、〝林が動く時、マクベスは破滅するだろう〟

という有名な一節にひっかけて言った。
「この寒さね……」
何げなくカットナルが腕時計を見た。――マイナス十五度。
――!! **麓との温度差が四十度……。もし、風のウィルスがいたら、一発で学校閉鎖じゃな――**
カットナルは、この陸地に悪質な病原菌や微生物が死に絶えているのが、なんとも残念だった。で、心にシェルターをかけて思った。
――ちぇっ、本来なら、こやつらに予防注射をバンバン叩き込んで、ヒーヒー言わせてやるのに――
世の中には無針注射器というものがありながら、カットナルは、旧式の針付き注射器を患者に叩き込むのが趣味だった。カットナルはポケットの注射器を握りしめて舌打ちした。

＊

陽が沈みはじめた。
夕陽に赤く光る氷の湖面を火口の壁の影がぐんぐん侵食していく。
やがて、夜空の星のわずかな光で、湖面全体が、ぼうっと白く浮かび上がった。
「あれを見ろ!」
真吾が湖面の中央を指さした。
楕円形の突起物が七個、氷の中から突き立っている。
そのシルエットはすっきりとしたカーブを描き、明らかに人工のものを思わせた。

――あれが、船？……――

レミーが予想していた船とは、あまりに違いすぎた。方舟というと、どうしても、反った舳先が宙に突き出した、大木を蔦で組み合わせて作られた広い甲板のある船……、そう、昔、学校で連れていかれた聖書映画で見せられたノアの方舟を思い浮かべるのだが、一同の前に見えるのは金属製で流線型の、船というより、むしろ魚雷をとてつもなく大きくした印象があった。

しかも、それは一つではなく七つも氷の中に閉じ込められていた。

「行ってみようぞい」

ケルナグールが氷の上に足を踏み出した。

「ウォッと……」

とたんに手と足をばたつかせ、頭からひっくり返った。

氷の表面にはまるで凹凸がなく、鏡の表面のように滑るのだ。

「スリップダウンはカウントしないでくれ」

ケルナグールは頭を掻きながら立ち上がったが、言った先から、ゴツン、後ろへ頭から落ち、氷の表面にひびをつけただけだった。

肩をすくめたレミーは一同に訊いた。

「みなさん、スケートのキャリアは？」

一同は、黙って靴の裏の突起をナイフで削ると、氷上に飛び出した。

ミレイとレオは、毛皮を裏にして足につけた。

「やるじゃん……みんな」

レミーは目を見張った。ケルナグールを除いて、意外とみんなスケートが上手だったのだ。

「わしは、イギリスのケンブリッジからフランスのソルボンヌまで、ヨーロッパの大学の受験は、全て落ちた経験があるからの……。滑るのは得意じゃ……」

と言うカットナルの理屈には首をかしげざるを得なかったが、考えてみれば、スキーほど広いゲレンデもいらず、競走さえしなければたった一人で滑っていられるスケートは、彼ら六人にとって、もっとも似合った冬の遊びだったかもしれない。

もっとも、ボクシングで打たれすぎてパンチドランカーになったケルナグールだけはバランスがどうにも悪く、仕方なく二頭の虎に引っ張られて、横倒しになったまま滑って行くことになった。

——スケートをしたのは何年ぶりだろう——

レミーは幼い頃を何げなく思った。パリの街角の電器屋の店先で、テレビに映ったフィギュアスケートのオリンピック選手に憧れて、スケートリンクに通ったことがあった。

お金がなかったから誰も指導してくれないし、それでも負けん気のレミーは、見よう見真似で一生懸命、練習したのだった。

周りでは、じゃれ合うカップルやグループの嬌声がうるさかったが、気にはしなかった。レミーがしっかり聞いていたのは、音の割れたスピーカーから流れるスケートリンクのBGMだけだった。

——でもって、その曲に合わせて、一生懸命練習して、十二歳の時、フランスの競技会になんとか潜り込んで出場したことがあったの……。私にとってはただの力だめし……。フリーの演技で伴奏の曲を聞いた場内は、あまりに当たり前すぎた陳腐さで失笑が起きた。だって、それ、ただのス

ケーターズワルツ……。それっきゃ、スケートできる曲を知らなかったんだもん。でも、失笑が、やがてどよめきに変わり、拍手、拍手。やったぜ、参ったか……。でも、競技会っていろいろ裏があるみたい。オリンピックだの、スポーツ用品のスポンサーだの……。そんなこんなで予選で落ちて……。もっとも、練習したことのない規定演技はメチャクチャだったから文句は言いません。でもね、わたしが……、街の女の娘として生まれて、誰にも相手にされず、ボーイフレンドもいなかったわたしが……、初めて他人に自信が持てたのが、このスケートだったんだ。一人だけでやるスケートなら、人に負けないってね——

いつの間にか、レミーはハミングをしていた。何が待っているか知らない氷上の船へ滑っていくレミーにしては、いささか緊張感が足りなかったが、それ以上にレミーは久し振りのスケーティングを楽しんでいた。

‖**なんですか、これ**‖

横を滑っていたミレイがハミングを真似た。

‖**ん？　思い出の曲、たわいもないけどね**‖

‖**楽しそうですね。私も好きです**‖

ミレイの滑りも、レミーの滑りどおり、基礎などまるでなっていないレミー流(?)を完璧にマスターしている。良く言えば、スタイルよりも天性のバランス感と力感だけが勝負のダイナミックな滑りだ。

レミーはミレイの滑りに思わず微笑した。

——わたしの滑りってこんなのか……。考えてみれば、自分のスケートを自分で見た覚えはなか

った。うん、私好み……。なかなかよろしいんじゃありませんか？──
レミーはちょっぴり満足して、ミレイに言った。
‖**一緒に滑ろうか**‖
‖**うん！**‖
二人はペアスケートを踊り始めた。
いつの間にか、二人でスケーターズワルツをハミングしている。
この声を胸の奥で聞いた真吾とキリーは、思わずつんのめりそうになった。
武器の扱いや、喧嘩出入りほどはスケートに自信のない二人は、滑ることに懸命だった。もともと二人の好みはフィギュアではなく、スピードスケートだ。それが伴奏付きとなると、交互に踏み出す足が何となくふわついてもつれてくる。
「おい……、レミーの奴、今の場合を何の場合と考えているんだ？」
「参るぜ。なんでも遊びにしちゃうんだよな。得な性格。ＬＯＶＥも遊びでやってくれりゃ、オレも余禄があるんだけど……」
いつの間にか、ブンドルも滑るのを止めて、レミーとミレイのペアを見つめている。
‖**ま、いいではないか。空に降る星、自然のアイスリンク……。したたかにたおやかに美しい。今は緊張の中のひとときの安らぎ……**‖
だが、安らいではいられなかった。
ピシッ！
いきなり氷が割れた。

人の大きさほどの何かが、弾かれたように飛び出して来る。
ブンドルの刀が一閃して、両断する。
真っ二つになったそれは、氷の上にすでに息もなく転がっていた。
「これは！」
ブンドルは足元に倒れた屍体を見て、思わず声を漏らした。
それの上半身は、ほとんど人間と同じ姿をしていた。
だが、頭には角が生え、釘のような細い歯がぶ厚い唇からむき出しになって突き出している。まるで、仏教における飢えてもだえ苦しむ鬼（餓鬼）を思わせた。グロテスクで醜く歪んだ、しかし感情のない顔をしていた。何より異様なのは下半身だ。
足がなかったのだ。
その代わり、鱗とおこぜのようなギザギザのひれの付いた魚の尾をもっていた。
人魚？……。そう、普通ならそう連想するかもしれない。星空のきらめく夜、氷上に現れた人魚……。だが、そんなロマンチシズムのかけらもない姿だった。これが人魚なら、彼らの住む海という海の底は地獄としか思えない。
けれど、その生き物をじっくり観察する時間はなかった。
パシッ、パシッ！　乾いた音をたてて、氷上のいたる所にひびが入った。
そして、まるで墓場から浮き上がったように、得体の知れぬ何かが、飛び出してくる。
先刻の人魚もどきばかりではない。
首が二つある野獣――。

深海魚のように発光する体を持つ、口の裂けた怪物——。
表皮をえぐり取られて、頭蓋骨が剝き出しになった、目の玉だけが異様に動いている化物——。
まるで、伝説のパンドラの箱を開いて出て来た邪悪なものそのものだった。
どれもこれも、目を背けずにはいられない、悪夢の実体化とさえいえた。
そして、そのことごとくに足はなく、代わりに魚の尾びれがあった。
パシン！
いきなり、尾びれを氷上に叩きつけ、その反動で宙を飛び、襲いかかってきた。
牙をカタカタ鳴らし、食らいつこうとジャンプしてくるのだ。
真吾のマシンガンが、突然、火を吐いた。
それが無言の合図だ。
一同の武器の咆哮が、氷上に、火口の壁にこだました。
みるみる化物達の屍体が氷の上に重なっていく。一度飛び上がった化物は、弾に当たらなくても、着地するともう立ち上がる力がないらしく、陸に上がった魚さながらに氷上に横たわってひくひく蠢くばかりだ。
——意外とひ弱なんだ……。みかけ倒しはそのまま倒れてもらいましょ——
レミーは、ミレイと、化物を三回転半の空中スピンで避けながら銃を撃ちつづけた。
だが、飛びかかる化物の数は減らなかった。
手持ちの弾薬もレーザーエネルギーも限りがある。
やがて一同に焦りの色が濃くなる。

＝＝ん、もう、こいつら、きりってものを知らないのかしら……。アンコールの拍手が多すぎるわ＝＝

思わず溜め息をついたレミーにミレイが荒い息で答えた。

＝＝分かりません。私には、この生き物達が何を思っているのか、まるで読めません＝＝

それは、先刻から百も承知していた。

彼らもまた、あの動く樹木と同じ、意思の通じない生物だった。

——なんとかしなきゃ、いつかやられる——

レミーは唇をかみしめ、何気なく足元を見た。

——！！——

あきれはてて声も出なかった。

足元の氷の底が紫色に光っている。

そして、そこに数限りない化物達が、自分の出番を待ち望んでいるかのように、頭上のレミー達を見上げているのだ。

彼らの瞳は焦点が合っていず、うつろで無表情だ。それだけに、なおさら背筋に寒いものが走る。

——これが全部、お相手？……きりがないどころか、こっちの命にきりがなくても、まだ足りなそう——

一同に言い知れぬ疲労感が襲った。

——相手にきりがないのなら、きりのある銃やレーザーを使うのはもったいない——

一同は発砲を止めると、マシンガンを逆さに持って化物達を殴り倒し始めた。

キリーはもちろん、愛用のナイフとチェーンで大立ちまわりだ。
この期におよんで銃の弾やレーザーのエネルギーを節約する彼らの行動は、奇妙だと言えぬこともない。
だが一同にとっては、それが普通のフィーリングだった。いつでも、最後の切り札はぎりぎりまで取っておく習慣になっていた。
しかし、彼らの体力にも、弾やエネルギーのように限りがある。
次第に足がもつれ、化物の襲撃から身を躱すのが精一杯になっていた。
二頭の白虎も同じだった。
——食いついてくるつもりなら、こちらが先に食いついてやる——
そんな感じで軽快なフットワークで走り回って、自分の牙の威力に酔っていた二頭の虎も、荒い息を吐き始めた。
どれだけの間戦っていたのか、時計を見る余裕もなく、疲労だけが重なっていった。
氷上に湧き上がる化物たちは、厭きることなく攻撃を繰り返してくる。
一同はげんなりして、互いの顔を見合った。
——そろそろ打ち止めかもな——
キリーが心の奥で呟いた。
誰一人、諦める気はなかったが、かと言って、突破口も見つけられそうにない。
「打ち止めまえの大放出といくか」
真吾が、マシンガンを構え直した。

八人と二頭の虎、そしてカラスは、一塊りに集まった。一同は、取り囲む無数の化物達にマシンガンを向けた。
一斉射撃――。
あっという間に弾が尽きる。
続いてレーザー銃――。
エネルギーは五分と持ちはしなかった。
化物達はさらに増え続ける。
もうレミー達に武器はない。
化物達はレミー達を押し潰すようにジャンプした。
ガチガチと交錯する牙が目の前に大きく迫ってくる。
レミーは目を閉じず、その牙を見据えた。
――もし、これが最期なら、わたしの終わりを息が絶える瞬間まで見つめてやろう――
レミーは最後まで弱気になる女ではなかった。
――で、今、化物の牙がわたしの喉元に叩きこまれる……。はい、ＦＩＮ――
その瞬間だった。
青白い矢のようなものが、レミーの鼻先まで近づいた化物の顔面に叩き込まれた。
次の瞬間、じわっと蒸発するように化物の頭部が消えた。
‖**えっ!!　なに？**‖
周囲を見る。

青白い矢は一本ではなかった。
針の束をばら撒いたように、化物の群れを突き通し、その体を溶かしていく。
一同は、ただ立ちつくすばかりだ。
矢は正確に化物を貫きながら、一同にはかすりもしない。
「あそこからだ」
真吾に言われるまでもなく、一同の注意は氷の上に突き出した金属製の突起物に向いていた。
青白い矢は、その先端から放射状にばら撒かれている。
化物達は矢から身をよじり、逃げ惑いながら、氷の中へ沈んでいく。
やがて、湖の氷上には化物の姿は消えた。
いたる所に山のように横たわっていた化物の屍体も、矢が突きたつと同時に跡形もなく消えた。
降るような星、鏡のように凍った湖面——、静寂——、先刻までの戦いがまるで嘘のようだった。
‖お待ちしていました‖
いきなり、見ず知らずの意識が一同の胸の中に飛び込んできた。
男とも女とも思えぬ、どこか性別を超越した声だった。
‖いよいよ、我々に戻れる日がやって来たのですね‖
「何者かな……」
ブンドルが訊いた。
‖我々は、みんなです。この陸地に辿り着いた我々みんなです‖

湖上に突き出した金属製の突起物の中央が静かに開いた。どうやら、そこが入口らしい。

＝さあ、みんなの家においで下さい＝

入口の中は、青白い光が時に強く、また時には弱々しくぼんやりと明滅している。

＝俺達は欠食児童のゴキブリじゃない。おいで下さいと言われてホイホイ入り込むほど世慣れていないわけじゃないんでね。お前さんの正体、教えて貰いたいもんだ＝

キリーが、ナイフを手の上で玩びながら訊いた。

ナイフなど、この際役に立つはずもないのだが、使い慣れている武器は少しだけ突っ張りの支えにはなる。

だが、声の返答はなかった。

＝黙秘権か？　どうする？＝

真吾は一同の顔を見回した。

＝意見を聞く前に、俺の考えを言っておく。進むも地獄、帰るも地獄、ならば行くよりあるまい＝

真吾は金属の〃家〃に向かって歩き始めた。レオも黙って後に続く。

「おっ、十八番。久しぶり、真吾ちゃんの〃切ってみせましょ大見得を……〃が出たぜ」

と、キリーがパシャパシャとゆっくり拍手をした。

＝カブキじゃ、カブキじゃ、カブキのミエ……。古典芸能はいいのう……。わしも行くぞ＝

カットナルが、化物相手の過度の運動でいささか痛い腰を叩きながら、よろける足どりで氷上を滑って行った。

‖どうして……‖

ミレイがポカンと口をあけてレミーに訊いた。

「えっ？」

‖どうして、行くしか他に方法がない時に、みなさんはごちゃごちゃといろんなことを喋って前おきするんですか？‖

‖ひとこと言うと格好良く決まると思っているのよ‖

レミーは声に出さずにミレイにささやいた。

‖言葉なんて言わなくても、気持ちは通じるでしょうに……‖

‖みんな不安なのよね……。言葉に出すとか、何かに書いておかなきゃ、本当の気持ちなんか人に分からないと思っているの……。饒舌で、演出不足。自信がないのよね、自分に……‖

‖レミー、あなたもずいぶん饒舌だ‖

ブンドルは刀をさやに収めると、真吾達の後を追った。

何かいい決め文句を言おうと、さっきから頭をひねっていたキリーとケルナグールは、ミレイの言葉を聞いては今さら何も言えず、肩をすくめて無言で歩き始めた。

しかしキリーは、しっかり決め文句を胸の中でつぶやいた。

‖男は黙って……‖

その声はやはりしっかりレミーとミレイに聞こえていて、二人はクスクス笑いながらキリーの後に続いた。

氷上に突き出した突起物は、近寄ってみると思いのほか巨大だった。
ぱっくりと口を開けた入口も、直径が五十メートルを越えそうな大きなものだ。
「動物の出入口としては充分だな。これなら、どのように巨大な生物でも出入りは可能だ」
ブンドルが呟いた。
「これがいわゆるノアの方舟の出入口としたら……」
真吾が溜め息をもらした。
キリーが頷く。
「氷の下に隠されている本体は、どえらい大きさだぜ」
「どうやって、この船を乗りこなせというんだ？」
「な、こと、先いって考えるさ。出たとこ勝負が俺達のモットー――」
キリーはナイフをかまえ、入口の中へ入っていった。
入口から地下へは広い斜面が伸びていた。
床も、見上げる天井も、光沢のある金属で出来ている。
さっきまで聞こえていた声の気配はまるでなく、青白い光の明滅だけが奥の方で輝いている。
「ノアの方舟というイメージじゃないのう」
カットナルが、あたりを胡散臭そうに見回した。
やはり船の内側も、彼らの知る伝説のノアの方舟のイメージとは、あまりにかけはなれていた。
丸木で組まれ、漆や粘土で防水した古代の舟の内部はそこになかった。
目の前に広がっているのは、飾り一つない無機質な金属で囲まれた空間だった。

「こりゃ、方舟というより、むしろ未来の建物風じゃな……」
一同に同じ思いが浮かんでいた。
これが舟だとしたら、この陸地に辿り着いた動物達の故郷は、土臭い神話的な古代というより、もしかしたら地球以上に科学技術の発達した土地なのかもしれない。
——どうなっちゃってるの？——
レミーは、この星に来てから何度となく思った同じ言葉をまた繰り返さざるをえなかった。
動物の進化の問題。そして今、目の前に広がるメカニックな光景……。この陸地にいる人間の先祖が洪水から逃げるために作り出したとは、とても思えないのだ。
この星では、時の流れと人間の進歩というものがどうなっているんだろう。
まるで、地球の辿る時間の座標を、シェーカーに入れてめったやたらとゆすって、ごちゃまぜのカクテルにしたような気がした。
ストレート好きのレミーにとっては、このカクテル、あまりに混合物が多すぎて悪酔いしそうだ。
やがて、斜面はさらに広い空間に出た。
大広間を取りまいて、だだっ広い床が棚のように幾層にも重なっている。
「引き出しのない収納壁だな、まるで」
カットナルは、アメリカ大統領時代の山のような書類を収めた資料室を思い出した。
——我ながら、収納壁とは言いえて妙だ——
ブンドルが頷いた。
「おそらく動物達は、種類別に整理されてこの棚に入っていたのだろう」

「居住区か……」
と真吾――。そういえば、国連軍の幼年寄宿舎にあった多段ベッドに似ていないこともない。
一同はさらに奥へ進んだ。
大広間の向こうに小さな扉が見える。
やわらかい光がもれている。
どうやら光の出所はそこのようだった。
扉はかぎもなく簡単に開いた。一同は、一応警戒しながら、扉の向こうへすべり込む。
巨大な炉のようなものが、青白い光を放ちながら燃えていた。
「これが船の動力源か……」
と真吾。
「うむ、おそらくな……。そして、あれがこの船の全体の構造図のようだ」
ブンドルが壁に目をやった。
壁には、細長い楕円形の、まるで薬のカプセルを大きくしたようなレリーフ（浮き彫り）が刻みこまれていた。後部には水平尾翼のようなものが描かれている。
「こいつは、方舟というよりロケットか魚雷だな」
とキリー。
「この大きさだ。魚雷という表現は当たらんな。むしろ、ティアドロップタイプ（涙の落ちるような形）の……」
真吾はそこまで言って口をつぐんだ。

真吾はこの船が何であるか思い当たったのだ。

　——馬鹿な——

「どうやら真吾君も気づいたようだね」

　ブンドルが呟いた。

「もったいぶらずにみんなに話を見せてよ」

　レミーがじれったそうに言った。

「もし、これが海の乗り物だとしたら……。この形が適しているのは海の上じゃない」

　真吾が答えた。

　カットナルがポンと手を叩いた。

「そうか、ノーチラスじゃ！」

「ノーチラス？　なんのことぞい」

　ケルナグールが首をひねる。

「我がアメリカが作った、世界最初の原子力潜水艦の名じゃよ。SFファンには、ベルヌの小説に出た潜水艦といった方がなじみがいいかもしれんな」

　ノーチラスはティアドロップタイプの潜水艦ではなかったが、なんでもはじめてが好きなカットナルは潜水艦といえばなんでもノーチラスと呼んでいたのだ。

「潜水艦!?……このどでかいのが潜水艦だというのかの？」

　ケルナグールがうめいた。

真吾はレリーフをじっと見つめながら頷いた。

「それしか考えられない。潜水艦なら、この構造図も納得がいく」
真吾はレリーフを指さしながら続けた。
「エネルギー炉、エンジン、スクリューシャフト、方向舵――。旧式の潜水艦そのものだ。だが、なぜノアの方舟が潜水艦でなければならないんだ？……」
そう言いながらも、真吾には見当がついていた。だが、その答えはあまりに突拍子もないものだった。
しかし、少なくとも、ミレイとレオ、そして未だに事態を把握出来ずにいるケルナグールを除いた一同は、その信じられない結論に頷こうとしていた。
――この船は海の底からやってきた。この陸地の動物は、海を渡って来たのではなく、海の底から浮上してきたのだ。だが、陸上に住む生き物が海底に住めるはずがない。すると――
キリーは肩をすくめ、声にはださずに思った。
‖どうやら、ほとんどＳＦだぜ――。海底に、陸に住む動物の生きている世界があった。ある日、海の水がその世界に流れ込んできた。頭のちょっと冴えている連中がいて、潜水艦を作って逃げ出した。それが、この陸地に住む連中のご先祖様。ちゅうことは、今や故郷は水浸しでこの星に存在しない。チャン、チャン、チャン！　めでたし、めでたし、ｏｒ……残念でしたか、知らんけどね‖
‖それは違います‖
心の中で別の声がした。
突然、炉の中の青白い光が膨れあがり、再び凝縮し始めた。
それはアメーバーのような姿になって炉から抜け出し、一同の前に立った。

それは、今も耳の裏にいるムピを大きくしたような姿をしていた。
——**故郷**（ふるさと）**は今もあります。この星のどこかに……だからこそ、私達はこうして船を守って存在しているのです**——
「あんた、いったい何なんだ。さっき助けてくれたのは、おそらくあんただろうが、礼をしようにも、あんたの正体が分からんとね」
キリーが訊いた。
——**私達が故郷に戻ろうと思った時に、私は生まれました。この土地の全ての生き物の故郷に戻ろうという魂**（ソウル）**の集まりが私です。私の中には、海の向こうを見つめ死んでいったみんながいます。みんな同じ気持ちだから、私のかけらを使って心を通じ合わすことが出来るのです**——
「ムピはあなたのかけら？……」
レミーは耳の裏のムピにふれた。
——**そうです。そして、みんな自身でもあるのです**——
「ムピの集合体ってわけかぁ……。でも、どうして故郷があると思うの？」
——**私達が故郷を離れた時のことは、もう憶えてはいません。でも、私達が戻りたいと思う以上、故郷はあるのです**——
「われ思う、ゆえに故郷あり……か」
真吾が古い哲学書をもじって呟（つぶや）いた。
「民族の悲願……、いや、生物の悲願……。まるでイスラエル建国前のユダヤ民族じゃな」
カットナルが大統領だった頃のアメリカは、政財界のかなりのウエイトをユダヤ系が占めていた。

だから、カットナルの今の言葉は、決して皮肉ではなく、真面目だった。
もちろん、公平なる元大統領は一言付け加えることも忘れなかった。
「もっとも、建国のためにユダヤに追い出された今のアラブの民とも同じだといえるがの……」
――私達は待ち続けていました――
カットナルの脱線気味の思いにじれたのか、ムピの集合体が話し始めた。
――私達が故郷に戻ろうと思った時には、この土地に着いてから時間が経ち過ぎていました。もう誰も、この海の家の動かし方を憶えてはいなかったのです。私達は動かす方法を教えて下さる誰かを待ち続けました――
「ハハン……。それが俺達ってことらしいけどな……。なんで、俺達がこの船を動かせると思うんだい？」
キリーが訊いた。
――あなた達は、空から降りてきた神様です。海を渡ることなど、簡単なはずです――
「簡単ねえ。神様はオールマイティってわけか……。えらくショート（短絡）したラブコールだぜ」
――なにしろ、あなた達は誰も入ることが出来なかったこの山の頂きまでやって来ました。そんな力のある方達ですから……――
「こういう俺達のやり方は、ヤケっぱちの向こう見ずとも言ったりする」
キリーはそっけなく言い返した。
――動かせないんですか？　海の家を……――

「難しいな。構造をよく調べてみんと」
真吾としては、動かせる見込みはまるでなかった。
すかさず、ムピの集合体は叫んだ。
――早く調べて下さい。早くです！――
「ずいぶん強引だな……。なんであれ、強制されるのは好きじゃない」
真吾の言葉もそっけなかった。
集合体の声が、縋りつくような切ない響きで一同の心に聞こえた。
――どうしても帰りたいのです。故郷へ……――
一同は顔を見合わせた。
ほっと溜め息をついたレミーが、
「出来るかどうか分かんないけど、やるっきゃないのよね。このままじゃ、私達だって、どうにもなんないもん」
一同も頷きこそしないが、思いは同じだ。
レミーは続けた。
「でも、やる以上、いろいろ教えて欲しいのよね。私達を襲ったあいつらは何なの？」
――あれは……――
集合体は口籠もった。
「あれは？」
畳みかけるようにレミーが訊いた。

「あなた達は、正直なのが取り得でしょう？」

＝**あれは……、みんなとは別です**＝

奥歯に物の挟まったような言い方だ。

「別なのは分かっているわ。言いなさい。何なの？　あ、れ、は……？」

レミーの口調はきつかった。

スパイの取り調べと同じで、逃げ口上を許す気はなかった。

集合体は、仕方なさそうに答えた。

＝**あれは、この家に乗れなかったのです**＝

「乗れなかった？」

＝**私達の家は数が少なかったのです。生き物の全てが乗れたわけではありません。いえ、生き物のほとんどが海に飲まれて消えてしまったのです**＝

集合体は続けた。

＝**彼らは乗りたかった。でも、乗れなかった。彼らは家の外に縋りつきながら、中の生き物を恨み呪ったそうです。なぜ、お前達だけが生き残るのか？……お前達だけを生かしはしない……、彼らの思いは、体は死んでも家の外にこびり付きました。そして、海の生き物達に乗り移り、そのまま、この陸地に辿り着いたのです……。二度とこの家を使わすものか……、彼らの思いは、この家を冷たい氷に閉じこめました。そして凍り、眠り続けた海の生き物の中に宿って、ずっと長い間、家に近づくものを拒んできました**＝

「すると、あの動く木や草も？……」

――彼らの思いが、意思の弱い草や木に乗り移ったのです――

「意思は通じなくとも、所詮はこの星で生まれた生き物の成れの果てというわけだな……」

ブンドルが誰に語るでもなく呟いた。

「方舟に乗れた者、取り残された者……、いずれにしろ、哀れだ……」

おそらく、とてつもない不幸だった洪水にあってから、長い時間をかけて細々と燈し続けた生命と魂だった……。やはり、誰かが故郷をひと目見ない限り、ケリがつかないのかもしれない。

「さっき、取り残された動物達の魂が、海の生き物に取りついたと言ったわね」

レミーが集合体に訊いた。

――ええ……――

「海にいる生き物は、みんなあんな形をしているの」

様々な陸上動物と魚を合成したような姿のことだ。

――海についての記憶は、我々の中でほとんど忘れ去られています。ですから、どんな生き物が住んでいるのかも知りません――

「しかし、船にこびりついてきた生物は、なぜか、みんな、ああいう姿だった」

ブンドルが、集合体の思いを見すかして言った。

――そうです――

「じゃあ、ああいう化物づらが、海の中にウジャウジャいるっていうんじゃな」

顔のことは言えないはずのケルナグールが、いかにもおぞましげな表情を作った。

――そうだ。そうだ――

海の怪物を唯一目撃したカラスが、何度も頷いた。
「もしも、彼らが望むなら……」
カットナルが集合体を見つめて言った。
「もしも、わしらがこの船を動かせたとしての話だが……」
一同はカットナルを見た。
「彼らの魂も故郷へ連れて行こう……。神様は公平でなければならない……」
一同は互いの顔を見合って苦笑した。
照れ臭くもあったが、神様ごっこはいよいよ本気になりそうだった。

第6章

まるで鏡のように

わたしがあなた？

一同は五日にわたって、船を隅から隅まで調べ回った。
それぞれの報告をブンドルがまとめあげ、武器や兵器のエキスパート、真吾が検討を繰り返した。
そして一週間後に出した真吾の結論は、
——動かせるかもしれない……。だが——
だった。
「だが？……」
カットナルが真吾に訊きかえした。
「この船は図体こそでかいが、構造は極めてシンプルな潜水艦だ。沈む時はタンクに水を入れ、浮く時は排水する。動力は水車型のスクリュー、方向舵によって進路を決める。問題はエネルギーだが、それも答えがでた」
「答え？　石油も原子力も、エネルギーらしいものはどこにもないぞ」
カットナルが首をひねった。
「エネルギーはムピだ」
「ムピ？」
「いわば生物の精神エネルギーと言っていい。その一つ一つには互いの意思を疎通させるだけのエネルギーしかないが、それが集合すれば大きな力を持つ」
「だったら、何も潜水艦など使わずに、てめえでてめえの体を故郷にテレポートさせりゃいいんじゃないか？」
とキリーが言った。

「そこまでの力はないんだ。一つ一つの精神エネルギーが無数に重なりあって、やっとエンジンを動かせる。おまけに、彼らの力は原始的で、そのパワーを制御することが出来ない。機械の力で加減するしかないんだ」

「単に、石油や石炭やウランと同じエネルギー源だと割り切った方がいい」

ブンドルがそう加えた。

「おそらく、この方舟がここに辿り着くまでに、そうとうな精神エネルギーが消耗されたはずだ。方舟に乗った彼らの中の誰かの、きわめて自己犠牲的なエネルギーでな。そして今度は、長い時をついやして、死んでいった動物達の故郷に戻りたいというエネルギーが、この方舟に蓄積されていった。エネルギーに不足はあるまい」

「だが……」

真吾は一同を見回した。

「だがは、これからなんだ。我々だけの人数では、とてもこの巨大な船を操縦しきれない。残念ながら、コンピューターによる自動操縦が出来るほど親切な作りになっていないのでな」

「かなりの科学知識を持つ人材が最低三十人は必要だ。しかも、これだけの船を動かすのだ。とっさの判断力、経験、チームワーク、人間性……、ただの知識だけでは役に立たない」

「村の奴らを教育するしかないの」

とカットナル。

「数を三つしか数えられない奴らに、科学を教えるっちゅうのか？」

八桁の数字までしか数えられないケルナグールが肩をすくめた。

「義務教育だけでも十五年かかるんじゃぞ」
「まして、判断力、経験となるとな……。奴らは生まれたばかりの赤ん坊と同じだ」
そう言ったのは、二十年以上かかっても泳ぎをろくに覚えられなかったキリーだ。
「ようするに……」
レミーがぽつりと言った。
「人間性とチームワークは自信あるとは言わないけど、私達のようなのが三十人いればいいわけよね」
レミーはニッコリ笑った。
「いけるかもしれないな……」
一同はレミーを見つめた。
「ミレイとわたしを二人だけにしてくれる？」
そして、ミレイの手を握った。
「何十年も待てないもんね、船出まで……」

＊

二人は船の中の奥まったフロアに閉じ籠もって誰も近づけなかった。
レミーは音声を出さず、思考で語り始めた。
‖いい、わたしの知っているすべてをあなたにあげる……‖
‖レミーさんの全て？‖

＝＝うん、私、心のシェルターを開きっ放しにするわ。で、あなたは、わたしの心の中に入ってくるの。そして、私になろうとするの……。そうすれば、あなたに私の知識や経験が乗り移るかもしれないもん＝＝

ミレイはかぶりを振った。

＝＝こわいです。わたしはレミーさんに……、いえ、神様なんかになれっこありません。わたし、ただのミレイですもの＝＝

レミーは優しく頷いた。

＝＝分かってる、あなたの気持ち。ミレイはミレイ、レミーはレミー。わたしだって、自分が二人になるのは嬉しくないもん。だから、わたしの本当の部分は見せないつもり。どこまでが本当の自分で、どこまでが覗かれていい自分かはよく分かんないけれど……。でも、あなたは、わたしの全てを奪うつもりで入ってきて。遠慮はいらないわ……＝＝

＝＝でも……＝＝

＝＝もしも、私の全てがあなたに写し取られてしまうなら、私は誰にでも真似の出来るそれだけの女にすぎないってことだもん……。レミーはレミーだぞ。他の誰でもないんだぞ。そう、今まで思い込んできたけどね。もろくも崩れるその自意識……ちゅうわけよね。でも、そうなりゃしゃあない。それっぽっちの女だったら、それで諦めちゃうしかないもん――

――過激なことを言っているな――

と、レミー自身思うのだった。

――もしかしたら、私、相当なる露出狂なのかも……。自分をさらけ出して、自分よりも若くて、

しかも体も頭脳も伸びざかりのもう一人の自分が生まれたら、私はどうなるだろう。私はレミー・島田という女の残りカスになってしまうのかもしれない。たぶん、生きていく望みなんかなくなっちゃうかも……。いいえ、私には私の顔と体があって、それだけでもちゃんとレミー・島田としての存在価値があるはずで……。よしなさいよ——

レミー自身、生まれてから今の今まで、自分の顔と体を自信たっぷりで鏡に映したことなどなかったのだ。

自分の肢体を、男に対するかなり強力な武器だと思い、事実、生きるためにそんなふうに使ったこともあったけれど、自分が自分の体に惚れこむほど、ナルシストではなかった。自分に美しさがあるとしたら、もっとメンタルな部分だと思いたかった。

だから、ブンドルが〝美しい……〟という言葉をレミーに向けてもらしたとしても、なんとなく据わりが悪い思いにさせられるのだ。

——ブンドルって人は、いったい私のどこを美しいと言っているのだろう……。誰にも言わないけど、ちょっとそれ……、悩んでみたこともあって、結局、冗談だと思った方がいいや、と割り切ることにして、そうでも思わなきゃ……私だって女の子……。五人の男の人相手にバランス取れっこないじゃん。おまけに、最近、あの人達、それぞれ魅力的になってるし、失礼なこと思っちゃうけど、最初は問題外だったあのケルナグールおじ様だって、逞しくってかわいいなんて思ってしまっている今日この頃なのです……。おっと、何を考えているのだろう。ミレイに自分の知識と経験を写し取って貰うというだけで、ここまで思いが暴走してしまう。こんな私が、本当に、心に入り込んでくるミレイから、自分の本質を守ることが出来るのだろうか。そして、もし、ミレイに

レミーの知識と経験を他人のものとして消化出来る自意識がなければ、ミレイという人間はいなくなり、レミーの心そのままの、レミーもどきが出来あがるかもしれない。それはミレイの人格を破壊する洗脳と同じことになる。なぜか、とてつもなく恐ろしい危険に手を出そうとしている気がする。でも、でも……、一日も早くこの船を動かす人材を作るには、それより他に方法はないのかもしれない──

‖**やるっきゃない。さあ、わたしの中に入ってきて**‖

レミーは目を閉じた。

ミレイがためらいがちに胸の奥を覗き込むのを感じた。

‖**何をしているの？　遠慮しないで！**‖

‖**は、はい……**‖

ミレイはおずおずと心の中に分け入ってくる。

ピクン、ピクン、まるで腫れ物に触るようにレミーの思いに触れながら、戸惑いと恐れでなかなか奥に入ろうとしない。

──そんな入口でぐずぐずされると、こちらまで意識しだす。どうしても心のシェルターをかけてしまう。これじゃ、ヤバイんだ──

少なくとも今は、互いの自意識を捨てなければ前に進まない。

──どうすればいいの？──

その時、レミーにある考えが浮かんだ。

レミーの耳が熱くなった。

――まさか……。私は何を思っているの？――

レミーは目を開けて、ミレイの瞳（ひとみ）を見つめた。

ミレイもレミーの考えを読んだのだろう。頬（ほお）を赤らめてうつむいている。

＝**やっぱ、難しいよね。こういうの**＝

レミーは呟（つぶや）いた。

＝**いいえ!?**＝

ミレイの声が強く響いた。

＝**えっ？**＝

ミレイが近づいてきた。レミーの手を握りしめた。

ミレイはレミーを見つめた。

＝**わたし、出来ます**＝

すっと、ミレイの唇がレミーの唇を覆（おお）った。

＝………＝

レミーは声もなく目を閉じた。

＊

ミレイはレミーの内側を自在に飛び回っていた。

レミーにとっても、それは信じられない体験だった。

これほど他人と一体感を感じたことはなかった。

そして、レミーの思い出が渦巻きながら、羽布団のように二人を包んでいる。
やがて、ミレイはレミーの一番奥の扉を叩き始めた。
レミーは内側から熱くなった。
全てを奪われても許せる気分――。
耐えきれず扉が開いていく。
その奥に本当の自分があるのを、レミーは感じた。
自分でも、それが何であるかわからないけれど、とても恥ずかしくて、何より大切な自分……。
＝あ、やめて、やめて、そこは＝
それでもミレイは入りこんでこようとする。
いつの間にか、それはミレイでなく、もう一人の自分のような気がした。
＝だめ……、いけない……、やめて！＝
レミーは叫んだ。
「やめて！」
レミーの叫びが声になった。
扉が閉まる。
レミーはミレイを突き飛ばしていた。
二人は我に返り、お互いを見つめ合った。
体中から汗が噴き出していた。
レミーの服はびしょ濡れになっている。

二人はどちらからともなく微笑した。
レミーは服を脱いだ。そして言った。
――OK、こいつが分かったわ。SEE YOU AGAIN いますぐに……――
ミレイもこくりと頷いた。
二人は再び近づいた。
そして、三日間、そのフロアから一歩も外に出なかった。

*

二人がとじこもっている間、奥のフロアを気にしながらも、男達は他の問題を話し合っていた。
――もし故郷が海底にあるとして、どうやってそれを探し出すか――
その答えは割と簡単に出た。
宇宙船の操縦席にあるセンサーを改良すれば、海底内で使用ができそうだった。
この金属製の巨大な船を作れた故郷だ。しかも、この金属は一万度以上の高温に耐えられることも、調査で分かった。少なくとも、それだけの金属を作りだせた文明なら、たとえ無人の廃墟となっても、それなりの金属反応をセンサーは感じるはずだった。
だが、最大の問題は、山の頂きからどうやって船を海まで降ろすかだった。
運んで行くにも途方もない労力を必要とするし、夜は怨念のこもった怪物や草木の襲撃を覚悟しなければならない。
それよりなにより、氷の中で身動きの出来ない今の状態をどうするかだった。

「氷を暖めて溶かすより手はないのだが……」
真吾が相変わらず、当たり前のことを声に出して言った。
「そんなにでっかい電気コンロもプロパンガスも持っとらんぞい。あ～あ、炭火焼きの焼き鳥が食いたいのう」
ケルナグールが、とんちんかんにぼやいた。
「火山を爆発させたら、どうですか？」
背後で声が聞こえた。音になっていた。しかも、レミーではない。聞き慣れない女の声だった。
ミレイだった。しかも半裸ではなく、ちゃんとワンピースを着ていた。
レオは思わず立ち上がった。
——音の声が出せるのかい？——
「ウィ、ムッシュ……」
ミレイはフランス語で答えた。
「高速ダビングが終わったわ」
レミーがフラフラと現れた。
げっそりとやつれている。
それでもニッコリ笑って、
「わたしの知識と経験をすっかりコピー」
「コピーって、まさか、レミー、おまえ……」
真吾の言いたいことは、レミーにも分かっていた。

「大丈夫……。ミレイはミレイ、私じゃないもん。ちゃんとハイティーンの女の子。余計なことは教えてないわ……、うん」

頷いてから、グラッと倒れかけた。

慌てて（あわ）てキリーが抱き止める。

レミーはぼんやりと目を開けて、

「相当消耗するけどね……。ミレイは他の女の子に……、その女の子はまた別の女の子に……。みんなも他の男の人に教えてあげれば、三十人のコピーなんて、あっという間に出来ちゃうわ。やったね……。あん、もうねむい」

そう言って、キリーの腕の中でスヤスヤと眠り出した。

「よくやるよ……」

キリーは、ぼそりと言った。

「そんなお前が好きなのさ」

「ん？」

レミーはパチリと目を開け、寝言（ねごと）のように言った。

「あのね、キリー。あくまでミレイはハイティーンの女の子。私と違って狼（おおかみ）慣れしてませんからね。赤ずきんしちゃいけません……。ね、約束……」

「ハイ、ハイ」

「よろしい」

レミーは、親指を吸うようにして、あどけない表情でまた眠り始めた。

「一言、多いんだよね」
キリーが一同にぼやいた。
「だが、やはり君は美しい」
思わず呟いたブンドルの台詞（せりふ）は、熟睡しているレミーの耳にはもう入らなかった。

＊

レミーとミレイの実験の成果は確かなものだった。
レミーが二十数年間を費やして得た教養、経験、そしてスパイ活動の知識、人間翻訳機とあだなされた語学力……、全てをたった三日でマスターしていた。
レオは目を輝かしてレミーに言った。
‖**私にも教えて下さい……**‖
レミーはミレイとの三日間を思い出し、こめかみをポリポリと掻（か）いた。
「……あの、わたし、女だから……。男の人は、やっぱ、男の人の知識をマスターした方がいいと思うの」
‖**それは、そう……、ですが……**‖
レミーは有無（うむ）を言わせず、
「ね、そうしましょ。そだ、教わるのはあなただもん。あなたに選ぶ権利があるわ。誰の知識を習いたい？」
レオは一同を見回した。

――みんなのを全部……――

「そりゃ、いかんぞ」

カットナルが即座に言った。

「勉強熱心は結構じゃが、こいつらはみんな常識はずれ、良く言えば個性的、早い話が変人じゃ……。そんな奴らの知識や経験を全部入れてみろ……。精神分裂を起こしてしまうわい」

「変人と常識はずれってのは、同意出来ねえけど、確かに一人前にしとかねえと、下痢か便秘は確実だぜ」

キリーに一同も頷いた。

――どうしても一人だけというのなら――

レオはブンドルを見つめた。最初の出会いで、動物達の心の声を一喝したブンドルの姿が印象的だったのだ。

「ブンドルさん、どうやらご指名みたい」

レミーに言われ、ブンドルは立ち上がった。

「名付け親でもあるし、いたしかたあるまい。だが、この男に私の美学が分かるかな？」

首をひねりながら、レオを連れて奥のフロアに向かった。

「レオって男も、相当変人じゃな。ブンドルもどきが二人も三人も増えてみろ。わしゃあ、美しすぎて頭が痛いわい」

カットナルがぼやいた。が、すぐに一同を見渡して、

「誰が増えても五十歩百歩か……」

「じゃあ、あんたのコピーが増えたら、いいってのかい？」
キリーが訊いた。
「いや、困る。わしが二人も三人もいてみろ。選挙の票が割れて、往生するわい。わしは一人がいい……、うむ」
カットナルは何度も自分に頷いた。
レミーは、ブンドルとレオが気になって仕方がなかった。
――どうやってレオに教えるつもりだろう――
レミーは、心ならずもやってしまった、自分と同じ方法だけは想像しないことにした。

＊

「終わった。なかなか良い教え子であった」
三時間もたたないうちに、ブンドルはレオを連れて出てきた。
「ずいぶんお手軽じゃの」
カットナルは、あまりの時間の早さに呆れて二人を見た。
しかし、レオは興奮して、正確なイタリア語を喋った。
「凄いです。美しいです」
「いったい、どういうふうにしたの？」
レミーは、ちょっぴり心配だった。
「禅の心得だ。無我の境地に入れば、レオは白紙も同然。染み入る水のごとく、知識が流れ込んで

いく。生まれし時より自然の中で生きてきたこの男……、禅の心を、知らずして知っていたようだ」

ブンドルは微笑した。だが、本心はかなり辛かった。

長年追求してきた美学がわずか三時間でコピーされようとは、夢にも思っていなかったのだ。

「禅の境地か……」

ブンドルは溜め息をついた。

「禅ね……。なるほど……。よろし……」

レミーは、なぜかほっとしている自分に気づいて、少しだけ慌てた。

＊

次の日の朝――。

一同は怨念の化物達の動きをうかがいながら、山を降りて村へ戻った。

レオは、村人の中から健康な男女を三十人選んだ。

レミー達の持っている知識と経験は、次々に村人達に写し取られていった。

誰の知識をコピーするかは、村人達の自由意志に任せられたが、意外に一人に集中することはなかった。

武器や兵器の扱いは、天才的な勘で操るブンドルより、真吾やキリーをコピーした方が実際的だったし、直情で理屈っぽい真吾にはそれに合ったタイプ、融通がきき、抜け目のないくせに、それでいてどこかラフで気紛れなキリーのタイプには、それなりに向いた性格の男達がいた。

どこの世界にも、指導者志向、権威志向のタイプはいるもので、そんな男達はカットナルの知識をコピーしたがった。

最初はいやがっていたカットナルだったが、支持者が増えるのは、やはりまんざらでもないようで、いざ教えるとなると誰より熱心になっていた。そして気がついた時には、五人のカットナルのコピーがいた。

だが、不思議なことに、同じ知識と経験を持ちながら、目指すものが違っていた。医師を志望する男、宗教家を目指す男、首相や大統領を望む男、戦闘の指揮をとりたがる過激派、表面には出ずに政財界を裏から操る黒幕願望の男……、性格によって微妙に違ってくるのだ。

カットナルは、自分に似た五人を見て、満足だった。

「これだけのわしがいたら、アメリカを完璧に牛耳れただろうに……」

この星に、支配すべきアメリカ大陸がなく、船を動かして故郷に向かう目的しかないのが、無性に口惜しかった。

ただ一人、元気のないのがケルナグールだ。

「わしゃ、教える知識なんてなんにもないからのう……。人の殴り方を教えてもしようもないし……」

もっぱら、村の子供達を相手にボクシング遊びをする毎日だった。

だが、そのために、子供達の人気を一身に集めているのもケルナグールだった。

ある日、ケルナグールの前に、十四、五歳の男の子がやってきた。

――教えて下さい、ボクシングを……――

＝こんなわしを真似たって、いいことはないぞい＝
＝僕、僕、強くなりたいんです＝
目を輝かす少年に、
＝そか！　わしの弟子が出来るんか！＝
ケルナグールも目を輝かした。
ケルナグールは、ボクシングのテクニックと経験の全てを少年にコピーさせた。
しかし、この少年はケルナグールより少しだけ思慮深かった。
ケルナグールの生いたちを知ると……。
——貧しさと孤独がケルナグールを強くした。貧困とはなんなのか？——
少年は、カットナルやブンドルを摑まえては、富と貧しさについて質問をし始めた。
そのうちに、この村一の論客になっていた。そんな少年の思いもかけない成長に、ケルナグールは、自分にないものを生み出したようで、なんとなく上機嫌だった。
そして、気がつくと、三十人の員数外のケルナグールタイプも五人以上になっていた。
少年達にとって、ケルナグールは六人の誰よりも強いヒーローだったのだ。
村の女性達の教師は、もちろんレミーだった。だが、レミーの知識と経験が、ミレイから別の女へ、そして別の女から他の女にコピーされていくうちに、それぞれの女達に違いが見えてきた。
キリーに言わせると、
「そりゃそうさ。ビデオだって、ダビングを繰り返しゃ劣化してくる。もっとも、この場合、良化する場合もあるかもしれんけどな。おまけに、テープの質によっても画像が変わってくる。俺にし

たって、ブロンクスの狼のつもりが、コピーした奴の中にゃ、どうみたって、ブルックリンのコヨーテか、ハレムのジャッカル、シカゴのドーベルマン、そうしかいいようのないのがいるぜ。うん、ナリタのキツネみたいのもいたなあ……。フフン、泳げねえのは同じだけどな」

一見、同じような性格に見えた村の人々が、たった六人の知識と経験を真似ることで、それぞれ個性的になっていくのだった。

レミーは、なんとなく一番身近に感じられるミレイが気になった。

ミレイはいつも、レオと行動を共にしていた。

夜になると、いつも一緒に村を抜け出し、海の見える丘で、肩を寄り添い合って何かを夢中で話していた。

ある夜──。

レミーは、遠くから聞こえる奇妙な旋律の音楽に目を醒ました。

──あれは？──

レミーは、その音がなんであるか、すぐに気がついた。

──日本の尺八……。でも、誰が──

レミーは尺八の音に誘われるように、小屋から出ていった。

その音は、海を見降ろす丘から聞こえていた。

レミーは繁みの中から、そっと丘をうかがった。

あかあかと燃える焚火の前で、レオが尺八を吹いていた。

多分、森の竹林の竹を細工して作ったのだろう。

レオの傍に、ミレイと白い虎が二頭、うっとりと尺八の音に聞き入っている。

奇妙に絵になる光景だった。

「見事な音色だ。まるで、私が吹いているようにな……」

レミーの背後で、ブンドルの呟きが聞こえた。

「うん……」

尺八はブンドルの趣味であり、十八番でもあった。

「ブンドル先生もかたなしだな……」

いつの間にか、真吾も来ていた。

そして、キリーもカットナルもケルナグールもいて——星空に響きわたる尺八の音に、しばらく黙って耳を傾けていた。

やがて、尺八の音が止んだ。

レオとミレイはじっと見つめ合っている。

やがて、二人の影は重なって、焚火の炎の向こうにゆっくりと倒れていった。

レミーは思わず頬を赤らめた。

「コホン」

ケルナグールがむせた。

キリーが、〝退散しようぜ〟とでも言うように、黙って顎をしゃくった。

六人は足音を忍ばせて、村へ戻った。

そして、顔を見合わせて、溜め息をついた。

「あの二人、レミーさんとブンドルのコピーじゃよね……。進んどるのう。いいこと、いいこと……、グハハハ。オリジナルもしっかりせにゃねえ」
一人陽気なケルナグールに、他の男達はなぜかムッとして……、
「寝よ……、もう遅い」
真吾の言葉に頷いて、それぞれの小屋に足早に入っていった。
レミーとケルナグールだけが残されて……、
「わし、なんか悪いこと、言ったかの？」
レミーはちょっと泣きそうな顔をして、
「別に……」
小屋に帰りかけて、立ち止まり、それからさっとケルナグールに駆け寄った。
「あん？　なにかの？」
レミーは、背伸びしても届かないケルナグールの頬に、飛び上がって軽いキスをした。
「おやすみなさい」
「あ、うん」
レミーは肩をすくめ、ちょっとだけ微笑んで、くるりときびすを返すと、もう後は見ずに自分の小屋に入っていった。
ケルナグールは、ただもうキョトンと立ちすくむだけだった。

＊

次の日の朝――。
レミーは、村の近くの池でゆったりと泳いでいた。ここ数日、この水浴びは朝のシャワー代わりの日課になっていた。
「レミーさん、わたしもいいですか？」
ミレイが岩場の上から声をかけた。
「もち、どうぞ」
ミレイは服を脱ぐと、頭から飛び込んできた。
水しぶきが、思いっきり、レミーの頭から振り注いだ。
「こいつ……、やったな……」
二人は水をかけ合って、子供のようにじゃれあった。
それから、どちらともなくフーッと溜め息をもらして、体の浮くのに身を任せた。
ミレイは何かを言いたそうに、もじもじしている。
レミーは黙っていた。
やがて、沈黙に耐えられなくなったのか、ミレイが口を開いた。
「レミーさん」
「えっ？」
「わたし、好きってこと、分かった気がします」
「うん」
「レミーさんは首から下げたロケットに入れるけど、私、この中に入っている気がします」

ミレイは胸を押さえた。
「それでもいいんですか」
レミーは微笑した。
ミレイは真剣なまなざしでレミーを見つめている。そして、もう一度、訊いた。
「ほんとに、これでいいんでしょうか？」
「うん、いいの。それで……、上等なの、うん、よろしい」
「はい」
ミレイの顔に、素直な笑顔がこぼれた。
レミーは、その笑顔を素敵だと思った。
ちょっとだけ、羨ましい気もしたが……、本当はレオの知識がブンドル仕込みなのがかなり気にもなったが、それでもやっぱり、ミレイを抱きしめてやりたいほど嬉しかった。

*

一カ月がたった。
最初の数日間で、知識と経験のコピーは終わったものの、やることは多かった。
この土地にいる動物は、大小とりまぜて六千頭あまり、山頂の七つある船のうち一つだけあれば足りる数だった。
とはいえ、一度船出をしたら、どれくらい長期になるか分からない旅だ。
食糧の木の実や草を、できるだけ集めなければならない。

必要とあれば、船内で植物の栽培もしなければならないだろう。
肉代わりの植物性蛋白質を作るマシンも——早い話が豆腐の製造機のようなものだが——作らなければならなかった。
そして、山頂の凍った湖の上で使い果たした銃弾の製造と、太陽光線からのレーザーエネルギーの収集……、本来なら、氷に閉じこめられた船の不用な金属物質を利用したかったのだが、加工するにはあまりに硬く、熱にも強すぎた。
結局、利用出来るのは、レミー達が乗ってきた操縦室の金属だけだった。
あっという間に操縦室は解体され、影も形もなくなった。
所詮、宇宙へ飛びたつ力などはない操縦室だが、見慣れた姿が消えてしまうと、六人は、今さらながらに、もう山頂の船しか希望は残されていないのを身に染みて実感するのだった。
「時々、考えることがある」
カットナルは、旅のための常備薬を作りながら、手伝っているケルナグールに言った。
「あん?」
「わしらがこの星に降りてきた時、俺達はこの陸地を征服できたんじゃなかろうかとな」
「たった六人でかの……」
「うむ。昔、南アメリカに乗りこんだピサロという男は、わずか数百名で広大なアンデス文明を征服して滅ぼしてしまった。わしらだって、この陸地の王になれたかもしれん……」
「王様になって、どうすんじゃい」
「この村の連中をこき使って、一生楽に暮らす……。動物の声など聞かなかったことにすれば、罪

の意識などじきになくなる。そうなりゃ、肉は食い放題じゃ……」
「できもせんくせに、スプラッタ（血まみれ）映画は……。食い物のことは言わんでくれ……」
カットナルは、今さらながらに溜め息をついた。
「最初の出会いが悪すぎたんじゃ。いきなり奴らの気持ちが分かってしもた。もっと、お互い、疑いあえれば楽じゃったのに……。それに……」
「それに……」
「わしら、好きでここに来たんじゃないけど……。結局、呼ばれもせんで忍び込んだよそ者じゃ……。もとからいた連中に、何となく気兼ねもあるしな」
「それが、この星じゃ、どうぞどうぞとソファーを勧められてしまったんじゃからのう」
「一宿一飯の恩義か……」
「仕方ないのかのう……」
二人は思った。
――言葉さえ通じなければ、別の行き方になったかもしれないのに……。わしらはどっちかというと、悪役が似合っているはずだった……。それが、どうにもこうにもな――
一度は神様や聖人になりたいとは思ったものの、二人にとっては、やはり刺激がなさすぎるのだった。

＊

レミーとミレイは、船に乗る動物達の食料のわりあてを算盤で計算していた。

ミレイが、ふと、算盤の玉を弾く指を止めた。音声に出してつぶやいた。
「どうして……」
「えっ？」
「どうして、レミーさんの星には、いろんな国の言葉があるんですか？」
ミレイは、レミーの知識を写しとった時、レミーの知っている四十カ国語以上の言語も憶えていた。だが、この陸地では使いようのない言葉だった。
「言葉なんか一つでいいのに……。ほんとは、一つもいらないのに……」
レミーは微笑した。
「そう、ほんとはね。そうかもね」
レミーは旧約聖書のエピソードを話し始めた。
「地球にはこんな話が残っているの。昔、人間は一つだけの言語で話していたの。そのために、みんながお互いの考えを不自由なく交わして、文明がみるみる進歩したんですって。それでもって、人間達は鼻が高くなって、神様に追いつこうと思ったの……。鼻が高くなったからかどうか知らないけど、人間達は神様のいる空の上まで届くような高い塔を建てようとしたのよね。でもって、どんどん高い塔を作ったもんだから、神様は焦っちゃったの。生意気なやっちゃ……ってね。創造主であるわしを追い抜くのはけしからんってわけ。自分で人間を作っておいて、こーいう性格してるのって、かなり陰険だと、わたしゃ思うんだけど……。ある日、神様は、その塔を壊しちゃって、おまけにね、もう二度と神様を追い抜こうってほど人間が進歩しないように、言葉をめちゃくちゃにしちゃったの。お互いの言葉が分からなければ、話し合いも相談も出来ないから、人間が進歩す

ることもないだろうって、考えたのよね。それが、地球にいろんな民族の言葉が出来たはじまりなんですって……。でも、これ、ミステークよね、神様の……」

「………」

　ミレイは、じっと聞いている。

「お互いの言葉が分からないから、人間って進歩したんじゃないかってこと……。だって、相手が何を考えているか、何を企んでいるか分かんないでしょ。だったら、自分を守るっきゃないもん。自分が強くなるしかないもの……。こりゃ、いろいろ悪知恵働かして、頭も良くなるわよ」

「人の心が分からないことが、頭の良くなるこつですか？」

「あん？　あは、なんだか私、あなたの悪徳教師やってるみたいね」

「で、人の心を分かりたいから、レミーさんは四十以上の国の言葉を話せるようになったんですね」

　レミーはかぶりを振った。

「それが……、ちと違うのよね……。わたし、最初は一つの国の言葉しか出来なかった。フランス語……、生まれた国だから当然よね。でも、人の話す言葉って嘘ばかり……。だから、わたし、思ったの。フランス語の言葉がよく分かるから、相手の嘘が見えて悲しくなっちゃうんだって。でも、外国の言葉は嘘をつかれても、どうせ言葉が分からないんだからしようがないや……って諦めがつくでしょ。だから、下手な外国語がとっても好きで、気がついたら、四十カ国語ペラペラで……。やっぱり、それでも人から嘘をつかれて……、わたしも嘘をついちゃって……。結局、どこの言葉も本当は話しちゃいないのよね……」

「でも、今は、レミーさんと私、嘘を喋っていませんよね」
ミレイがレミーを覗きこむように言った。澄んだ瞳だった。
「うん……。そのつもりだけど……。嘘のないこの世界がいいのかどうかっちゅうことになると……」
「えっ？」
ミレイにレミーはおどけて、声に出して言った。
「わたし、わっかりませ〜ん」
そして、つけ加えた。
「あなたに、こんな話が出来るっていうの……、ちょっぴりハッピー。鏡に向かう独り言じゃないもんね。サンクス、フレンド」
ポンとミレイの肩を叩いて、
「さ、仕事、仕事！」
レミーは算盤を弾き始めた。

第7章

帰路のない旅立ち

家出娘はもどれない

準備は整った。
動く木々や草の襲撃を避けるために、村人の中で、朝、村を出て夕方までに山頂の船まで辿り着ける足のある若者達が選ばれた。そして、次々と山を登っていった。
続いて、猿や猫科の肉食獣や熊など、足が早く山道に強い動物達が船に運び込む荷を背負って続いた。
その他の動物や子供達は、船出の日が決まれば村の近くの丘に集まって、船を待つことになった。
さらに一カ月が経った時には、村人達から選ばれた三十人は船の動かし方を完全にマスターしていた。
だが、船は氷の中から一ミリも動けなかった。
どうやって船を山から降ろすか……。
いよいよ、予期していた最大の難問が立ち塞がったのだ。
船の中では、連日、六人を中心にして村の若者達の会議が開かれた。
選ばれた三十人の若者達は、すでにレミー達六人と対等か、それ以上の若い発想を持つブレインに成長していた。
爆破などの方法で刺激して……、休火山、ないしは死火山であるこの山を活性化させ、その熱で氷を溶かす……。
ミレイがレミーの知識を写し取った日に、思わずもらしたアイデアだったが、検討の末、不可能という答えが出た。

かりに氷が溶けても、火山の活動がどれほどの規模になるか分からない。
山から降ろす途中で大噴火をおこせば、この山はおろか、陸ごと噴き飛んでしまう危険性があった。
結局、何回会議を繰り返しても、結論は一つしかなかった。
――氷を作り出している船に乗りそこなった生物の怨念と意思を通じさせ、氷を溶かしてもらい、怨念のとりついた山の木々の力で船を麓まで運んでもらう……。それが虫の良い考えなら、せめて船を麓まで運ぶ間だけは邪魔をしないでもらう――
それしか考えがつかなかった。
だが、どうやって彼らと意思を通じさせることが出来るのか？……。
ブンドルの知識をコピーした男達、そしてメカニックに強い真吾とキリーの知識を持った男達は、夜を徹して、その方法を考えた。
まず、彼らの言葉を探さなければならない。
麓の動物達が声を出さなくても心を通わせるように、この湖の怨念達も、声らしきものは出さないのかも知れない。
男達は炉の中のムピの集合体の感度を最高に高めてもらい、それをレミー達の乗ってきた操縦席の陸地センサーを改良した受信機に感応させるようにした。
ムピが感じる怨念達の思考波から言葉を探し出そうとしたのだ。
だが、湖の底の怨念達は、まるで眠っているかのように、何ひとつ思考波を出していなかった。
――彼らが眠っているのなら、起きて貰うよりない……。そのためには……、誰かが氷上に出て

囮になり、氷の底の怪物達をおびき出すしかない……。でも、誰が囮になるか——
村の若者達は会議を開いた。
誰もが、自分が囮になると進みでた。
レミー達は、そんな若者達をただ見つめるよりなかった。
生きて帰れる保証のない囮だ。
六人は、誰が適任者か、名指せるはずがなかった。
若者達も、六人のその気持ちを十分感じていた。
——神様達は、命というものに妙なこだわりがある。だったら、神様を困らせずに、我々で決めるべきだ——
事実、それまでも、様々な決めごとの決定権は、もう村の若者達に委ねられていた。
六人は、それでいいと思い始めていた。
もともと、ここは彼らの星であり、船出は彼らの旅であり、六人は彼らが望むから協力しただけなのだ。
六人は、空から降りてきたアドバイザーにすぎない。そして今は、アドバイスすることも、ほとんどなくなっている。
六人が何かを言えば、それは地球上の論理を押しつけているだけかもしれない。六人はそれがいやだった。
「わしらは、もしかしたら、空前絶後に分かりのよい神様かもしれんのう」
しみじみと呟くカットナルに、キリーは肩をすくめる。

「早い話が、何もしたくないし、何もさせたくない……。怠け者の神様さ……」
「いつものわしらと同じじゃな。グハハハ。わしらでも神様になれるんじゃ。わりと楽な商売かもな、神様も……」
ケルナグールは高笑いした。
他の五人も、互いに顔を見合って、笑うしかなかった。

「わたしが囮になります」
女の声が、若者達の心の中に強く響いた。
その声を聞いて、レミーは弾かれたように声の主を見た。
ミレイだった。
「わたし、氷の上を滑るのは自信があります……。六人の神様の中では、レミーさんが一番上手ですから」
――スケートなんか教えるんじゃなかった――
レミーは、思わず唇をかみしめた。
レオはミレイの顔を見ておれず、じっとうつむいている。
＝ミレイを失いたくない……。でも、仕方ない、諦めるしかないんだ＝
レオの思いが、ひしひしと伝わってくる。
＝いいえ、ミレイよりわたしの方がピッタリだわ＝
ミレイの隣に座っていた娘が立ち上がった。

＝ミレイにはレオがいるわ。ミレイはレオの子供を生まなきゃならないもん……。でも、わたし、まだ誰もいないでしょ。わたしが行っちゃう＝

娘は明るく、きゃぴきゃぴした感じで言った。

＝ほんと？　サンクス＝

ミレイは娘と握手した。

＝おまかせ、ＯＫ！＝

レミーは、参ってしまった。

――なんちゅう明るさ――

しかし、ミレイも、あの娘も、レミーの知識と経験を写しとった、ある意味で自分の分身なのだ。

どちらも、怪物の生けにえにはしたくなかった。

――しゃあないな。本家、家元が、やってやろうか――

レミーは立ち上がろうとした。

その時、別の意識が飛び込んできた。

＝氷の上……、得意のはず……、わたし、誰よりも……＝

一同は声の方を見た。

緑色の白熊(ホッキョクグマ)（？）が、のっそりと入ってきた。

一同は、白熊の思いに頷(うなず)かざるをえなかった。

動物と人間との垣根(かきね)をこえて、公平に考えても、確かに氷上の動きは白熊の方が上だった。

その夜、緑の白熊は氷の上を駆けずり回った。

次から次へと、氷の中から怪物が飛びかかってきた。
白熊にはムピのエネルギー光線の援護もなく、逞しい前足と牙の反撃も許されなかった。
どんな攻撃を受けても、これから話し合いを持とうとする相手を傷つけるわけにはいかないのだ。
ムピの集合体とセンサーが耳をすます中、白熊は怪物達の牙に朱に染まりながら走り続けた。
やがて、センサーは怪物達の思考を捉え始めた。
何を言っているのか意味は分からなかったが、それは誰もが背筋の寒くなる思考だった。
これほど冷たい思考ならば、湖水の水が凍っても当然だと思えた。
やがて朝が来た。
緑の白熊は帰って来なかった。

＊

若者達は、センサーが捉えた怪物達の怨念を検討した。
麓の動物達が今まで感じたことのない思考だったが、自分達に向けられた憎悪であることは理解できた。
その波長と逆の思考を発すれば、我々に敵意のないことが分かるかもしれない……。
それを第一歩とすれば、怨念との対話も成り立つに違いない……。若者達の思いは楽天的だった。
再び夜がやってきた。
交渉は、政治家カットナルの知識を持った五人の若者達に任された。
カットナルの政治的なかけひきは、確かに一流だったし、むしろカットナルのように、精神安定

剤に頼らなくても落ちついていられるだけ、元祖よりも見込みがあるかもしれない。

「押してもだめなら引いてみろ。引いてもだめなら逃げてこい……」

柄になく親心を働かしたカットナルのアドバイスに、若者達は明るく答えた。

「まっかせなさい。豊かな未来のカットナル……。くしゃみ三回、効き目一発、カットナライザー!」

カットナルの政治キャンペーンのキャッチフレーズと製薬会社の宣伝コピーを口ずさみながら、若者達は氷上に降りて行った。

いきなり、怪物達が襲いかかってきた。

若者達は懸命に怨念達の思考を発した。

ぴたりと怪物達の動きが止まった。

――わたし達、友達……。いっしょに故郷に帰りましょう――

若者達は怪物達に呼びかけた。

みるみる怪物達の間から、冷たい憎悪の思考が消えていくのが感じられた。

カットナルは片目を丸くした。地球では考えられないことだった。

「うむっ……、やっぱり政治交渉は真心が大切なんじゃな。よい勉強になった」

肩のカラスも頷いた。

――一回目の交渉は成功だ――

若者達は満足げにきびすを返し、船に戻ろうとした。

その時だった。

急速に、背後で憎悪が腫れ上がった。

センサーのデジタル表示が、あっという間に限界を越えた。
すさまじい圧迫感が、炉の中のムピの集合体に襲いかかった。
憎悪の感情は、ムピの集合体を引き裂かんばかりにのしかかった。
怨念はあくまで怨念だった。憎悪が収まったかに見えたのは、相手を油断させるための見せかけにすぎなかった。
怪物達は、若者達に背後から飛びかかった。
怪物の牙は、若者の一人の背を食いちぎった。
＝なぜ？　どうして!?＝
一瞬のうちに、ムピの集合体の中に怒りが噴き出した。
船の村人と動物達にも、同じ思いが広がっていく。
突然、緑の何かが氷上を走り、若者を襲った怪物に飛びかかった。
それは、緑の白熊だった。
白熊は生きていた。
怪物は、白熊の鋭い爪でずたずたに引き裂かれた。
前の夜、白熊は怪物達の攻撃を、耐えに耐えてきた。
逃げて、逃げて、逃げまくった。
朝が来た時、瀕死の白熊は、もう船に戻る力は残っていなかった。
――自分の役目は終わった――
白熊は、湖のほとりに身を横たえた。

死を待つばかりだった。
だが、夜になっても白熊の息はまだあった。
遠くから、若者達と怪物達の交渉をぼんやりと見つめていた。
そして、怪物の不意打ちを知った時、言い知れぬ怒りが体中を駆け回った。
怒りが、瀕死の白熊に氷上を走らせた。
そして、引きちぎった怪物の死を確かめた時、白熊もまたこと切れていた。
それがきっかけになった。
ムピの集合体の怒りが爆発した。
＝**みんなは故郷に帰る！　邪魔はさせない！**＝
船の突起物から、青白い光の矢が乱射される。
＝**誰も船には乗せない！　生かしてはおかない！**＝
怪物達も船に襲いかかる。
船の村人達は銃を撃ちまくり、動物達は牙をむき出しにして怪物に飛びかかった。
「よせ！　止めろ！」
六人は口々に叫んだ。
だが、もう止めることは出来なかった。
怒りと憎悪の思考が渦巻(うずま)いていた。
六人の声はかき消され、自分自身にすら聞こえないほどだった。
この思考の戦いの行方は、すぐに現れた。

氷の中に眠っていた怨念よりも、長い時間をかけて蓄積されたムピのエネルギーは、はるかに強大だった。
氷上の怪物を、あっという間に駆逐し、さらに氷を突き抜けて、氷面下の怪物の群れまで次々と消し去っていった。
それは、圧倒的な勢力をもつパワーが、怪物達を虐殺しているように見えた。
だが、怨念はあくまで船に乗る生物への憎悪を捨てなかった。
火口湖の氷が紫色に光り出した。
怨念は、自らを消し去っても、船の生物を生かすつもりはなかった。
怨念のエネルギーは集結し、火口湖の底深く降りていった。
火口の底の岩盤を突き破った。
最後のパワーを振り絞って、火山のマグマの中で爆発した。
それは、火山を目醒めさすに十分すぎるエネルギーだった。
ズズズ……、山は泣き叫び、震えた。
マグマが火口めがけて上昇して行く。
凍った湖面は湯気をあげ、みるみる溶けていった。
氷上で戦っていた動物も人間達も、次々に船の中に駆け込んで来る。
六人も、怨念との戦いの是非をうんぬんしている余裕はなかった。
生き物を収容した船の入口は、ぴったり閉ざされた。
火口湖は沸騰し、蒸発した水が噴き上がった。

泥と火山弾が船に叩きつけられる。
灼熱したマグマは、大きく膨れあがると、一瞬のうちに火口の壁面を吹き飛ばした。

グラッ！　船は大きく揺れた。
火口から溢れでる溶岩に押されて、船はゆっくりと動き出した。
窓のない船内では、外の光景が分かるはずはなかった。もっとも、分かったところで不安がつのるだけだった。なにしろ、外は焦熱地獄だ。一万度の高温に耐えられるはずの船体だけが頼りだった。

湖に七隻あった船が、次々にマグマに飲みこまれ、沈んでいく。
おそらく、この星の地底に閉じ込められ、もう二度と姿を現さないだろう。
一同の乗る船も、何度か、先端を地底に向けて沈みかけた。
だが、その度に、噴き上げるマグマが船体を押し上げた。
山腹を溶岩流が滑り降りていく。
船は吹き飛んだ火口の壁面から山腹に押し出され、流されるまま、山を下っていった。
山の木々は溶岩にふれる前に高温で自然発火し、燃え上がり、のたうちまわる。
木々の炎上する音は、彼らの唱える呪文のように聞こえた。
──生かしておくものか……。我々を乗せなかった船を、許しておくものか……──
──逃がすものか……。みんな死んでしまえ……──
その声は、船の行方をせせら笑っているように思えた。

ズン！
足元から重く突き上げる震動が伝わってきた。
再び大噴火が起き、山の半分が吹き飛ぶ。
巨大な船は、一瞬、宙を飛び、麓に叩きつけられた。
すぐに流れ出てきた溶岩が、船を押し上げ、翻弄(ほんろう)する。
火山どころか、この陸地の全(すべ)てが危ないかもしれない――。
震動の激しさから、それを感じとったブンドルが叫んだ。
「早く、陸の動物達を集めるんだ！」
――こうなったら、一つでもこの陸に住む生命を助けたい……。怒りと憎悪はたくさんだ――
そう六人は思っていた。それが、怨念のとりついた怪物であろうと、この船でやって来た動物達の末裔(まつえい)であろうと、どうでもよかった。どちらも、この星で生まれた動物に違いないのだ。
ムピの集合体は、陸地全部に届く出力で呼びかけた。
＝人間の村の近くの海岸へ集まりなさい。旅立ちの日がやってきました＝
炎、泥流、火山弾、熱気流――。
逃げまどいながら、動物も人間も、その声を聞いた。
彼らは先を争うようにして、海岸へ急いだ。
溶岩流は、山の麓を焼き尽くしながら、海へ流れ込んだ。
海面は一瞬のうちに蒸発し、すさまじい水と炎のせめぎあいが起こった。
沸騰し、泡立つ海に、一同を乗せた船はゆっくりと流されていく。

船内の揺れが、ぴたりと収まった。
センサーが、外部が水であることを教えてくれていた。
「どうやら、海に出たようだな……」
ブンドルは、かすかに溜め息をついた。
一同に一瞬の安堵が走った。
だが、のんびりとはしてはいられない。
――**残されたみんなを救出しよう。エンジン始動だ！**――
レオの思考が若者達にとんだ。
若者達は、いつの間にか、それぞれの部署について待機していた。
六人よりもはるかに落ち着いて見えた。
炉の中――。ムピの集合体がひときわ、輝きを増す。
エンジンが回転する。
スクリューが水を蹴る。
激しく湯気立ち、ふきあげる白い蒸気のほか、何も見えない海面を、船はゆっくりと進み出した。
選ばれた三十人の若者達の操作は的確だった。とても初めての操縦だとは思えなかった。
「初めてじゃないさ。連中の腕は俺達のテクニックでもある。乗り物である限り、俺達に乗りこなせない物なんてない……、いつでもな」
自慢するわけでもなく、平然と真吾が言った。
「いつでも、女の子以外の乗り物はな」

キリーにも、軽口を叩ける余裕が戻っていた。

══全速前進══

レオの指示で、船は速度を増した。

沸騰した海を抜け出し、村の近くの海岸へ進路をむける。

══助けて══

══早く来て、連れてって！══

══故郷へ帰りたい══

海岸で待ちうける生物達が叫ぶ思考が、船の目指す方向を教えてくれた。

船が接岸すると、ただちに動物の収容が始まった。

陸は、絶えず震動──地割れを繰り返し、再度の噴火を予告している。

山の形はすでになく、上空へ噴き上げる噴煙の中で、雷鳴が絶えずスパークしていた。

嵐のように吹き荒れる熱風に、動物の毛はみるみる縮れていく。

降り注ぐ火山灰は鼻や口を塞ぎ、息もろくに出来ない。

それでも、動物達は整然と、しかも素早く船の中へ乗り込んでいった。

そんな動物達を、海岸で三頭の白いブロキオザウルス一家が見守っていた。

波打ち際にたたずんで、じっと船を見つめている。

══早く、おまえも乗って！══

船上に出たミレイが、ブロキオザウルスに叫んだ。

══わたし達、いかない。わたし達、食べすぎる。みんなの食べるもの食べすぎる══

║ここまで生きてきたんだもん。みんなで故郷に行きましょ……、ね║

║わたし達、生きてきた。みんなのため……。わたしの体、大きい。わたしを食べれば、たくさんの動物、生きていけた。だから、わたし達の種類、ずーっと生き延びる役目があった。でも、みんな、もう、わたしを食べない。神様、みんなに教えた。気持ちが通じる動物、食べないと……。みんな、植物、食べている。わたしも植物食べる。わたし、たくさん食べすぎる。わたし、みんなの食物まで食べて、みんなを苦しめる。わたし、みんなのため、一緒に行けない║

║お前達の分ぐらい、用意してあるわ║

║それ、みんなに分けて……。わたし達、行かない║

ミレイはどうしたらいいか分からなかった。

陸の震動は激しさを増し、立っていられないほどだ。

動物達の最後、青い猪が船内に入って行った。

ブロキオザウルスは、ミレイに優しい思考を送った。

║行って、早く║

ブロキオザウルスの一家は、一歩も動く気配はなかった。

突然、炎に包まれた火山弾が降り注いだ。メスのブロキオザウルスの頭部に、にぶい音をたてて当たった。

巨体が、ゆっくりと崩れ落ちた。

声ひとつ漏らさなかった。

幼いブロキオザウルスが、悲しげな鳴き声をあげた。倒れているメスを、頭で突っついた。

ピクリとも動かなかった。
そんなブロキオザウルスを見つめるミレイの肩を、レオが抱いた。
‖**メスが死んだ。残った親もあの子もオスだ。もう子供は生まれない。もう生き延びてはいけない……。ミレイ、行こう……**‖
ミレイは、やるせなく頷くしかなかった。
その時だった。
船の側面の海面が大きく膨れ上がった。
巨大な牙を持った怪物が現れた。
頭部だけで、ブロキオザウルスほどの大きさがあった。音をたて交錯する牙の間から、よだれがしたたり落ちる。
それは、カットナルのカラスが目撃した、海の怪物だった。
牙の並んだ口の上にある三つの赤い目が、ミレイとレオを睨みつけた。
「伏せて！」
船の入口にいたレミーが叫んだ。マシンガンを撃つ。
だが、怪物はビクともしない。
最初に見つけた獲物――ミレイとレオから目を離そうとせず、大きく口を開けた。
船上の二人に身を投げかけるように、襲いかかった。
牙が二人を突き落とす。その瞬間、ズシン！　怪物の頭部に、重量級の何かがぶち当たった。
ブロキオザウルスだった。

――早く行って！――

そう叫ぶブロキオザウルスの胴体に、邪魔をされ怒った怪物の牙が叩き込まれた。
その牙を押しのけるように、幼いブロキオザウルスが怪物の口の中へ飛び込んだ。
いきなり入りこんできた肉の塊りに、怪物は喉をつまらせた。

――早く行って！――

船に乗った動物達の胸の奥に、親と子のブロキオザウルスの声が響いた。
たちまち、怪物の牙は二頭のブロキオザウルスの体を引き裂いた。
「早く！」
レミーは船の入口で叫んだ。
レオは、ミレイを抱いて船の入口へ走った。
怪物は二人に向き直った。
その三つの目が突然、見えなくなった。
二頭の白虎が飛びかかり、爪を突き立てたのだ。
怪物は、目にこびりついた白虎を振り払おうと頭を振った。
だが、白虎は決して爪を緩めなかった。
レミーの待つ入口の中に駆け込んだミレイとレオは、振り向いた。
扉がみるみる閉じていく。
扉の向こうで、怪物は白虎を頭部につけたまま、もがきながら海中に身を沈めていく。

――ガイター、ラト！――

ガシン、扉が完全に閉じた。
かすかにエンジン音が聞こえた。
船が動き出すのが感じられた。
ミレイの目から涙がふき出した。
レミーがミレイの肩に手をおいた。
ミレイは、縋るようにレミーを見た。
レミーは、横をすり抜けて怪物に飛びかかって行った白虎の思考を聞いていた。
言いたくなかった。でも、それがミレイとレオに残した遺書だと思えば、言わないわけにもいかなかった。
「肉しか食べられないわたし達は、もう必要ない……。わたし達の代わりに、きっと故郷を見て下さい……」
レミーはぽつりとそれだけ言うと、二人を残して船の奥へ歩いていった。
レミーは、ぶつぶつと呟いていた。
腹が立って仕方がなかった。
‖暗い、暗い……。もう、なんて暗いんだろ。ほんと、あったまきちゃう。なんでこうなっちゃうんだろう。きらい、暗いの！‖
いきなり、壁を蹴っ飛ばした。
‖イテテ……‖
強く蹴りすぎて、足の爪が割れた。

そのとたん、通路の明かりが点いて、あたりが明るくなった。
＝＝おちょくっとんのか、おのれは＝＝
ドン！
さらに、レミーをからかうように、船体が激しく突き上げられた。
レミーは床に叩きつけられた。
怒るべき相手がどこにいるか知らなかったが、とにもかくにも、レミーはカッカと怒っていた。
＝＝ナロー、おぼえていろよ＝＝
船体を襲った衝撃は、陸地の最後の噴火だった。
陸は跡形もなく海上から姿を消していた。どす黒く泡立つ海が、わずかにその名残りだった。
船に乗った動物達に、戻る陸地はなくなった。
反応の消えた陸地センサーを見つめていたブンドルが静かに言った。
「もともと、みんな帰るつもりで船出したわけではあるまい」
そして、レオに――、
「さあ、進路を東に……」
＝＝分かっています＝＝
レオは、若者達に指図を始めた。
「東？　なぜ、東なんじゃ？」
カットナルが怪訝そうに訊いた。
「村人達や動物達は、いつも村の近くの丘で海を見つめていた。丘は東の海に面していた」

「それが、故郷となんの関係があるのだ？」

「いわば、帰巣本能とでもいおうか……。生き物は、生まれ育った巣を記憶のどこかで憶えている。例えば、泥酔して意識をなくした人間が、それでもいつの間にか、家に帰りついている時がある。酒を好む者なら一度は体験することだ」

ブンドルは、なにげなく六人を見回した。

カットナルを除いた五人は、照れくさそうにそっぽを向いた。しっかり、心あたりがあったのだ。

酒の飲めないカットナルが、小首をかしげてレミーに訊いた。

「レミーさんも経験あるのか？」

レミーは肩をすくめ、

「女ですもの……、飲めないお酒に酔いしれたい夜もあるわ……。なんちゃって、わたしが飲めないはずもなし……か」

ペロリと舌を出した。飲み出したらうわばみどころか、やまたのおろちとすらあだ名されたこともあるレミーなのだ。

ブンドルは微笑して話を続けた。

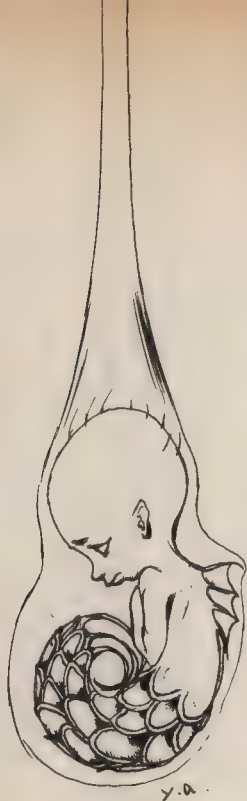
「なぜ、彼らは海を見つめる時、あの丘に行くのか？……おそらく、彼らすら知らない本能の中に、祖先の記憶が残されているからかもしれない」

「そんなものかのう」

カットナルは首をひねりっぱなしだ。

「そんなものでなくても、我々はそれに賭けるよりあるまい。他に手がかりはなく、手がかりなしでは、この海はあまりに広すぎる」
「東に目的地があるなら、たぶん近いうちに見つかるだろう」
真吾がぼそりと言った。
「いよっ、ノストラダムス！　真吾先生の大予言かよ」
キリーが、ことさら明るく茶化した。
「それほどいい加減じゃない。彼らは、あの陸地に、この船に乗ってやってきた。それも七隻の船団でだ。そうはスピードは出せんはずだ。長く乗っていれば、たとえ共食いをしたとしても、やがて食物がなくなってしまう。だが、彼らは、あの陸地に辿り着いた。それほど長く、船に乗っていなかったってことと。ここから距離はそう遠くない……、多分な……」
カットナルは溜め息をついた。
「どいつもこいつもたぶんばっかり……。どうして、こう、わしらはいつも行きあたりばったりの出たとこ勝負なんじゃ……。計画性なしの目算ゼロでは、とても選挙は任せられんな」
「どうせ、人生は出たとこ勝負よ……。出会いがしらの一発じゃ……、うん」
ケルナグールが、自分の台詞に頷いた。
「確かに行きあたりばったりに思えるが……。我々の訪れる星は、いつも、どこか話ができすぎている。敵は……、かなり計算をしてくれているのかもしれぬ」
――敵？……――
一同はブンドルを見つめた。

誰にも、その敵が何であるか思いあたるものがあった。
彼らが地球を飛び出し、宇宙をさまよう原因を作り出したもの……、宇宙の意志ともいえるビッグソウル……、この宇宙を作りだしたもの……。
かつては地球の希望だったはずのそれを、敵と呼んでもいたしかたない気がした。
今度の星にも、ビッグソウルの見えない手が感じられなくもなかった。
敵と呼ぶには、あまりに大きすぎる存在ではあったが――。
「えらいことですよーん」
キリーが、投げやりな口調で言った。
だが、気持ちは投げていなかった。
＝やったろうじゃん。こうなりゃ、とことん……＝
一同もキリーと同じ思いだった。
船は、フルスピードで東に向かって走っていった。

第8章

創造主との戦い

負けるな落ちこぼれ

またたく間に一週間が過ぎた。

船内ではとりたてて何も起こらなかった。

時折、船の外壁にコツンコツンと何かがぶつかる音がしたが、センサーを見れば生物反応があり、それが海の中にいる得体の知れぬ生物であることを物語っていた。

船出に襲ってきた怪物を思えば、あえて無視する方が得策だといえた。

もし戦う必要があるとすれば、それは存在するかどうかも確かではない故郷についた時だろうし、この広い海に何頭いるかも知れない怪物と、今、戦うのは無意味に思えたのだ。

さらに一週間がすぎた。

食物が植物性蛋白質と野菜ばかりで、いささかうんざりしていることを除けば、快適な旅だといえた。

快適でなかったのは、暇にあかして六人でゲームしたサイコロギャンブル（チンチロリン）で、カットナルに三百億ドル負けたキリーぐらいだった。

カットナルの指導で、村人達は食事の前には必ず手を合わせて拝む習慣を身につけた。

地球では、生き長らえる糧を与えてくれた神に感謝する、よく見慣れた風習だったが、船の人達は決して神を拝んでいるわけではなかった。

文句も言わずに食べられてくれる植物達そのものに感謝しているのだ。

「こういうのは無神論者とはいわぬ。これはまさに、ものみな魂あり……、有心論じゃ……、うむ」

カットナルは妙に納得して、キリーが自叙伝を執筆しているワープロを借りて、論文を書こうと

思ったりもしてみた。

——少なくとも、ブンドルの美学論よりは人の役に立つじゃろう——

そして、論文の構想がまとまり、いよいよ書き始めようと、チンチロリンの借金三百億ドルのかたにキリーから無理矢理借り出したワープロで、

『スグーニ・カットナル著……神なき有心論』

……と表題を書いた時、船内の呼び出しブザーが鳴った。

センサーが、何かを見つけたのだ。

*

センサーは、深さ千メートル程の所に、金属反応のある広大な台地の存在を知らせていた。

台地の上には、直径が五十キロ近いドーム状のものがいくつも点在している。

「正確には直径四十九キロだ……」

と真吾が言った。

「七の七倍か……。でも、地球の単位がここで意味を持つわけ？」

レミーが訊いた。

「別に……。言ってみたかっただけだ……」

と真吾が肩をすくめた。

だが、ドームの形は、明らかに何者かによって作られた人為的なものが感じられた。

「故郷ね……。やっぱり、あるところにはあるわけだ……」

キリーがわけの分からぬことを言って、口笛を吹いた。
＝潜行します＝
喜々とした思いで、レオが同意を求めた。
船の中に、動物達と人間と、そしてまだ充分残っている食料用の植物達の期待感と喜びが満ちあふれている。
「我々は誰も止めはしない……。諸君の故郷だ」
ブンドルが代表して言った。
「はい！」
レオは、声に出して頷いた。
船は、両側のタンクに海水を目いっぱい吸い込むと、まっしぐらに海底に潜っていった。

＊

船の目の前に、海の底深くから突き出した台地が広がっていた。
水深千メートルで、姿勢を水平に戻した。船は、ゆっくりと前進していった。
センサーは、生き生きと、ドームの金属反応をビジョンに映し出している。
だが、生物に必要な空気の反応は、まだ見つからなかった。
ドームの一つに近づく。
センサーは激しく反応し、細かくドームの様子を描き出した。
「これは……」

ブンドルがうめいた。
それは、完全なドーム状ではなかった。
至る所に亀裂や穴が開いている。
「破壊されたのか……、それとも、自分から壊れたのか……」
そこには、ねじれ、歪んだ巨大な金属物質の残骸しかなかった。
「せめて窓でもあれば、もっと様子がわかるんじゃが……」
ケルナグールがぼやいた。
「ここはディズニーランドの海底の国じゃない。窓があっても何も見えんさ。頼りはセンサーだけだ」
キリーがビジョンを見つめた。
「故郷を見ようにも、目では見えぬわけだ。この片目にもな」
カットナルが呟いた。
船は、ゆっくりと別のドームへ向かった。
そこも、金属の残骸だけだった。
船内に、次第に絶望感が広がっていった。
故郷を知らせるのがセンサーの反応だけとは、あまりに淋しすぎた。
しかも、彼らに帰る陸地はないのだ。
それでも、小さな子供が少額でもかけがえのない一セント硬貨を探すように、船は台地の上をさまよった。

一日が経った。
壊れたドームしか、けっきょくそこにはなかった。
なにも見つけだせぬまま五日がたった。
船は、いったん海の上に出た。
入口をあけ、六人は外の空気を吸った。
どこまでも青い海原が続いている。
分かっていても、世界にこの船ひとつ、を痛切に感じる。
その時だった。
海面のあちこちが、水しぶきとともに盛り上がった。
あの怪物達だ。
しかも、見渡す限り怪物に埋めつくされ、とても数えられぬほどだった。
三つの目が、じっと六人を見つめている。
一頭が、牙をむき出した。
突進してくる。
真吾が、円筒のバズーカ砲のようなものを肩にのせた。
大きく開かれた口にむけてかまえる。
ズシン!
ロケット弾が発射され、怪物の口の中に叩きこまれた。
とたんに、ロケット弾は弾け、中から槍のようなものが無数に飛び出した。

槍の中の数本は、口の裏側から三つの目をつらぬき通した。
「やはり、効き目がありそうだな」
真吾が、ニコリとも笑わずに呟いた。
船の中で、真吾が怪物用に銃を改良して作り出した武器だったのだ。
だが、すぐに目の前で起きた光景は、六人から声を失わせた。
凄まじい牙の交錯音がして、みるみるうちに、傷ついた怪物は骨だけになった。
まるで、獲物に押し寄せるピラニアだった。
体が大きいだけに、より凄まじかった。
最後の肉片を食いちぎった怪物は、船の上の六人を見据えた。
いきなり、船に向かって泳ぎ始めた。
それを合図にしたかのように、他の怪物達も次々に突進してくる。
六人は入口の扉に飛びこむと、急いで扉を閉じた。
ゴツン！　怪物の体当たりを受け、扉が揺れる。
さらに、船体の至る所で鈍い音が聞こえた。
怪物達が総攻撃しているのだ。
――急速潜行！――
レオが叫び、船は沈み始めた。
怪物達を振り払うように、がむしゃらに潜行した。
怪物達は水圧に耐えきれなくなったのか、一頭、また一頭と、次第に追うのを諦め、台地のある

深さまで来た時は、もうまわりに怪物はいなかった。
船の中の動物は、さらに行き場のない虚無感に襲われていた。
浮上すれば怪物の襲撃、そして海底の廃墟（はいきょ）には何もない。
「諦めない、諦めない」
レミーが明るくみんなに声をかけた。
「まだまだ調べていないドームはいっぱいあるわ。ギブアップするのは、最後の最後でも遅くないもん」
――レミーさんは、ノー天気なんですね――
ミレイが、あっけらかんと言ったので、レミーはこけた。どうやら、悪口やからかいのつもりで言ったわけではないらしい。
――俗語の使い方を、よく教えておけば良かったかな――
そう思いながらも、レミーは答えた。
「そ、相当ノー天気……。わたし、過去も現在も、何も信じちゃいないけどね。未来だけは、ホープなの。ニコチン減らすフィルターなしでね」
「煙草（たばこ）は、吸い過ぎない方がいいぞ」
意味ありげにカットナルが言ったが、本人としては何の意味も込めていないだけに、一同がその言葉を聞いて苦笑したのが不思議だった。
「そ、元気、元気。健康でいなきゃ……、ね」
レミーがそう決めて、ニッコリ笑った。

五日目、六日目も、台地の上には壊れたドームしか見つからなかった。
七日目の朝がやってきた。
――朝か……。昼も夜もない船の中で、おはようもないもんよね――
レミーは大きく伸びをして、奥のフロアから広間に降りてきた。
――浮上できないんじゃ、陽に当たれないし、お洗濯どうしようか――
熱で乾燥させる方法もあるのだが、やはり下着は陽の光が似合っている。
――ピッカピッカのお陽様を吸い込んだ肌触(はだざわ)り……、最高なんだけどな――
そんなことを思いながら、ふっとセンサーのビジョンを見た。
――あれ？　ピッカピッカ光っている……。なに!?――
起き抜けの眠気がすっ飛んだ。
ビジョンに駆け寄る。
――空気反応だ……。空気の詰まったドームがある――
真吾が、レミーの肩を叩いた。
「やったわ……。おまけに……、ほら……」
真吾が、センサーのスイッチを切り換えた。
ビジョンのメーターが大きく振れた。
「これ……、まさか」
それが何を意味するのか、分かってはいたが、声に出さずにはいれなかった。

「そう、生物反応だ……。空気があり、生物のいるドームがあるんだ」
「どこ？　どのドーム？」
ブンドルが、炉のある扉のむこうから入ってきて言った。
「もう、すでにそこへ向かっている」
＝微速前進＝
レオの生き生きとした声が、レミーの内側から聞こえた。
船はゆっくりとドームの一つに近づいていった。
センサーが、空気と動物の存在は知らせてくれてはいるものの、入口らしきものの反応は見当たらなかった。
「どうやって入ればいいんだ？　俺が昔、ブロンクスで忍び込んだデパートや倉庫には、かならず窓があったがね」
キリーが、ポケットから鍵や鑢や針金をつけたキーホルダーを出して弄んだ。
「今でも、無断でお邪魔する気でいるの？」
レミーは呆れた。
「三つ子の魂百までってね。盗みの七つ道具は趣味さ」
「窓がないなら、玄関をノックするしかあるまい」
そう呟くと、ブンドルはレオに――、
「分かるね……」
＝もちろんです＝

レオは頷くと、炉の前に走っていった。
＝**さあ、ムピ……、大声で叫んでくれ**＝
炉の中の集合体が青白く膨れあがり、強烈な思考波を放った。
＝**入れて下さい。入れて下さい。我々は帰ってきました**＝
船の動物も人間達も唱和した。
＝**入れて下さい。戻ってきたんです**＝
――まるで、家出したガキが親の許しを乞うって感じみたいだぜ――
キリーは何となくそう思ったが、あまりに不謹慎な気もして、その思いにはしっかりシェルターをかけた。
――謝って済むもんじゃねえ。てめえとはもう子でもない親でもない。どこへでも行って、のたれ死にでもするがいいぜ……。ブロンクスの悪ガキ共の親なら、当然、そう答えるはずだがな――
だが、キリーの思惑は、すぐに外れた。
ドームの中央が、みるみる円形に開くと、いきなり、赤い光線が船を覆った。
そして、ゆっくりと船をドームの中へ運んでいった。
やがて、船は静かに止まった。
そこは空気と生物の反応に満ちあふれていた。
「よく来た子供達」
いきなり、船の動物と人間達の内側に声が飛びこんできた。
ムピの集合体とも違う、心の奥底にずしんと響くような、低い声だった。

〓子供達？　なんのことだ？〓
一同は、言葉こそ違え同じ思いだった。
〓そう。ここは、お前達の生まれた故郷だ。さあ出てくるがよい〓
船の入口の扉が開いた。
誰も、扉を開けた覚えがなかった。
あの声の主が開いたとしか思えなかった。
船の動物達と人間は、次々と船から降りていった。
〓これが故郷〓
みんな呆然と、あたりを見渡した。
金属のドームに見えた外壁に比べ、内部の様相はまるで違っていた。
そこは、幅二百メートル、高さ百メートルほどの楕円形の大きな通路のようだった。
鮮やかなピンク色の壁面が、どこまでも続いていた。
いや、壁面というより、ひだのついた粘液質の肉の塊りのようだった。
肉のようなものに包まれて、全ての壁と天井がゆっくりと波打ち、動いていた。
床だけが、大理石のようなスベスベした白い金属でできている。
全てが、レミー達、六人のイメージした故郷とはかけ離れていた。彼らの思う故郷といえば、
木々や花が咲き乱れ、清らかな水の流れる川や白く波打ちよせる海——。
俗なイメージと笑われてもいい——。
伝説の桃源郷、シャングリラ、エデンの園——そこまでは少女趣味でなくても、大なり小なり、

それに近いもののはずだった。
――だが、これは何なのだ？――
ブンドルは、眉をひそめた。
光源はどこにもなかったが、ぼんやりと浮かびあがるピンク色の肉の袋……。
時折、稲光のような光が肉のひだの間を走り抜けていく。
美しいとは、口が裂けても形容できぬ、グロテスクなものだった。
――**似ているな**……、**あれに**……――
現実的なカットナルには、この光景を見てすぐに思いついたものがあった。
カットナルは産婦人科は苦手だったが、一応医者だ。
女性の体の外側は縁がなくても、内側だけは、臨床実験や学術研究写真でよく知っていた。
それでも直接には言いづらく、ぼそりとつぶやいた。
「子袋……」
「子袋？……あのヤキトリ……、いや、ヤキトンでしこしこしていてうまいモツヤキがどうした？」
ケルナグールが目を輝かして訊いた。
「子袋がモツのどこの部分か知ってて訊いているのか？」
「うまけりゃ、どこだっていいじゃろ」
「子宮か……。確かにそうかもしれぬ」
ブンドルがずばりと言った。
大理石の床のある巨大な子宮……。

一同は、もう声もなく、立ちすくむだけだった。
‖**さあ、子供達。こちらへ来るがいい**‖
ドームの奥で、稲光が光った。
「さあ、お呼びだ。ここまできたら……」
真吾は、手に持ったバズーカ砲風の武器を肩にかけながら言いかけた。
「生きるも地獄、死ぬも地獄、行くっきゃあるめえ」
マシンガンに弾を装塡(そうてん)しながら、キリーが後をうけた。
――なぜ、武器を用意するの？――
レミーは分からなかった。呼んでいる声が敵であると決まったわけではない。しかも、私達を子供と呼び、なんの妨害もせずにこのドームにいれてくれたのだ。
むしろ、親切な味方と思うべきなのだ。武器を構えるなんてちょっとばっかり、失礼ではないのか――。
そう思いながらも、レミーもしっかり自分のマシンガンと拳銃の弾を確認していた。
誰もが、声の主にわけもなく敵意を感じていたのだ。
あれほど故郷に恋い焦(こ)がれていた村の人間達も、思い思いの武器を手に持っていた。
‖**わたしが先に行きます**‖
炉の中からいつの間にか抜け出したムピの集合体が、一同の前に現れた。
人間の大きさほどの、だが形は、六人の耳の裏にあるムピと同じようなアメーバー状だった。
ムピの集合体は、床の上数十センチを浮かぶようにして進んでいった。

すぐ後を、レミー達とレオとミレイの村人達、そして動物達が列になって続いた。

一時間ほど歩き続けても、あたりの様子は変わらなかった。

相変わらず、ピンク色の肉のひだが壁や天井を覆いつくしている。

だが、突然――。

唐突に突然――。

肉のひだがぐいぐい外側に広がっていった。

なんの音もしなかった。まるで、空気を急に入れられた風船の内側のように、目の前が広がっていくのだ。

一同は武器を持って身構えたが、武器の相手がなんなのか、見当もつかなかった。

広がっていく肉のひだの間から、まるで卵が生まれるように楕円形の物が飛び出した。

巨大だった。しかも、それは、彼らが乗ってきた船と同じ形をしていた。

ただ違うのは、方向舵と後部のスクリューがどこにも見えないことだった。

肉の広がりが止まった時、そこには数えきれないほどの船が置かれてあった。

いや、方向舵とスクリューのないそれは、船というより巨大な薬のカプセルを思わせた。

今や、見上げてもはっきりは確認出来ないほど高くなった天井から、キラキラ光る糸のようなものが次々と降りてきた。

最初、糸だと思ったそれは、近くまでくると、様々な太さの半透明の管だということが分かった。

太い物は直径が十メートル以上もある。もちろん細い物は、まるで蜘蛛の糸のように細かった。

いや、よく見れば……、もちろん人間の目には見えないが、ＩＣ回路の配線より細いものもあった。

それぞれの管の先には楕円形の膨らみがあり、何かが入っていた。
レミーは思わず、目を背けた。
それは、何かの胎児だったのだ。
頭部は明らかに人間であり、胴体から下は魚だった。
時折、管の中を青白い光が走って、胎児を覆った。そのたびに胎児は成長していく。
目と鼻ができ、髪ができ、顔つきはますます人間らしくなり……。だが、成長する下半身は、尾びれがつき、鱗が生じ、それはまさに人魚だった。
パシン、管が弾け、胎児は床の上に落ちた。
とたんに胎児の顔の顎から牙が突き出し、口は裂け、目は三つに分裂した。
床の上をどこからともなく水が流れてきて、胎児を押し流していく。
声が聞こえた。
‖**また、できそこないのようだ**‖
「お前は誰なのだ」
ブンドルが、話す相手の位置も分からず、声を出した。
‖**わたしか？　わたしが誰なのか、わたしにも分からない。わたしは、この星で生命を作るために生まれたのだ。いわば、お前達の創造主だ……**‖
「お前の本体はどこにある？」
‖**分からない。ともかく、お前達がわたしの体の中にいることは確かだ**‖
——体の中？　すると、このドーム全体が体ってわけ？——

レミーは、心にシェルターをかけて思った。
だが、声の主には通用しないようだった。
‖そうかもしれない……。だが、不思議だ。お前をわたしは生み出した覚えがない‖
「そりゃそうだ。わたし達は、他の星からやって来たんですもの」
‖そうか。だが、この近くの星の集団からではないな。この近くの星の生物は、みんな、わたしが作ったのだからね‖
「お前が作った？」
‖そう。ここは、生命を作り出す所だ。ここには生命を生みだす条件が揃っている。わたしは、水と空気を作り、光の放電で生命物質を作った。それが全ての元となり、わたしは様々な生物を作った。そして、完成した生物を、様々な星へ送り込んだ。様々な星には様々な条件がある。それに似合ったものを作るのが、わたしの役目だ‖
「役目？……誰が、それを命じたのだ」
‖分からない。わたしはただ生み出すだけだ。失敗したものはこの星に残し、完成したものはあのカプセルに入れ、送り出す。だから、それぞれの星では完成品だけが生きている。その生物が死に絶えれば、また新しい生物の完成品を送り届ける。ある星では卵から生まれる爬虫類が完成品の時もあれば、胎児の形で生まれる哺乳類が完成品の時もある‖
「それで、この星は進化がめちゃくちゃで、いろいろな生き物がいたのね……」
とレミーが呟いた。
‖進化などありえない。完成品と完成品を作り出すまでの失敗作、その二つだけだ‖

――失敗作……――

レオがうめくように言った。

「それで、白いブロキオザウルスに緑の白熊――」

レミーが呟いた。

――そう。お前の星でお前が完成品だとしたら、お前の星は、今、哺乳類が完成品だといえる。もっとも哺乳類は完成度が低くてすぐに死に絶えるがね……――

――わたし達は何なのだ……。ほんとうに失敗した生物なのか！――

レオの声が響いた。

――もちろん、この星に残っている以上、失敗作だ。この星には失敗作しかない。だが、いつの間にか、この星中に失敗作が繁殖しすぎた。失敗作は水と空気と土地を汚し、せっかくの生物の苗床が冒されるようになった。陸に住む生物の失敗作は、この星にとって特に危険だ……。処理しなければならない。完成品だと思って他の星に送り出した陸の生物も、あまり良い結果はでていない。結局、自分を滅ぼすと同じに、その星も滅ぼしてしまうのだ。わたしは、陸に住む生物に生物の完成品は無理だと思う。海の中で生きる生物にこそ、完全な完成品が出来ると思った。わたしは、よりよい海の生物を作り出すために、この星を海だけの星にした。海の温度を、生物が育ち易いように一定にするために、星の軸を首振りさせ、太陽の熱が満遍なく海に当たるようにした。北と南の氷は解け、陸の動物の失敗作は流されて処理できた。けれど、失敗作も標本としての価値はある。わたしは失敗作を集め、海の下、生物を生み出す実験室の近くへ住まわせた――

「それが、あの破壊されたドームか」

ブンドルが言った。

＝そう、そして、海の生物の完成品が生まれるようにもなった。人間以上の頭脳、そして自由自在に泳げる下半身、水の中でも息が出来る呼吸器を持った、水の中の生物がな＝

「ようするに、人と魚のあいのこの人魚さんか。だが、海にいたあの怪物が完成品にしちゃ、お粗末だぜ」

キリーが吐き捨てるように言った。

＝この星にいるのは失敗作だけだ。たとえ海にいようとな。この星は、生物を作り出すとともに、出来そこないの捨て場所でもある。だが、出来そこないでも繁殖力はある。標本用に残していた失敗作も、やがてドームの中で増えていった。標本はわずかだけあれば良い。わたしは、失敗作を海に捨てた＝

「なるほど。それで、ドームを壊し、洪水を起こしたわけか、勝手なもんだな」

自分の台詞(せりふ)に次第に腹が立ってくるのを押さえながら、真吾は話し続けた。

「しかし、標本用にカプセルに入れるつもりだった動物達と人間達が逃げ出した。少しだけ知能のある人間が、カプセルを船に改造した。そのカプセルは七隻(せき)あった。七隻は、わずかに狭い陸地に辿(たど)り着いた。もっとも、それは、標本が絶えないように、あらかじめ用意されていた陸地かもしれないがね。長い時間が経ち、俺達が降りて行った。それが、あらすじってわけだ」

＝その通り……。わたしは待っていた。失敗作とはいえ、大切な標本だ。そして、ここは彼らの故郷だ。いつか、ここへ帰ってくると信じていた＝

「そんなことって……」

レミーは、やりきれなかった。
「陸の動物や人達が海に出なかったのは、危険があったわけじゃなく、むしろ帰りたくなかったからなのね」
ブンドルが頷く。
「そのようだ……。だが、帰りたくない気持ちは次第に忘れさられ、故郷を思う帰巣本能の方が強くなった。帰りたくない気持ちは、本能的な恐怖感としてだけ残った。そこに降りていったわたし達は、その恐怖感を取りさった……。我々は、知らず知らず神の使いをさせられた。この生命製造怪物が神ならね」
「はめられたっちゅうわけだ。俺たちはこいつに」
キリーはナイフを出して、袖でこすった。キリーは怒っていた。その素振りは、気持ちを落ち着かせようとするキリーの癖だった。
「こいつだけの仕業ではなかろう。おそらく、この宇宙の生物を操る誰かの指図だ」
「ビッグソウルか……」
ケルナグールがそう言ったが、口に出さなくても、六人は分かっていた。
——お前達が、どう呼んでいるのかは知らぬが、宇宙を動かす大きな力の導きなのだ。わたしは、戻ってきた彼らを喜んで受け入れる。失敗作とはいえ、大切な標本だ——
「何が、喜んで受け入れるよ！」
レミーは、キッと天井を見上げた。どこを見て話せばいいのか分からなかったが、声の主をにらみつけているつもりだった。

昔、使い慣れた口調が、何年かぶりに自然と口にでた。

「ちょっと、おっさん。ううん、おばさんかもしれないけど……、たいがいにせえよ。この連中のどこが失敗作ちゅうのよ。」

レミーの傍で、レオとミレイは悄然とうなだれる。

＝＝この動物達は、戦う本能がなさすぎる。生存競争の意識に欠けているのだ。彼らは、最小限度しか生存の努力をしない。やがて、他の生物と意識を通わせ、共存しようとすら考え始める＝＝

「いいじゃん、上等じゃん。そのどこが失敗作ちゅうのよ？」

＝＝彼らは、細く、長く、生き続けるだけだ。競争のない所に進歩はない。淘汰もない。ただ生命の流れが澱むだけだ。進みもせず、また滅びもしない生物……。それは、生物とは言えない。いいかな……、宇宙は、今も拡大している。変化せぬ生物は不要だ＝＝

「不要？　なんちゅうことを！」

キリーが、レミーの興奮を醒ますように、ニヒルな口調でわりこんできた。

「ありがとよ。地球の俺達に分かり易いように、説明してくれてな」

そして、ナイフを手の上で弄びながら静かに、

「要するに、喧嘩も出来ねえような奴は、生き物として出来そこないの落ちこぼれってわけだ」

＝＝この星の海に住む生物のように、相手を殺す対象としてしか感じないものも失敗作だがね＝＝

その時だった。

いきなり、レオの思考が六人の声の主の会話に割り込んだ。

＝わたし達が、喧嘩も出来ない不良品……？　今でもそう思っているのか？……＝

レミーは、レオの思考に熱い怒りを感じた。

だが、すぐに果てしなく冷えた感情に変わった。

あの凍った湖の化物が感じさせた冷たさを、どこか思い出させた。

＝確かにわたし達は、他の生物と意識を通わし、互いに共存しようとしてきた……、確かにね……＝

不思議なほど、レオの思考は冷静だった。

だが、その思考の響きは、知識や経験を教えたブンドルが怒りの表情を見せた時よりも、さらに凄みがあった。

＝だけれど、わたし達には故郷に戻るという目的が見えた。それが六人の神様と翼を持った神(カウ)様(ス)のおかげで、実現出来そうになった。その時、少しだけ、みんな変わったんだ。みんなは、故郷に帰るために戦うことを知った＝

レミーは、レオの横顔を見つめた。

レオの隣のミレイと視線があった。

ミレイは、レミーにふっと笑いかけた。

あまりに淋しそうな笑顔だった。

レオは話しつづけた。それは、自分自身と、船に乗ってここまでやってきた動物や人間達への気持ちでもあった。

＝故郷を見ることに、戦うだけの値打ちがあると思ったんだ。我々は生まれた所を見たかった。

もうすぐ消えてしまう、滅びてしまうわたし達みんなが、なぜ、どんなふうに生まれてきたのかを感じたかった――‖

レオの瞳から涙がふき出していた。

‖――だから、ここに戻ってきた。そして、知った。今、分かった。我々は、ちゃんとした生き物を生むための試作品、実験作。そして失敗作、不良品。できそこない。落ちこぼれ。くず。がらくた。けど、だけど、みんなは、そんな気じゃなくて、みんなはみんなとして生きている。名前だってある。レオ……、わたしの名前。ミレイ……、こいつの名前……‖

レオはミレイの肩を強く抱いた。

‖わたし達は、完成品の種のために忘れられていい種、失われていい種じゃない。まして、失敗作の標本になるつもりもない――‖

‖――だが、お前達は失敗作以上の存在ではない。お前たちを作ったわたしが、そう言うのだ。お前達を、この星の水と空気と生命物質の組み合わせで作りだした、このわたしがな……。お前達は、どこの星でも生きてはいけないできそこないなのだ‖

‖違う！‖

ミレイは、いきなりマシンガンを撃った。

ミレイの顔は、もう表情を失っている。ただうつろにマシンガンの引き金を引き続けているだけだ。

レミーはやるせなかった。たまらなかった。まるで若い自分そのものを見ているようだった。

「やめて……、ミレイ。なんの解決にもなんない」

思わず、レミーはミレイのマシンガンを撃つ手を押さえた。
＝＝解決？　わたし達に解決なんていりません。故郷が欲しかっただけです……＝＝
ミレイはレミーを見つめかえした。
「捨てなさい、そんな気持ち。これから生きることも考えなきゃ……」
＝＝レミーさんは強いんですね＝＝
「えっ？」
＝＝羨(うらや)ましいです。わたしと同じ知識、経験を持っているのに、わたしとは違う＝＝
「違わないわ。わたしはあなた。でも、わたしだって、地球という星の不良品、落ちこぼれかもしれないわ。だから、こうやって、宇宙を彷徨(さまよ)っている。でも、わたしは生きている。あなたも生きていける」
＝＝いいえ。生きていけるのはレミーさんだから……です……。うん＝＝
ミレイは、自分に頷いた。そしてニッコリ笑った。
＝＝レミーさんは戦えるもの、自分のために……＝＝
「あなただって……」
＝＝いいえ、分かっているんです。わたし達は戦えないことを＝＝
レミーは、ミレイを見つめた。
「じゃ、今やっていることはなんなの？　戦っているんでしょ？」
＝＝いいえ。わたし達のような不良品が、もう生みだされないように……、もう二度と生き物が、自分が生きていることを悲しまないように……、みんなのためにやっているだけです＝＝

「嘘よ。あなたに、ここで生まれてくる生き物を殺す権利なんかない」

＝もちろん、そんな権利ありません……。でも、分かるんです。みんな思っています。生まれたくて生まれるんじゃない。誰も生まれたくない。わたし達のような悲しい生き物にはなりたくない＝

「勝手に決めないで！……」

レミーは叫んだ。

＝勝手に決めていると思います？　わたし達、みんなの気持ちが分かるんですよ＝

ミレイの言葉に、レミーは詰まった。

――そう……、確かに、この星の生物は、ムピの力で他の生物と心を通わせることができる。でも、凍った湖の生き物達や、海の怪物の思考は分からなかったはずだ――

＝今は分かるんです。この星の生き物は、みんな同じ不良品ですから……。それに気がつきましたから……。もうムピがいなくても、悲しみだけは分かるんです。あの管の中の生き物は、思っています。生きたくない、生まれたくないって……＝

ミレイは、再びマシンガンの引き金をひいた。

「やめて！　やめなさい……」

レミーは、マシンガンを奪いとろうとした。

だが、その肩をブンドルが押さえた。

「もう止められぬ。悲しみが彼らを目覚めさせた」

「気取ったことはいわないで！」

レミーは、いきなり、ブンドルの頰を叩いた。

いつものブンドルなら、よけることは簡単だった。だが、そうはしなかった。
パシン！
乾いた音が、ブンドルの頬で弾けた。
「あ……！」
レミーは、ブンドルを叩いた手の平を思わず見つめた。
手の平の痛みは、ブンドルの痛みでもあった。そして他の四人と肩を落としているカラスも、同じものを感じていた。
レミーは、ブンドルを見つめた。
涙が流れてくる。止めようがない。
「だって……、だって……、ミレイはわたしなんだもん」
ブンドルは、レミーに頷いた。
ミレイとレオは、マシンガンを撃ちながら、奥へ奥へと走っていく。
床は、管から流れた液体で濡れている。
ミレイは足をとられ、滑って転んだ。
レオが微笑して、抱きおこした。
ミレイもニッコリと笑いかえした。
二人は、床の上をスケートのように滑り始めた。
いつの間にか、二人はスケーターズワルツをハミングしていた。
その曲は、やがて、動物達や人間達にも広がり、みんなはメロディを歌いながら、肉のひだで包

まれたドームの中を壊し続けた。
ドームの声の主は、黙っていた。
一言も話さなかった。
そして、ドーム内が破壊されつくした時、溜め息ともつかぬうめき声が聞こえた。
‖わたしに逆らうとは……。やはり、不良品は不良品だ‖
ブンドルは、天井を見上げた。
「逆らうものは、みんな不良品か——」
「奴の思い通りに生きないのは、みんなできそこないってことらしいぜ……」
とキリー。
「できのよい親とは言えないな。不良品が多すぎる」
真吾が肩をすくめた。
「わしは不良品のつもりはないがの……。水かきこそないが……」
ケルナグールが余計な言葉を付け加えたので、一同はいささかよろめいた。
「彼らが不良品なら、わしらもまた不良品だ。わしらはできそこないの誇りを持って、お前達に逆らい続けるだろう。生きている限りな」
カットナルがニヤリと笑った。
‖わたしに翼のある限り——‖
カラスが、これみよがしに翼を羽ばたかせた。
‖確かに、わたしは不良品を作りすぎた。そろそろ処分される時のようだ……‖

声の主は冷ややかに言った。
広がっていたドームの壁面が、次第に収縮し始める。
ブンドルが声の主に言った。
「お前は、こうなることを予測していたようだな」
――わたしは生命を作り出すものだ。この付近の宇宙の生命は完成した。もう役目は終わった。あとは不良品とともに消えるだけだ。だが、わたしは自らの力で滅びることはできない。不良品の手でも借りない限りはね……――
「またまた、全てが仕組まれていたわけか……。我々がこの星に来たことも含めてな」
カットナルがわめいた。
――知らないね。わたしは、お前達の言うビッグソウルの思い通りに生まれ、滅びるだけだ……――
声は、それだけ言って沈黙した。
壁の収縮は、ぐんぐん速度を増した。
動物達が、人間達が、みるみるひだの間に巻きこまれていく。
「畜生！　今回、見せ場がほとんどなかったぜ」
キリーが舌打ちした。
「この様子じゃ、次の回は期待できそうにないしな」
真吾が肩をすくめた。
「ちえっ、最近、ついてないぜ」

レミーは、そんなキリーの肩をポンと叩いた。
「でも、往生際の悪いわたし達としては……」
レミーは、マシンガンを構えた。
一同もニヤリと笑って銃を持った。
「ついてなくても、効き目がなくても、やる時はやるのッ！」
レミーは引き金を引いた。
肉のひだに銃弾が吸い込まれていく。
一同は、ありったけの弾を、収縮してくる天井に、壁に叩き込んだ。
無駄なことは分かりきっている。
しかし、一同は怒っていた。手に持った武器はなんでも使ってやるつもりだった。
蹴とばしてでも、噛みついてでも、引っ掻いてでも――。
レミーは、マニュキュアべったりの場末の娼婦のように指の爪を伸ばしていないのを、今ほど残念に思ったことはなかった。
あっという間に、肉のドームの広さは小部屋ほどにまで縮まった。
ピンク色の肉は、毒々しい赤に変わった。ぬるぬるとした肉のひだの蠢きは、もうすぐそこだ。
もう六人とカラスの他は、誰も見えない。
どろどろとした粘液が、六人の頭上に降りかかってくる。
さすがに、もうアウト……。
そう思わざるを得なかった。

その時だった。
縮みきった目の前の肉のひだの向こうから、青白い光が飛び込んできた。
光はみるみる広がり、肉のひだを押し広げていった。
肉のひだの向こうに、ムピの集合体の姿が見えた。集合体は、弾けるように、さらに強く光り輝いた。
あまりに激しい、青白い光だった。六人は、その光の中でもう何も見えなくなっていた。
どこからか、ミレイの声が聞こえた。
＝サンクス……、故郷へ連れてきてくれて……＝
「でも、その故郷は……」
＝いいんです。わたし達、みんなが何であるか分かったんですから……＝
レオの声が聞こえた。
＝今度は、神様のみなさんを故郷へ連れていく番です＝
「故郷？　地球？……」
＝わたし達は、今、みんながムピの集合体になってます。わたし達の力を合わせれば、みなさんを神様の故郷へ飛ばすことが出来るかもしれません＝
「地球が、神様の故郷か……」
真吾が呟いた。
「どこへ飛ばしてくれようと、この際、文句は言わないけどな……」
キリーの声が聞こえた。

「神様の故郷(ふるさと)なら、住所を間違えないで欲しいぜ。断っておくけど、天国っちゅうのは、別の神様の刑務所(ムショ)だからね」

＝こんなことは、やったことがないから、上手(うま)くいくかどうか分かりませんが……＝

「自信を持ってやってくれ……」

すかさず、ブンドルが言った。

＝ともかく、神様の仲間がいっぱいいそうな所へ行ってもらいます＝

「神様っちゅうのは止めてくれ……。わしゃ、地球の人間だ。ただし、元は大統領だが……」

とカットナル。

「海の上だけは止めてくれよ」

ケルナグールはまだこだわり続けている。

＝翼で飛べる空のあるとこ……。ついでに、降りる所も……。それから、メスのカラスも……＝

カラスは、意外に注文が多かった。

＝じゃあ、やってみます。さあ、皆さん＝

あたり一面に、動物や村人達の意識が感じられた。

「そのまえに、ミレイ……」

レミーがミレイに言った。

「今は……、今は、あなた、元気なの？」

＝さあ……、分かりません。これが元気っていうのかどうか。ただ、レオが傍にいます。みんなも一緒にいます……＝

「OK！　ミレイさんが羨ましいです」

――それ、さっきわたしがいった言葉です――

「お互い、羨ましがってるわけか……。ま、おあいこ。恨みっこなしよね」

――さようなら、レミーさん。サンクス！――

――さようなら、ミレイ……。サンクス……。もう一人のわたし――

瞬間――。

青い光の中で、レミーは体に重さを感じなくなった。

移動が始まったのだ。

＊

レミーには、今、何も見えない。

闇だけが広がっている。

だが、確かにどこかへ向かって飛んでいることは確かだ。

一人ぼっちでないこともよく分かる。

五人の男とカラスの存在が、身近に感じられるのだ。

――みんな、好き……。でも、誰が一番好きかっていうと――

ふっと、その顔が思い浮かんだので、慌てて心のシェルターをかけようとした。

――いけない、いけない、聞かれるところだった……。それとも、もう聞かれちゃったかな？――

ふと、耳の裏に手をやった。
そこにもうムピはいなかった。
六人とカラスは、もう互いの心の奥を読む力はなくなっていた。
──OK、聞かれてないみたい──
レミーは、ほっとして、でも、いささか残念な気もした。
──どさくさに紛れてさ、誰かが聞いててくれてもよかったかも──
レミーはペロッと舌を出した。
前方に明かりが見えてきた。
そこが地球なのか、文字通り、神の国、天国なのか、今は誰も分からなかった。

*

宇宙の片隅で、一つの惑星が弾け飛んだ。
惑星は、大量の水と岩石を宇宙に弾き飛ばした。
その中の破片の一つに、青白く光るアメーバー状のものがしがみついていた。
それはムピの集合体だった。
星の破片はどこまでもどこまでも飛んで行き、やがて宇宙の彼方へ消えていった。
それは、レミー達とは別の、彼らなりの方向だった。
彼らが、どこへ辿り着くのか、それもまた、今は誰にも分からなかった。

AND SEE YOU AGAIN

あとがき風の予告編——首藤剛志

六冊目のゴーショーグンです。
六冊目といっても前作「時の異邦人(エトランゼ)」は、テーマ編とでもいうべき別格で、実際には「覚醒する密林」につづくPART5ということになります。長い間、お待たせしました。
えっ？　待ってなんかいるものか？……。
あ、そ……ごめんなさい。
そういうこと言われると、ちょっとだけ傷つくけど……。うん！　読者の皆さんは待っていなくても、実は、ゴーショーグンのメンバーが動きだすのを待っていたのは、他ならぬ作者の僕だったのかもしれません。……などと、居直ったりして……恥ずかしげもなく、遅れに遅れた六冊目を出してしまいます。
昨年の暮れに予定されたこの作品が、なぜ遅れたかというと……（ここで更に見苦しく弁解）……要するに、作者の怠けぐせが最大の理由であることは分かっていながらも、恐れも知らず、それをたなに上げて言わせてもらえば、前作「時の異邦人(エトランゼ)」で、えらくはりきりすぎ（作品のできはともかく……）、ゴーショーグンシリーズのテーマ的なこと（そんなものがあるとすればですが……）を言ってしまい、さて、これから彼らが何をするのか、はたと考え込んでしまったからです。
本来、この六冊目は、「覚醒する密林」の次の作品に位置し、ゴーショーグンのメンバーが海の惑星で、海の支配者と対決するノー天気な海洋冒険大活劇のつもりでした。

ところが、海の惑星にたどりつく前にテーマ編ともいうべき「時の異邦人（エトランゼ）」の世界をくぐり抜けた彼らには、今しばらく、気楽な冒険は似合わないような気がしてきたのです。

なにしろ、「死んでも生きてやる」……そんな、精神（マインド）の六人です。並の冒険じゃ、ちっともなんとも歯がたたない。楽々、くぐりぬけてしまうでしょう。

でもって、シリーズとしては、より核心に近づき、話をどんどん先に進めるよりなくなった訳です。

な、訳で、とうとう彼ら六人の最大の敵を彼ら自身が確信するという、こんな六冊目になっちゃった訳です。

敵はビッグソウル（宇宙の意志？……）。

ゴーショーグンシリーズの核であり、かつては地球の、いいえ宇宙の希望・夢だったものです。

それがどうして、こんなことになったのか……。

ゴーショーグンがテレビ放映されてから四年、六人のメンバーも、ストーリーもテーマも、そして読者の皆さんも、人間的にそれなりに成長……（もしくは、悪慣れかな？）してきたからだ……というより、ごまかしようがありません。

これから先、彼らと読者の皆さんに何が待ちうけているか、今は何も言えませんが、彼らなりの、人間としての激しくきびしい戦いが続くことは確かなようです。

などとえらそ〜に書きながら、作者本人はえら〜くくたびれたりして、六人のメンバーのつめのあかでも飲みたいくらいです。

……つめのあか？　失礼ね……。わたし、つめの手入れ、欠かしたことなくってよ……つめはい

つもといでおかなきゃ……ね……

レミー　談

失礼しました。このうえ、レミーさんにひっかかれたら、僕はもうズタボロです。
な、訳で、ここらでちょっと息抜きをしようと思うのです。
四年前、テレビ編の終了時、スタッフとお酒を飲みながら、こんなことを話したことがあります。
……このメンバーを使って、何か別の話をやりたいね……
……また、ロボットがビャーン、ズガーン、イヤーンかい？……
……そういうのじゃなくて、これだけ個性的な連中なんだから、どんな世界で活躍したっていけるんじゃない？……
……たとえば？……
……うーん、たとえば……西部のゴーショーグン……荒野の六人……ブンドルのドグ・ホリデイなんて、面白くない？……
……それよりレミーの女私立探偵なんてのはどう？――。「レミーにおまかせ」――なんちゃって、ハードボイルド……
……レミーは半熟が好きな筈だけどな……
……いいの、半熟のハードボイルドで……
……なんか、色っぽいな……
……なに考えてんだ、お前……
……ねぇ、怪盗ゴーショーグンなんてのはどう……ルパンもジゴマも二十面相もまっ青の泥棒軍

団……

……で、なにを盗むんだい……

……そりゃもちろん、乙女の心か……なにも入っていないエンジェルのたまご……

……う、う、おりじなりていが……

……なら、ゴーショーグン忠臣蔵――。四十七人、集まらなくて、六人でなぐりこみ……

……あの六人が忠義ってタマかよ……

……なぐりこむなら、網走ゴーショーグンか、仁義なきゴーショーグン。緋牡丹(ひぼたん)ゴーショーグンもいいぜ――。おともしやす――、♫背なで泣いてるビムラー牡丹……

……最近、その手の話は、現実がやたらリアルだもんな……

……なら、ブンドルのハーレクインロマンス――、ある愛の詩……

……ハーレクインロマンスなら、ケルナグールの方がオモロいで……

……キリーのゴッドファーザー――。じゃない――、ゴッドウルフ――暗黒街の野望……

……カットナルの社会派政治ドラマ？……

……真吾のランボー。撃ちだしたら止まらない……

等々……いろいろ、冗談ともマジメともいえない意見がとびだして……。

……そだ――。レミーの台詞(せりふ)に「二十一世紀は女の時代じゃ」ってのあるだろ。だったら、開国、明治維新も女の時代じゃってことにして、坂本竜馬に高杉晋作、近藤勇に沖田総司……幕末ゴーショーグンなんてのどう？……

……女の時代じゃ～って、レミーは何をやる訳？……

……そりゃもう——くらまてんぐ——。レミーの女鞍馬天狗……
……戦国魔神ゴーショーグンだ。幕末魔神ゴーショーグンがあってもいいじゃん……
……おもろい——、やっか……
……やる、やる……
てな訳で、この題材は、まじめに企画会議に提出されかかったのです。
ゴーショーグンのスタッフも読者も、相当、というか、ほとんど奇人の群れらしく、この番外編のうわさは深く静かに、しかも浮上しない潜水艦そのままにもぐりつつ広まっていきました。
そして、ゴーショーグンの小説が六冊目を数えた今、今までの真面目なゴーショーグン（どこがマジじゃ!?）は、ひとまずおいておいて、もう一つの顔、冗談っぽくアホらしいノー天気ゴーショーグンが浮上してもいいんじゃないかと思いはじめたのです。
ですから、次のゴーショーグンは、テーマ編「時の異邦人（エトランゼ）」とも違ったもうひとつの番外編になる予定です。
予定は未定であって決定ではありません。
それに番外編が、ウエスタンゴーショーグンか、ハーレクインゴーショーグンか、はたまた、コンクリートジャングルゴーショーグンか、社会派ゴーショーグンか、ランボー者（もの）ゴーショーグンか、ドロボーゴーショーグンか、ハードボイルド「レミーにおまかせ！」なのかも決定していません。
もちろんそれは「幕末豪将軍」である可能性もあります。
そして、最初の志と違い、もしかしたらシリーズ本編以上に、深刻でマジな話になったりするかもしれません。

あとがきで、予告編を書くなんてどうかと思いますが、いつものゴーショーグンのつもりで読まれて、石、投げられたり、カミソリを送られても困っちゃいますので……、今のうちから断っておこうと思うのです。
本編の方は、まだまだ続きそうです。
そのうち、本編もお会いできると思います。
そして、番外編の方は、○月×日にきっと……。
……なにが、○月×日だ。どうせ番外編も、そのうちだろ——。わしゃ、だまされんぞ！〈編集部担当者、怒りを込めて、うんざりと〉——
ごめんなさい。ごめんなさい。みんな僕が悪いんです。もう一度、ごめんなさい。……編集さんにも……、そしてなにより読者の皆さんに……。
ま、気楽に……、気楽にお待ち下さい……。と、いいつつ、楽しんで書くつもりの番外編だったのに、考えれば考えるほど頭がチリチリ痛くなって、すでに発病寸前。原稿は白紙……。本物のノー天気になりそうな今日この頃です。
どうなっちゃうんでしょ？……。
では……。
SEE　YOU　AGAIN！

アニメージュ文庫

戦国魔神ゴーショーグン

はるか海原の源へ

N-012

1986年2月28日 初版

作者 首藤剛志
発行者 尾形英夫
東京都港区新橋四―一〇―一〒一〇五
発行所 株式会社徳間書店
電話〇三(四三三)六二三一(大代)
振替 東京四―四四三九二番
印刷 大日本印刷株式会社
製本

〈編集担当 高橋 望〉

ISBN4 19 669550-7C0174 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

★この本を読んでの感想を右記までおよせ下さい。また、著者へのお便りもお待ちしています。

アニメージュ文庫 AM JUJUをよろしく!!

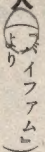
★黒い背表紙のN(ノベルス)

宇宙戦艦ヤマト完結編(前編)　絵/文/岬兄悟　金田伊功
宇宙戦艦ヤマト完結編(後編)　文/岬兄悟　絵/金田伊功
戦国魔神ゴーショーグン　絵/文/首藤剛志　なにわあい
その後の戦国魔神ゴーショーグン　絵/文/首藤剛志　なにわあい他
またまた戦国魔神ゴーショーグン 狂気の檻　文/首藤剛志　絵/天野喜孝
早瀬未沙 白い追憶　構成/河森正治　文/大野木寛　絵/美樹本晴彦
4度(たび)戦国魔神ゴーショーグン 覚醒する密林　作/首藤剛志　絵/天野喜孝
戦国魔神ゴーショーグン 時の異邦人(エトランゼ)　作/首藤剛志　絵/天野喜孝
魔法のプリンセスミンキーモモ 夢の中の輪舞(ロンド)　文/首藤剛志　絵/わたなべひろし
永遠のフィレーナ[1]　作/首藤剛志　絵/高田明美
オーディーン 光子帆船スターライト　文/小熊耕二　絵/松岡伸
戦国魔神ゴーショーグン はるか海原の源へ　作/首藤剛志　絵/天野喜孝

★青い背表紙のC(キャラクター)

六神合体ゴッドマーズ 十七歳の伝説　原作/横山光輝　文/藤川桂介
いつかきっと(『ミンキーモモ』より)　アニメージュ編集部編
夢みるプレリュード(『マクロス』より)　シナリオスタッフ共著
あれから4年…クラリス回想　アニメージュ編集部編
マクロス・ラブ・ストーリー　徳木吉春編
また、会えたね!(『未来少年コナン』より)　富沢洋子編
オーガス・コネクション　徳木吉春編
ANIMATION GALS [1]日本サンライズ編　徳木吉春編
未来警察ウラシマン倶楽部　アニメージュ編集部編
ANIMATION GALS [2]竜の子編 走りつづける少女たち　町田知之編
メモルのちっちゃなおもちゃ箱　徳木吉春編
私の名はギャブレー(『エルガイム』より)　池田憲章編

●ZガンダムHAND BOOK①② 池田憲章・徳木吉春編

●ぼくたち13人（『ザ・バイファム』より） 池田憲章編

★白い背表紙のF（フィルム）

セロ弾きのゴーシュ 原作／宮沢賢治 監督／高畑勲

「ホルス」の映像表現 解説／高畑勲

長靴をはいた猫 アニメージュ編集部編

名探偵ホームズ① 「青い紅玉」 池田憲章編

名探偵ホームズ② 「海底の財宝」 池田憲章編

話の話 解説／高畑勲

名探偵ホームズ③ 「小さな依頼人」 町田知之編

名探偵ホームズ④ 「ソベリン金貨の行方」 アニメージュ編集部編

名探偵ホームズ⑤ 「ミセス・ハドソン人質事件」 ただのかずみ編

名探偵ホームズ⑥ 「ドーバーの白い崖」 池田憲章編

★黄色い背表紙のP（ピープル）

作画汗まみれ 大塚康生

増補改訂版 だから 僕は… 富野由悠季

アニメーターの自伝 もぐらの歌 森やすじ

島本須美 これからの私 相談相手／宮崎駿

●おぼえていますか（映画『超時空要塞マクロス』より） 語り手／河森正治 絵／美樹本晴彦

★緑の背表紙のB（ザ・ベスト）

シュナの旅 宮崎駿

風の谷のナウシカ絵コンテ① 宮崎駿

風の谷のナウシカ絵コンテ② 宮崎駿

ハーフボイルドストーリー 三ツ矢雄二

それからのモモ 作／首藤剛志 絵／わたなべひろし

みちのく画集 美樹本晴彦

おやすみ！わたしのサイボーイ 佐藤元

▲天使のたまご 押井守 天野喜孝

★赤い背表紙のSFX（特撮もの）

宇宙刑事シャリバン SEKISHA! 徳木吉春編

※定価は●印が420円、▲印が480円、その他はすべて380円。本屋さんにない場合は、直接当社販売部<TEL／03―433―6231（代）>にお問い合わせください。

「ミンキーモモ」「ゴーショーグン」に次ぐ

第3の首藤剛志ワールド

永遠のフィレーナ 1

好評発売中!

アニメージュ文庫　380円

男として育てられた女闘技士（バトラー）・フィレーナ……
故郷・フィロセラの再興を目ざし、
デビス帝国との苛酷な戦いに生きる

作／首藤剛志
絵／高田明美

**第2巻は
4月中旬
発売予定!**

首藤剛志作品

戦国魔神ゴーショーグン
その後の戦国魔神ゴーショーグン
またまた戦国魔神ゴーショーグン　狂気の檻
4度(たび)戦国魔神ゴーショーグン　覚醒する密林
いつかきっとPEACH BOOK
(『ミンキーモモ』より)
それからのモモ（絵／わたなべひろし＆けいこ）
魔法のプリンセスミンキーモモ　夢の中の輪舞(ロンド)
戦国魔神ゴーショーグン　時の異邦人(エトランゼ)
永遠のフィレーナ1

カバーイラスト＝天野喜孝
カバーデザイン＝真野薫
カバー印刷＝真生印刷㈱